多賀城市文化財調査報告書第５集

市川橋遺跡調査報告書

―昭和58年度発掘調査報告書―

昭 和 59 年 3 月

多 賀 城 市 教 育 委 員 会

市川橋遺跡調査報告書

—昭和58年度発掘調査報告書—

序

多賀城市の新総合計画は、「史跡のまち多賀城」をキャッチフレーズとして、「文化のかおるうるおいのあるまち」づくりを基本目標に置いて展開されて来ている。このことは、本市がもつ歴史的背景を充分認識し、理解して「まちづくり」に生かそうとする意義の表れである。

昭和54年度以降継続的に実施している埋蔵文化財の発掘調査は、本市の歴史を解明する上で重要な意味をもっている。特に、奈良・平安時代の陸奥国府として栄えた多賀城跡の周辺地域は、古代の都市構造を解明する上で大変貴重な遺構や遺物を包蔵していると言える。

今年度発掘調査を実施した市川橋遺跡地内に包含される大臣宮(おとどのみや)地区、水入(みずいり)地区においては、平安時代の建物跡や溝跡とともに多量の遺物が発見された。そのうちでも、大臣宮地区の建物跡や水入地区の木簡をはじめとする多種類の木製品は、多賀城跡との関連を一層強めるものであり、多賀城跡南面地域の解明に一矢を投じるものと考えられる。

近年、宅地造成等による開発に対する文化財の対応は、緊急性を増して来ている。そのため、本市では専門職員の増員をはかるとともに、総合的な調査、研究、普及啓蒙活動の機能をもつ施設（多賀城市埋蔵文化財調査センター）の検討を行なっている。

本報告書は、58年度に実施した発掘調査の中で、国庫補助事業として行なった市川橋遺跡の調査成果をまとめたものである。本書が、古代多賀城を解明する一助になれば幸いである。

昭和59年３月

多賀城市教育委員会
教育長　玉　蟲　　誼

例　　言

1．本書は、多賀城市教育委員会が、昭和58年度の国庫補助事業として実施した「山王遺跡他発掘調査」の結果をとりまとめたものである。

2．調査区は、「市川橋遺跡」に包含されている浮島字高平地内（通称「大臣宮」地区）と高崎字水入地内の２箇所であるため、本報告に当っては地区ごとにまとめて報告している。

なお、遺跡の略号については前者をＩＢ―ＯＭ、後者をＩＢ―ＭＩとして記録している。

3．本書の作製についての作業分担は次のとおりである。

	大臣宮地区	水入地区
本文執筆	高倉敏明…Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ１、Ⅳ	高倉敏明…Ⅰ
	千葉孝弥…Ⅲ２・３	滝口　卓…Ⅱ、Ⅲ２・３(4)(5)、Ⅳ
	相沢清利…Ⅲ３（石器）	石本　敬…Ⅲ１・３(1)～(3)
遺構・遺物トレース	千葉孝弥、相沢清利	石本　敬、滝口裕子、我妻悦子
遺物実測	千葉孝弥、相沢清利、我妻悦子	滝口裕子、我妻悦子、阿部秀一
遺物写真	高倉敏明、石本　敬、相沢清利	高倉敏明、石本　敬
遺構写真	高倉敏明、千葉孝弥	滝口　卓、石本　敬
図面整理	千葉孝弥	滝口　卓

遺物整理（復元・拓影）…滝口裕子、我妻悦子、阿部秀一、柏倉霜代、須藤美智子、熊谷純子、黒田啓子

編　　集……高倉敏明、石本　敬

4．大臣宮地区の実測図中の基準線は、多賀城跡の基準線と同方位を示す。また、数値については多賀城政庁跡中軸線からの距離を示す。水入地区の実測基準線は、国家座標の方位をとっている。

5．調査及び遺物の整理においては、次の方々から指導、助言を受けた。

村山斌夫、岡村道雄、吉沢幹夫、佐藤和彦、佐々木常人（東北歴史資料館）進藤秋輝、白鳥良一、高野芳宏、古川雅清、後藤秀一、佐藤則之（宮城県多賀城跡調査研究所）鎌田俊昭（多賀城市文化財保護委員）

6．両地区の調査体制は次のとおりである。

	（大臣宮地区）	（水入地区）
(1) 遺跡所在地	多賀城市浮島字高平１番地外	多賀城市高崎字水入41番地外
(2) 調査体制	昭和58年10月３日～10月29日	昭和59年１月９日～２月20日

(3) 調査主体者：多賀城市教育委員会　教育長　玉蟲　誼

(4) 調査担当者：多賀城市教育委員会社会教育課文化財保護係

社会教育課長　柳原　邦男

文化財保護係長　菊池　光信

技　　師　高倉　敏明

　　滝口　　卓

嘱　　託　石本　　敬

　　千葉　孝弥（9.20採用）

　　相沢　清利（　〃　）

(5) 調査協力者：多賀城跡調査研究所、東北歴史資料館、多賀城市中央公民館、菊池三夫、蜂谷嘉生、佐藤栄夫、加藤　基、蜂谷　栄、佐藤みつ子、鈴木たつ江

(6) 調査参加者

大臣宮地区　佐藤　淳、鈴木勝彦、宮崎隆史、井口祐二、田村ゆかり、高橋綾子、鈴木和子、遠藤忠明、大槻尚子、榊原浩子、笹平克子、桜井　乾、鈴木雅文、高橋義明、佐藤敏幸、西村博幸、若生久美、大津典子（東北学院大学考古学研究部）鈴木哲子、後藤はつみ、赤間かつ子、阿部美智子

水入地区　阿部秀一、佐々木四郎、佐藤東三、伊藤藤吉、小川舛雄、志賀　孝、佐藤三夫、阿部米子、阿部美智子、阿部久子、赤間かつ子、阿部敏子、早坂ゑみ子、小野玉乃、熊谷きみ江

目　　次

市川橋遺跡周辺の考古学的環境……1

大臣宮地区

Ⅰ．調査に至る経緯……4

Ⅱ．調査方法と経過……4

Ⅲ．調査成果……8

1．調査区の地形と基本層位……8

2．発見遺構と出土遺物……9

3．整地層及び堆積層の出土遺物……17

Ⅳ．考　　察……21

1．建物跡の変遷と年代について……21

2．遺構の性格と多賀城跡との関連について……22

水入地区

Ⅰ．調査に至る経緯……35

Ⅱ．調査方法と経過……35

Ⅲ．調査成果……37

1．基本層位……37

2．発見遺構……38

3．出土遺物……44

(1)　土師器……45

(2)　須恵器……52

(3)　赤焼き土器……56

(4)　瓦……61

(5)　木製品……61

Ⅳ．ま と め……73

市川橋遺跡周辺の考古学的環境

市川橋遺跡は、多賀城市の中央部からやや西側を南北に走る砂押川によって形成された自然堤防上に立地している。遺跡の北側には、特別史跡多賀城跡が低湿地から丘陵上にかけて所在しており、東側の高崎丘陵上には、多賀城の附属寺院である多賀城廃寺跡が立地している。そして、廃寺跡を取り巻くように高崎遺跡が広く丘陵部を占地しており、同丘陵西端部分には高崎（丸山囲）古墳群が所在している。

さらに西方に広がる沖積平地上には、東西に長広く形成された自然堤防上に山王遺跡、七北田川の東岸に接して南北に広がりをもつ新田遺跡が、広範囲に立地しており、この両遺跡は市川橋遺跡や高崎遺跡とともに、古代多賀城を取り巻く大規模な遺跡群を構成している。その中でも、多賀城跡の西から南に隣接している本遺跡は、極めて重要な部分に位置している。

これまで、多賀城跡の周辺遺跡の調査が進んで来ており、部分的ではあるが、少しづつ内容が明らかにされて来ている。本市の西端部に位置する新田遺跡と山王～南宮地区を包含している山王遺跡からは、古墳時代前期～江戸時代末期に及ぶ遺構が発見されている。その中でも、特に注目されるものは、昭和57年度から調査を実施している山王字南寿福寺地内で発見された中世の環濠遺構である。幅約３ｍ、深さ約 1.5ｍの二重堀をめぐらした内側から、掘立柱建物跡や井戸跡が発見され、多量の中世陶器などが出土しており、今後多賀城の中世を究明する上で貴重な資料となるものと思われる。[1] また、山王字西町浦地区では古墳時代の土壙墓群や石製模造品が多量に出土し、大規模な古墳時代の集落が存在していたことが推察されている。[2]

一方、市川橋遺跡東側の高平遺跡からは、古代の建物跡や竪穴式住居跡などが発見されている。また、高崎の中央公園建設地内の丘陵部からは合口甕棺が出土し、さらに、南方の旧表地区の市営住宅建設に伴う事前調査でも、甕棺が１基出土している。

昭和57年５月に東田中地区の志引遺跡で、道路の断面から旧石器が発見され、今年度に実施した発掘調査の結果、後期旧石器時代の下層から前期旧石器に属する石器が多量に出土し、海岸部ではじめての発見として話題を呼んでいる。[3]

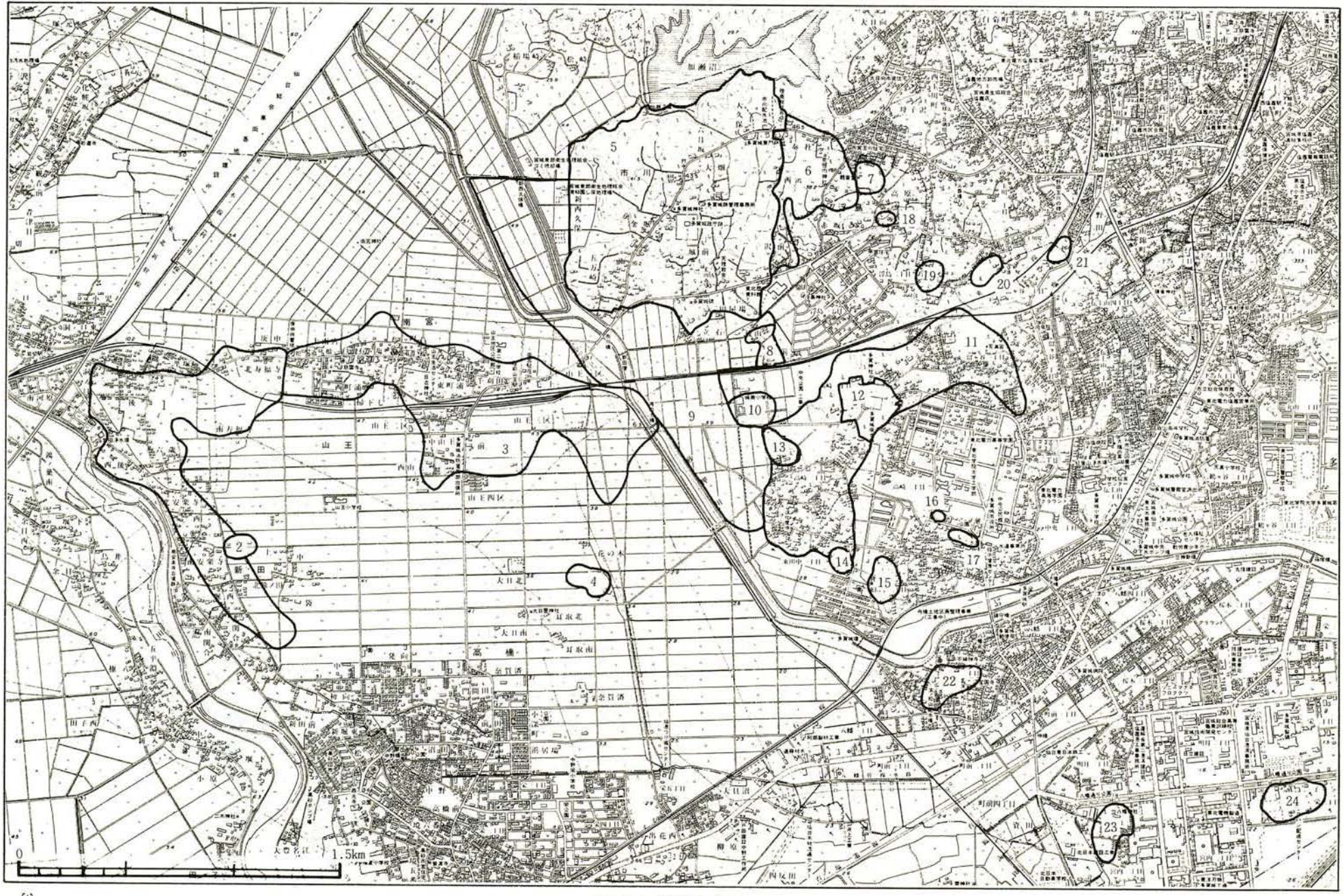
市川橋遺跡においても、数ヶ所で発掘調査が実施されている。今回調査を実施した地点から、西方約80ｍ離れた水入地区の水田部や城南小学校西側農道の下水道管埋設工事に伴う発掘調査では、水田下約40cmに遺物包含層が認められ、多量の須恵器や土師器が出土している。そして、その下面から建物跡、井戸跡、溝跡などの遺構が発見されている。また、多賀城の南辺築地に近接する市川字館前地区の水田部からは、掘立柱建物跡、一本柱列、井戸跡、大溝跡、道路状

遺構が発見され、多量の土器類や瓦とともに青磁、白磁、緑釉、灰釉陶器、硯、木簡、皇朝十二銭（富壽神寶）などが出土している。[4] さらに、多賀城跡外郭築地の外側に位置する館前地区の小高い台地上から桁行7間、梁行4間の四面廂をもつ建物跡を中心とする掘立柱建物跡6棟が発見され、多賀城跡に関連する官衙ブロックと考えられている。[5]

以上のことからも、市川橋遺跡は多賀城跡を取り巻く大規模な遺跡群の中でも、特に多賀城跡との関係を想起させる内容をもっており、多賀城跡の前面に所在する位置的な環境とともに陸奥国の国府として栄えた古代の多賀城を解明する上で重要な位置を構成している。

表1　遺跡地名表

遺跡番号	遺跡名	所在地	立地	種別	時代
1	新田遺跡	新田	自然堤防	集落跡	古墳・奈良・平安
2	安楽寺遺跡	新田	〃	寺院跡	古代・中世
3	山王遺跡	山王・南宮	〃	集落跡	古墳・奈良・平安
4	大日北遺跡	高橋字大日北	〃	散布地	奈良・平安
5	特別史跡多賀城跡	市川・浮島	丘陵	国府跡	〃
6	西沢遺跡	市川・浮島	〃	散布地	〃
7	法性院遺跡	浮島	丘陵中腹	散布地・寺院跡	〃
8	館前遺跡	浮島	分離丘陵	宮衙・館跡	平安・中世
9	市川橋遺跡	市川	沖積平野	集落跡	奈良・平安
10	高平遺跡	浮島・高崎1丁目	〃	〃	〃
11	高崎遺跡	高崎1・2丁目、留ヶ谷1丁目	丘陵	寺院跡・館跡・集落跡	奈良・平安・南北朝
12	特別史跡多賀城廃寺跡	高崎1丁目・2丁目	〃	寺院跡	奈良・平安
13	高崎古墳群	高崎2丁目	丘陵麓	高塚古墳（円）	古墳
14	東田中窪前遺跡	東田中1丁目	〃	散布地・館跡	中世
15	志引遺跡	東田中2丁目	丘陵	〃	奈良・平安・鎌倉
16	稲荷殿古墳	中央3丁目	丘陵（麓）	高塚古墳（円）	古墳（後）
17	桜井館跡	中央1丁目	丘陵	館跡	鎌倉
18	高原遺跡	浮島字高原105	〃	散布地	奈良・平安
19	小沢原遺跡	浮島3丁目	〃	〃	〃
20	野田遺跡	留ヶ谷	〃	散布地・館跡	奈良・平安・中世
21	矢作ヶ館跡	留ヶ谷2丁目	〃	〃	奈良・平安・鎌倉
22	八幡館跡	八幡2丁目	〃	〃	奈良・平安・中世
23	八幡沖遺跡	八幡・宮内1丁目	平地	散布地	奈良・平安
24	東原遺跡	栄3丁目	砂堆	〃	〃



第１図　遺跡分布図

大臣宮地区発掘調査報告

Ⅰ　調査に至る経緯

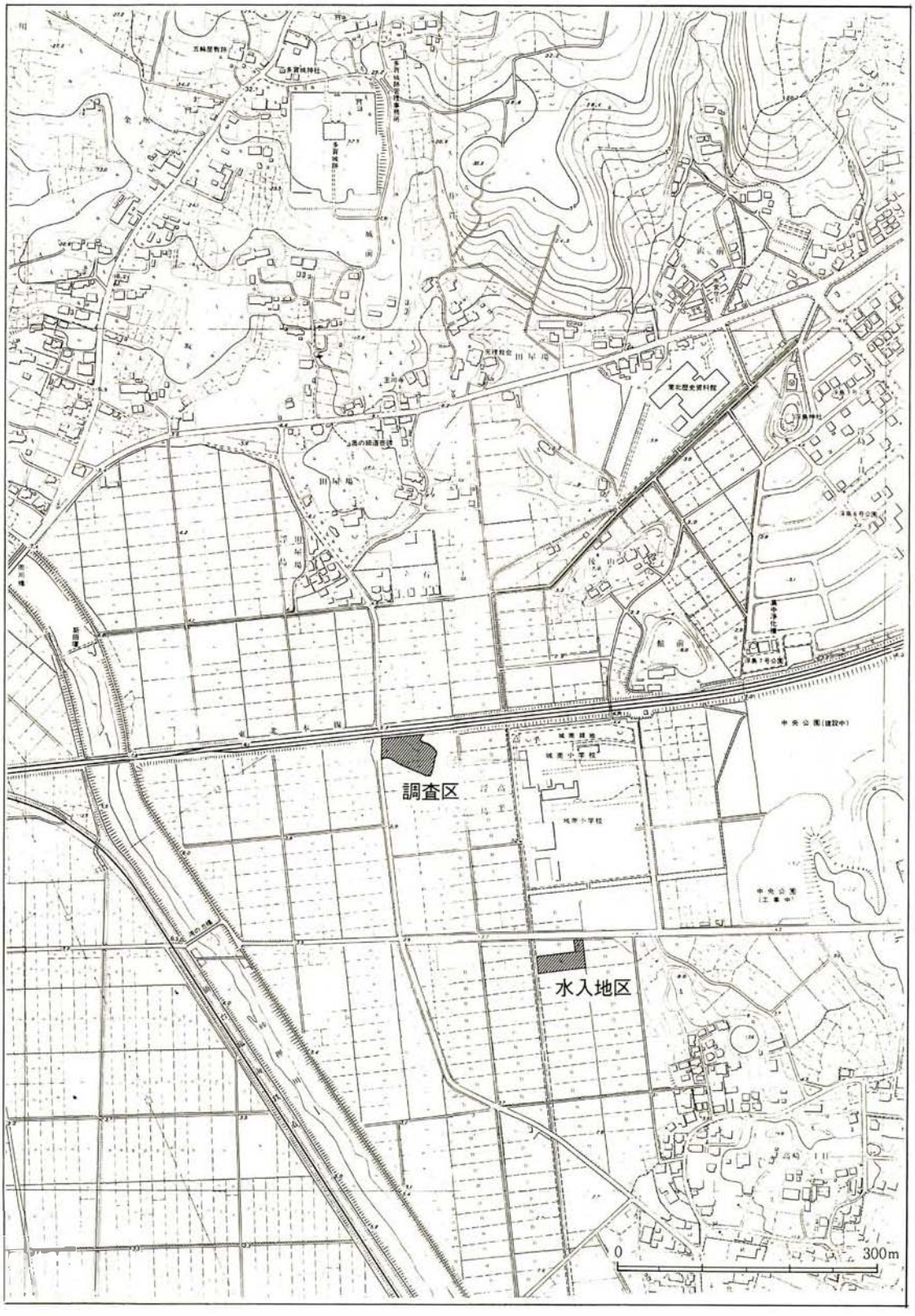
多賀城跡周辺遺跡の遺構確認調査は、昭和55年以来継続事業として実施して来ている。特に近年、市の西部地域に当る山王、南宮、新田地区において宅地造成が急増しており、遺跡内での大規模な開発行為による発掘調査が年間を通して実施されている状況である。

当該地における調査の経緯は、昭和56年に遡る。その当時は、開発についての具体的な図面などはなかったが、昭和54年に多賀城跡の城外に位置する浮島字館前地区の台地上部の発掘調査により、古代の掘立柱建物群が発見され、このことから、多賀城跡の南面に位置する微高地上には、多賀城に関連する遺構が存在している可能性が極めて高いことが考えられていた。当然のことながら、周辺の水田部より約1～1.5mの比高差をもつ当地も、館前地区に類するものとして促えていたのである。しかしながら、通称「大臣宮」と呼ばれていた当地は、一段高い台地形を呈する面積が極めて狭く、北側は東北本線の路線敷となり、西側は市川から高崎へ通じる市道敷となって、相当大きく形状が崩されていることは明らかであった。この台地上には、かつて石の祠が祭られていたと言われ、現在は浮島神社に合祠されて「大臣宮」と刻まれた石柱が建てられているだけであった。この大臣宮地区について、近い将来に開発されることが予想され、遺構の存在を確認する目的で、昭和56年7月に台地周辺部分の平坦面の試掘調査を実施した。その結果、周辺平坦部分は地山面まで削平を受けており、その上に砂質土が厚く堆積し、旧表土はもちろん遺構、遺物は全く確認できなかった。

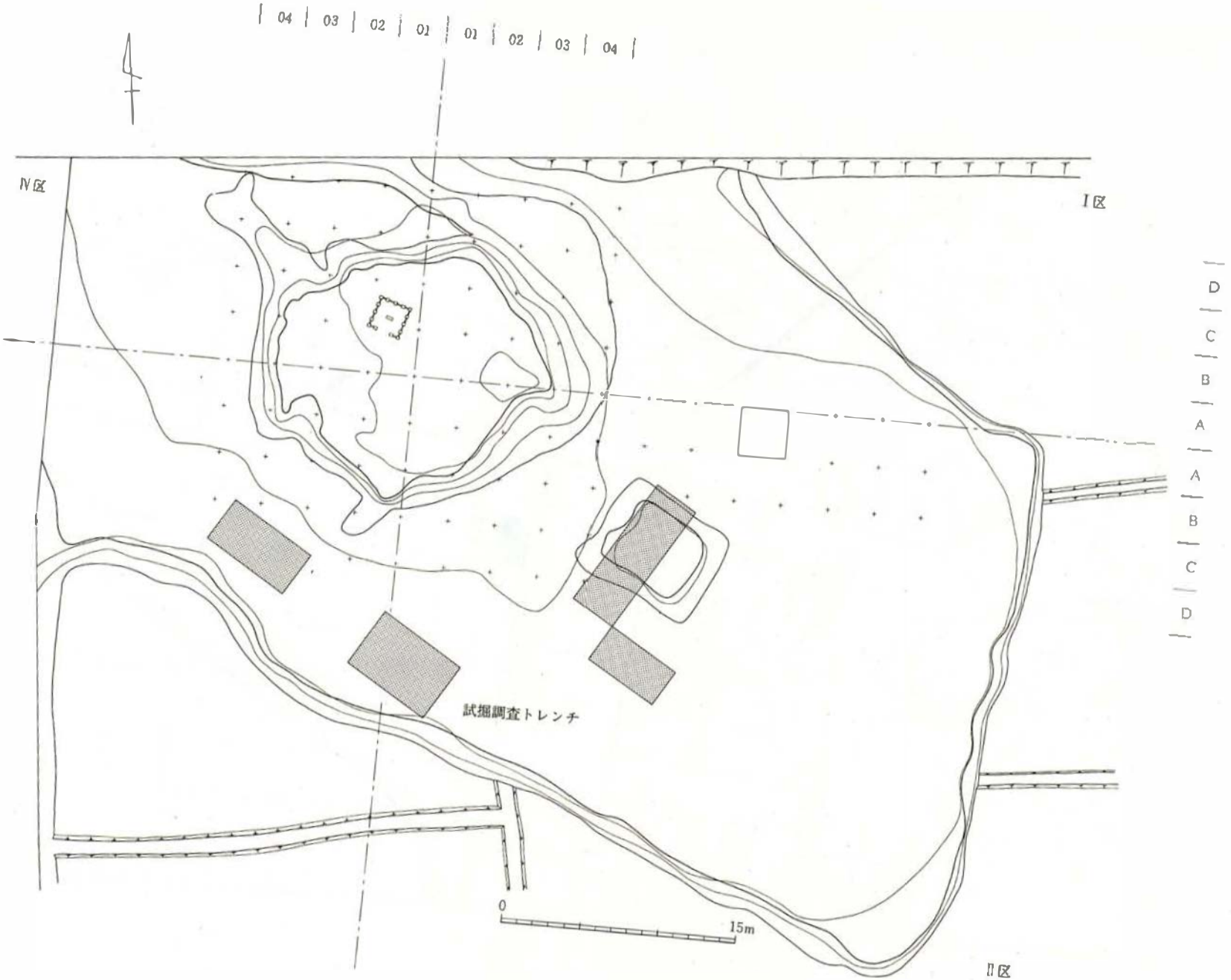
昭和58年2月7日、開発行為に係る事前協議願書が都市計画課へ提出され、同14日に市教育委員会に照会があったので、本件申請について検討を行なった。その結果、開発区域の中に大臣宮が祭られている小高い台地の部分も含まれているため、その部分の発掘調査について申請者と協議を行ない、その話し合いに基づいて今回の調査を実施したものである。

Ⅱ　調査方法と経過

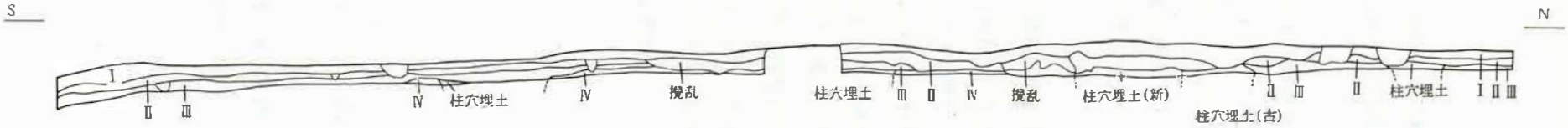
今回の発掘調査は、大臣宮が祭られている小高い台地部分を中心に実施した。この丘の形状は、表面観察でも東北本線が走る北側から西側、そして、南側にかけて相当削平を受けていることが明らかであり、台地上面平坦部も削られていることが予想されたため、遺構の存在が危



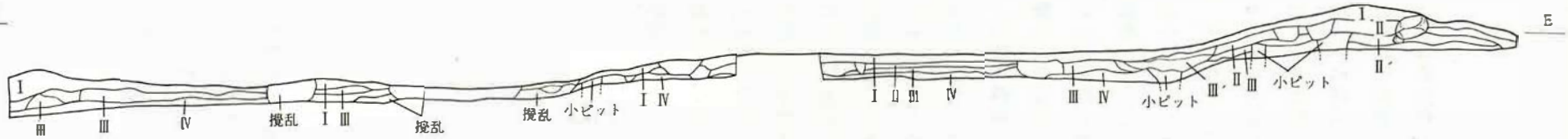
第２図　調査区位置図



第3図　調査区地形図及び設定図



南北セクション図



東西セクション図

土層観察表

層位	土　色	土　性　、　そ　の　他
Ⅰ	暗褐色土(表土)	砂質、粘性及びしまりなし、根の混入が著るしい。
Ⅱ	茶褐色土	〃　〃　若干の黄褐色土ブロック、礫を混入する。
Ⅱ′	黄茶褐色土	〃　粘性はないがややしまりをもつ。黄色粒子を含む。
Ⅲ	明褐色土	〃　〃　しまりをもつ。茶褐色土をまだらに含む。
Ⅲ′	暗褐色土	〃　〃　Ⅲ層に比べてやや柔質。
Ⅳ	黄褐色土(整地層)	粘土質、粘性及びしまりをもつ。粘性のつよい灰褐色土をまだらに含む。

第4図　調査区セクション図

ぶまれていた。そこで、今回の調査は、上面平坦部及び傾斜面における遺構の検出を主目的として実施した。調査方法としては、開発区域全体の地形測量を行ない、基準杭を設定して中軸線を決め、3ｍ方眼のグリットを設定して調査区の全面調査を実施した。

調査は10月3日より開始した。発掘調査区内の除草作業を行ない、地形測量、基準杭の設定、グリット杭打ちを行なう。調査区は、東西、南北中軸線により、北東区から時計回りにⅠ～Ⅳ区とした。グリット名は、中軸線中心点から各々外側へ東西に01、02、03…、南北にA、B、C、…、と称した。上段平場Ⅱ区から掘り込みを開始する（10月7日）。Ⅰ～Ⅲ区の表土剥離、遺構の検出作業を行なう。Ⅲ区のA―01～03グリットにかけて建物跡柱穴を発見し、Ⅰ区、Ⅱ区においても柱穴の確認作業を行なう。Ⅲ区で整地層を認める。柱穴は整地層を切っていることを確認するとともに、Ⅰ区でも柱穴を検出する（10月13日）。建物跡は、台地上面平場西側に位置することが予想され、東西、南北セクションの実測を行なってベルトを除去する。Ⅳ区の調査に入り柱穴を確認する。この時点で、建物跡は2棟以上存在していたことが予想された。広い範囲に整地層を認め、柱穴掘り方の掘り込みを始める。また、径10～15cm程度の小ピットが広く分布しており、ピット内から赤焼き土器が出土し、柱痕跡をもつピットも検出される。建物跡は南北2間、東西3間以上の規模であることを確認しＳＢ01と称する。柱穴に2～3回の切り合いをもつことが判明した（10月18日）。ＳＢ01柱穴の調査を行なう。柱穴の重複関係の再検討を行ない、4回の切り合い関係を確認する。柱穴の埋土セクション図を作成しながら柱穴の掘り込み、実測図の作成、写真撮影を行なう。さらに、多賀城跡との関係を調べるため、多賀城南門跡の座標を利用して調査区基準杭までトラバース測量を行ない、10月29日で調査を終了した。

Ⅲ　調査成果

1．調査区の地形と基本層位

まず、調査区周辺部の地理的環境について述べると、大臣宮の西方約 300m を南下する砂押川によって形成された自然堤防上に立地する本遺跡は、川に沿って南北に広がる水田部分が遺跡の主体を構成している。海抜2～4ｍの間に立地する水田部は、北から南へ、西から東へ行くに従って次第に低くなり、浮島字矢中から現在城南小学校が所在する高平地区の沖積平地東端部分は、スクモ層が厚く堆積する低湿地帯となっている。

大臣宮は、多賀城跡南面に広がる水田部のやや北寄りに位置し、海抜 3.4～ 3.6m の水田部より約1～ 1.5m の比高差をもつ平坦な台地状の高まりを有しており、その台地の西側に、さ

らに1～2mの高さをもつ小高い部分が位置している。大臣宮が祭られている小高い丘の最も高い部分で海抜7mを計り、水田部との比高差は約3.5mである。この小高い丘の地形は不整形を呈しており、丘の周辺がかなり崩されている様相を示している。このことについては、地権者も以前はもっと高く、広い小山の形を呈していたが、道路工事で削られ、さらに、砂押川の増水の際に土取りが行なわれたため現在の部分だけが残った、と明言している。この台地の一部が、市道敷西隅に僅かに認められるだけで、原形は全く不明である。

次に、調査区の基本層位について述べる。遺構の検出面までの層位は、基本的に3層に分けられる。しかし、全体的に上面が削平を受けているうえに、木の根等による攪乱が著しく、層位に多少のみだれが生じている。第1層は、表土で暗褐色の腐植土層である。第2層は、茶褐色の砂質土層で層中に少量の小礫を混入している。第3層は、明褐色の砂質土層でしまりを有している。この層の下から、粘性及びしまりをもつ黄褐色の整地層が検出された。建物跡の柱穴は、この整地層を掘り込んでつくられている。

2．発見遺構と出土遺物

今回の発掘調査によって発見された遺構は、掘立柱建物跡2棟と小ピット群である。しかし、台地は削平が著しいため遺構の保存状態は悪く、建物跡も全体の規模を知るものはない。出土遺物についても、土器類はほとんどが小破片であるため、図示できるものは、ごく僅かである。

なお、堆積土中から出土した石器の中に旧石器時代に属するものが数点認められた。

以下に、遺構と遺物について記述することにする。

ＳＢ０１建物跡

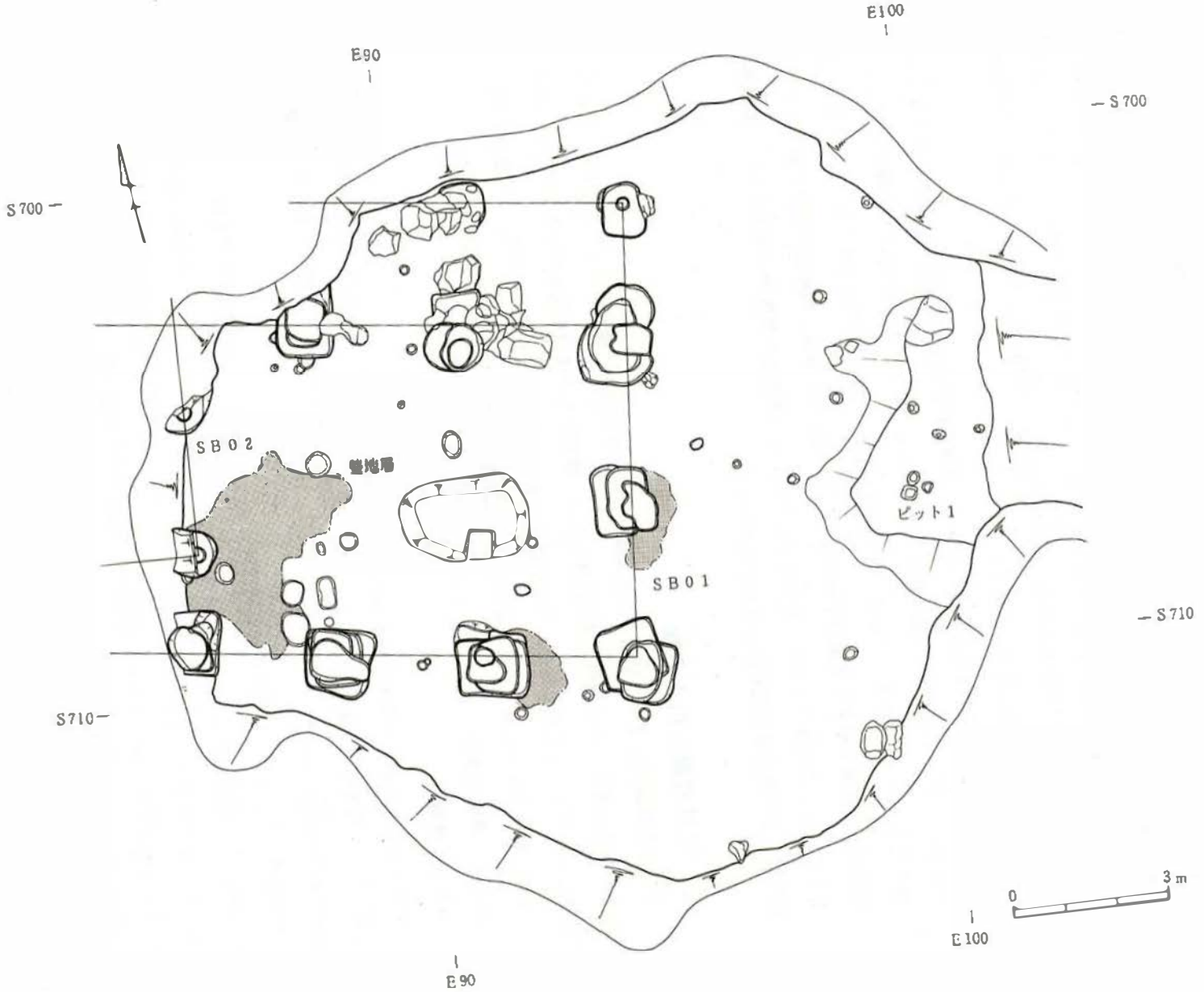
ＳＢ０１は、台地の西半部で検出された掘立柱建物跡である。検出面は、丘陵部のほぼ全域で認められた整地層面であるが、削平を受けて残存していない部分では地山であるローム層及び凝灰岩質の岩盤である。

本建物跡はＡ～Ｃの三時期の重複が確認されているが、柱穴がほぼ同位置で重複しているため部分的にしか把握できなかったものが多く、柱穴の組み合わせについては全体の蓋然性から推定した。建物の方向は保存の良いＣ期についてみると、多賀城政庁の中軸線に対し、東妻柱列で北が3度28分東に偏しており、南側柱列で西が6度35分北へ偏している。

以下古い順にその概要を記していく。

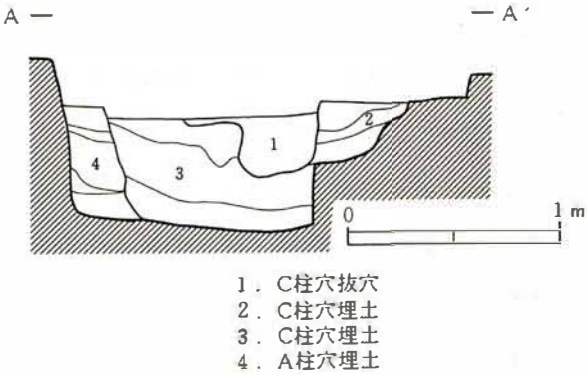
(1) ＳＢ０１Ａ

南北2間、東西3間以上の東西棟掘立柱建物跡である。後述するＳＢ０１Ｂとの新旧関係はわずかに南側柱列の東妻から2間目と3間目の柱穴で確認することができた。柱位置を想定できる柱穴が殆どないので建物の方向及び柱間などは不明であるが、柱間についてはＣ期のもの



第5図 遺構全体図

を参考にすると3m前後であったと考えられる。柱穴は一辺約 1.3m 前後のほぼ方形で、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。埋土は黄褐色土と暗褐色土とが互層をなしているものが多い。

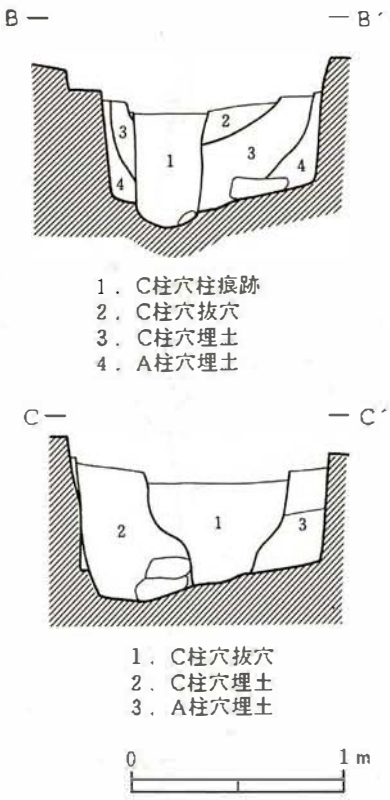


第6図　柱穴セクション図

出土遺物としては、柱穴埋土から須恵器杯、土師器杯・甕、丸瓦などの破片が出土している。いずれも小片で特徴的な要素を指摘できるものは少ないが、土師器杯には底部をヘラケズリしたものや調整に際しロクロを用いていないものがみられる。また、石鏃、剝片各1点が出土している。

(2)　ＳＢ０１Ｂ

南北2間、東西3間以上の東西棟掘立柱建物跡である。この時期のものは、Ａ～Ｃ期の中で最も保存状況が悪く、東妻棟通り下の柱穴などはＣ期の柱穴でほとんど破壊されており、地山面に残ったわずかなくぼみからその存在を想定している。建物の柱間や方向については、柱位置を想定できる柱穴がないため不明であるが、柱間についてはＣ期のものと同様に3m前後であったと考えられる。柱穴の平面形は一様ではなく、埋土は黄褐色凝灰岩の小粒を含む褐色土である。



第7図　柱穴セクション図

出土遺物としては、柱穴埋土から須恵器甕、赤焼き土器、丸瓦の小片が数点出土している。

(3)　ＳＢ０１Ｃ

南北3間、東西3間以上の東西棟北廂付掘立柱建物跡である。建物の柱間については、柱痕跡や柱の当たりが残っているものから柱位置を想定すると、桁行が北側柱列の東妻より1間目が3.14m、北入側柱列で東から3.09m・2.97m、南側柱列で東から2.97m・2.98m・2.84mであり、総長については不明である。一方梁行柱間は東妻で北から2.45m（廂）・3.08m・3.23mで総長8.74mである。柱穴の平面形は一様でなく、埋土は地山ブロックを多く含む暗褐色、ないし暗灰色砂質土である。これらの柱穴の中には柱を受けるための石を底面に据えているものもある。

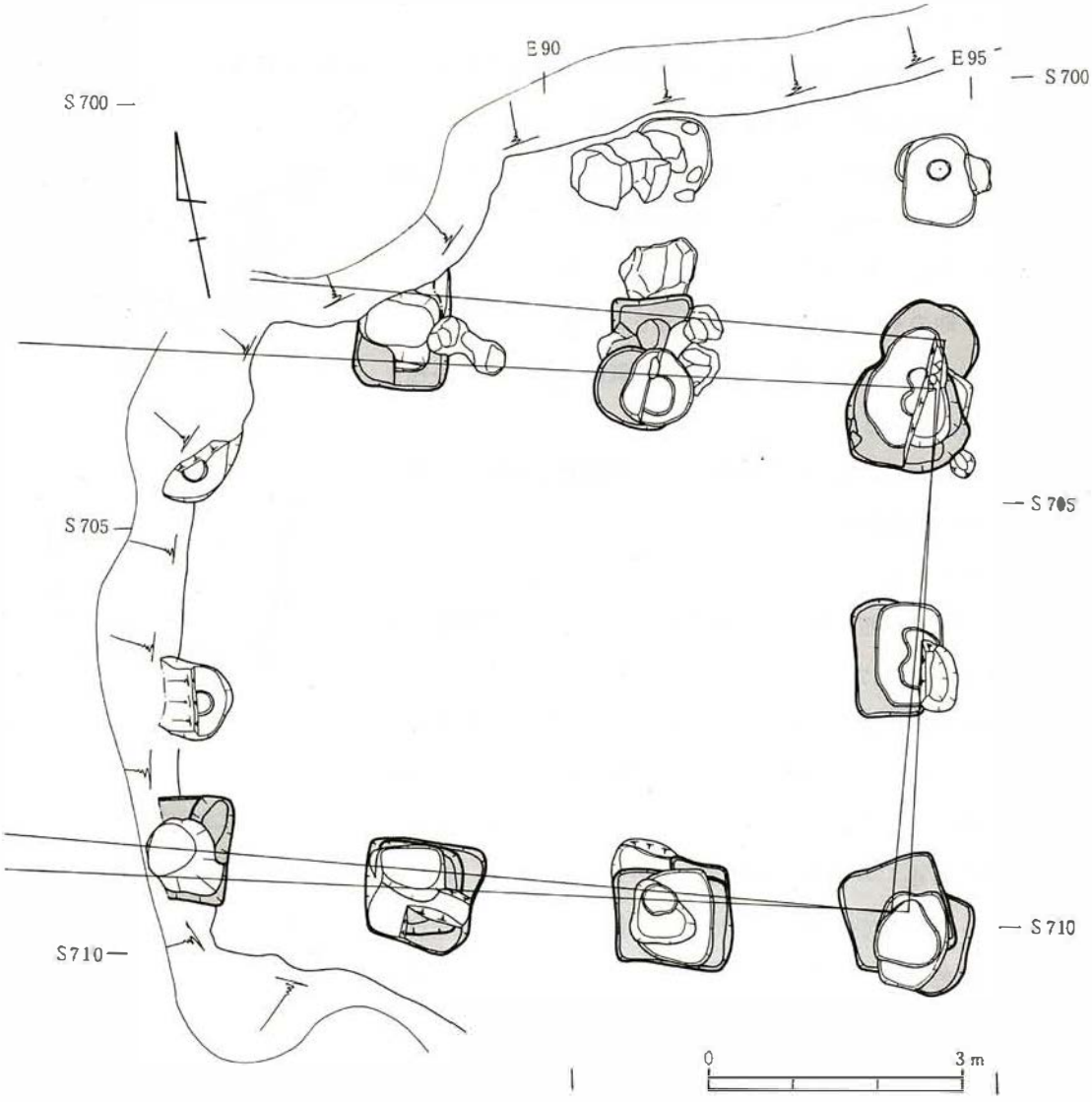
なお、本建物には柱抜き取り穴が伴っており、それは北側柱列の二つの柱穴を除く他のす

べての柱穴で認められた。抜き取りの方向及び穴の形状などは一様でない。南側柱列で東妻から3間目の柱穴抜き穴には灰白色火山灰の小ブロックが混入していた。

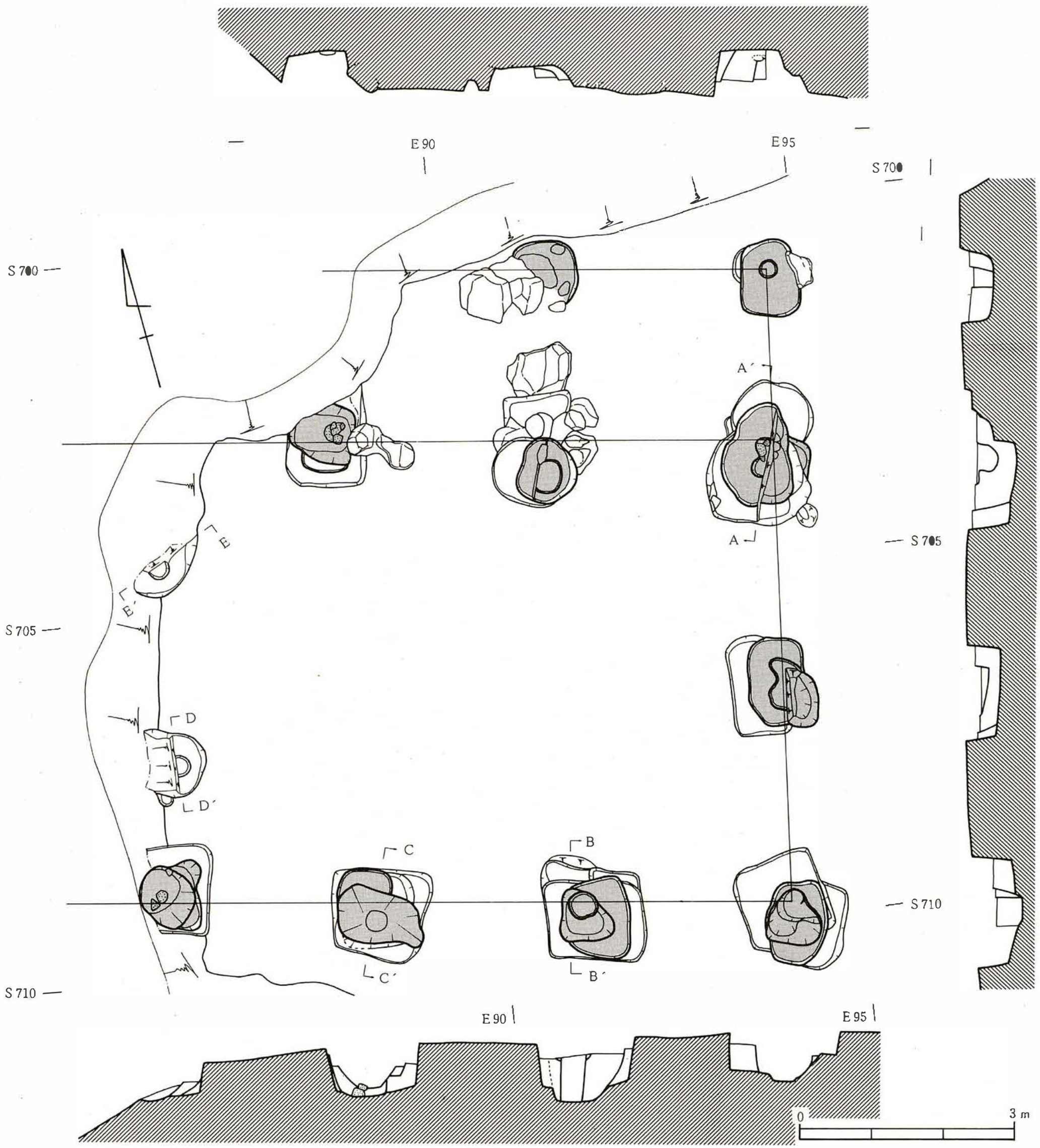
出土遺物としては柱穴埋土から須恵器杯・短頸壺蓋、土師器杯、赤焼き土器杯などの小片が出土している。須恵器杯では、底部に回転糸切り痕のみられるものがある。また抜き穴からは須恵器杯・甕、土師器杯・甕、赤焼き土器杯・高台杯・皿、瓦（第10図）などが出土している。須恵器、土師器、赤焼き土器はいずれも小片で図示できるものはない。瓦はすべて丸瓦の破片で、特徴的な要素を指摘できない。

ＳＢ０２建物跡

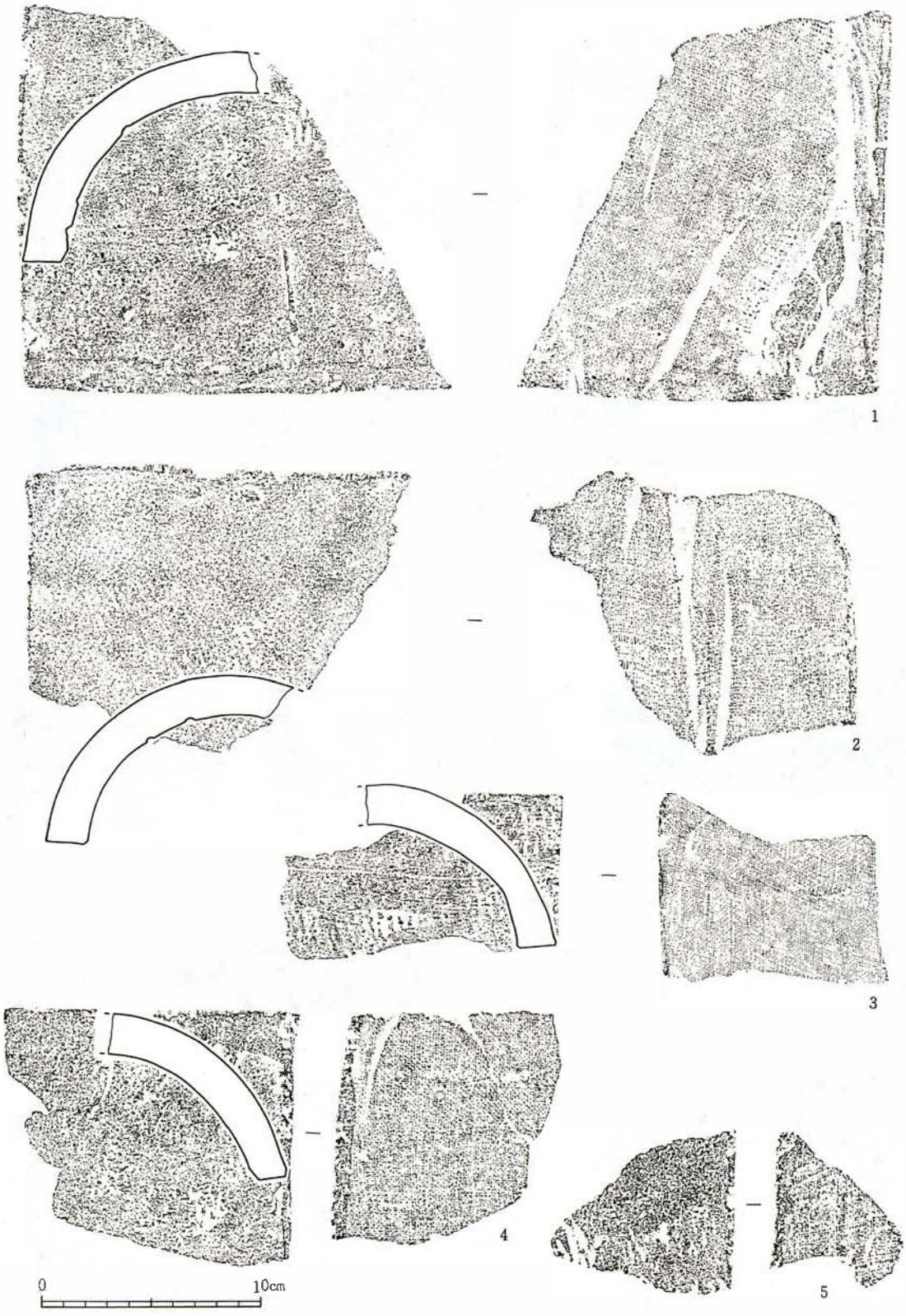
ＳB02は、台地西端の整地層上で検出した南北に並ぶ二個の柱穴である。これと組み合う他の柱穴は東側と南側では存在せず、北側と西側では丘陵が大きく削り取られているため不明で



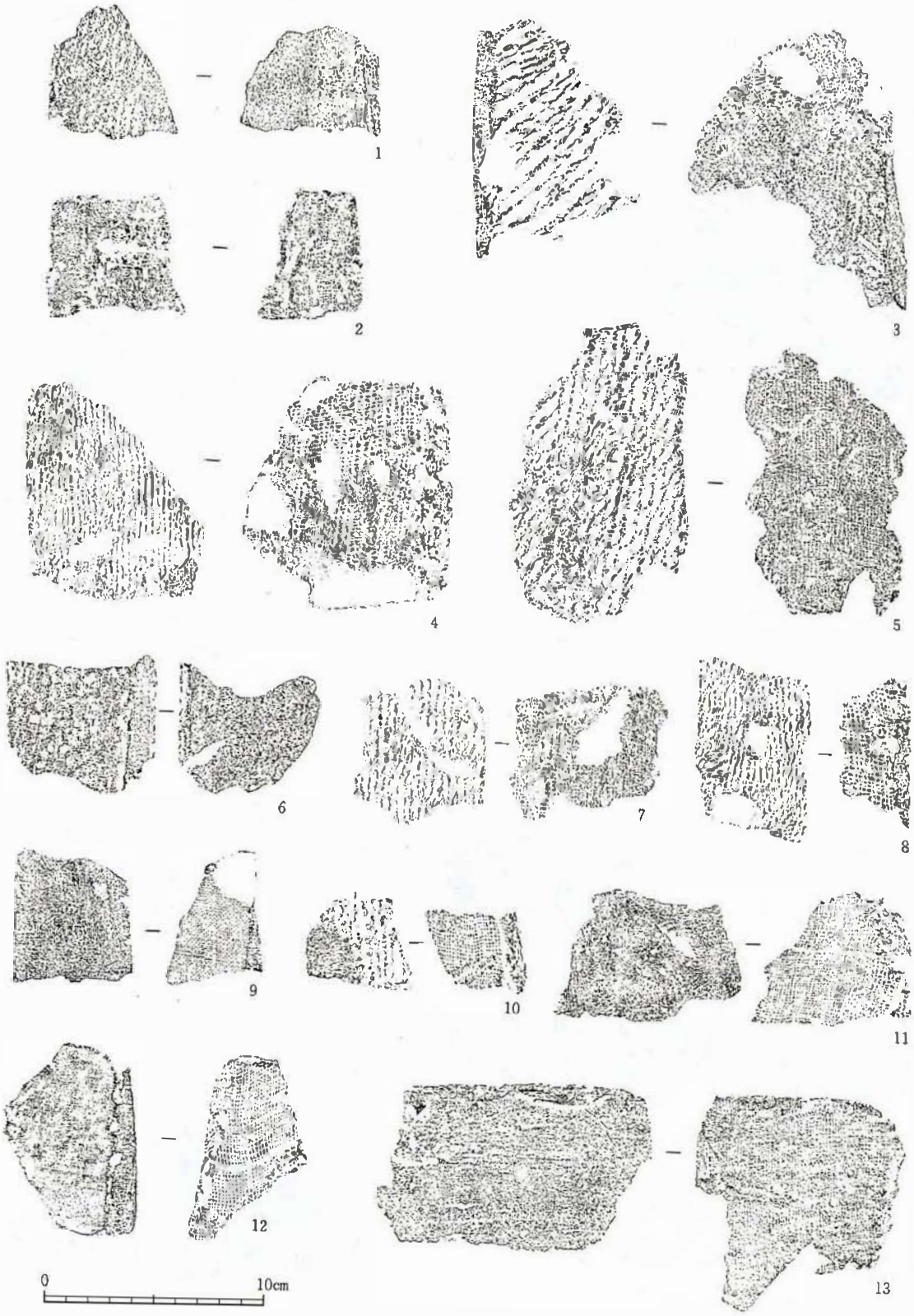
第8図　ＳB01A・B建物跡



第９図　ＳＢ01Ｃ建物跡



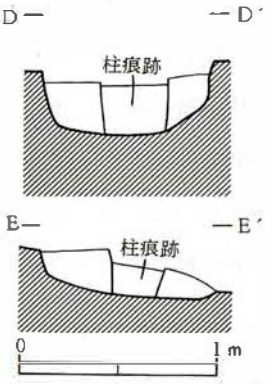
第10図　ＳＢ01Ｃ抜き穴出土瓦



第11図　堆積層出土瓦

ある。ここでは、一応前述の状況より、二個の柱穴を東妻または東側柱列の一部と考え、建物跡としてとらえておきたい。両柱穴で柱痕跡を確認している。これより柱間は2.70mであり、方向は多賀城政庁の中軸線に対し北が1度39分東に偏している。柱穴はいずれも削平を受けているため平面形は明らかでないがほぼ円形とみられる。柱径は柱痕跡より25～30cmである。埋土は、地山粒や炭化物を含む褐色土である。

ＳＢ01建物跡とは重複しているが、相互の柱穴に直接の切り合いがないため新旧関係は不明である。遺物は、出土していない。



第12図　柱穴セクション図

小ピット

丘陵部の全域にわたって分布している小穴である。第Ⅱ層上で検出したものもあるが大部分は第Ⅲ層上で検出している。東半部で検出したものの中には円形の柱痕跡を有するものが多く見られたことから、これらは建物あるいは柱列を構成するものかとも考えられるが組み合わせは判然としない。平面形は円形のものが大部分であるが方形のものもある。

ピット1は平面形が方形を呈し、深さ38cmを測るものである。埋土から赤焼き土器皿2点が重なって出土している。それらはいずれもロクロ調整されており、底部には回転糸切り痕を残している。ヘラミガキ・黒色処理などの二次調整は一切行なっていない。酸化炎焼成されており、浅黄橙色を呈している（第13図1・2）。

他の小ピットからも須恵器甕、土師器杯・高台杯・甕、赤焼き土器杯・台付皿・鉢などが出土しているが、小片のため図示できるものはない。赤焼き土器では台付皿の出土量が比較的多い。

3．整地層及び堆積層の出土遺物

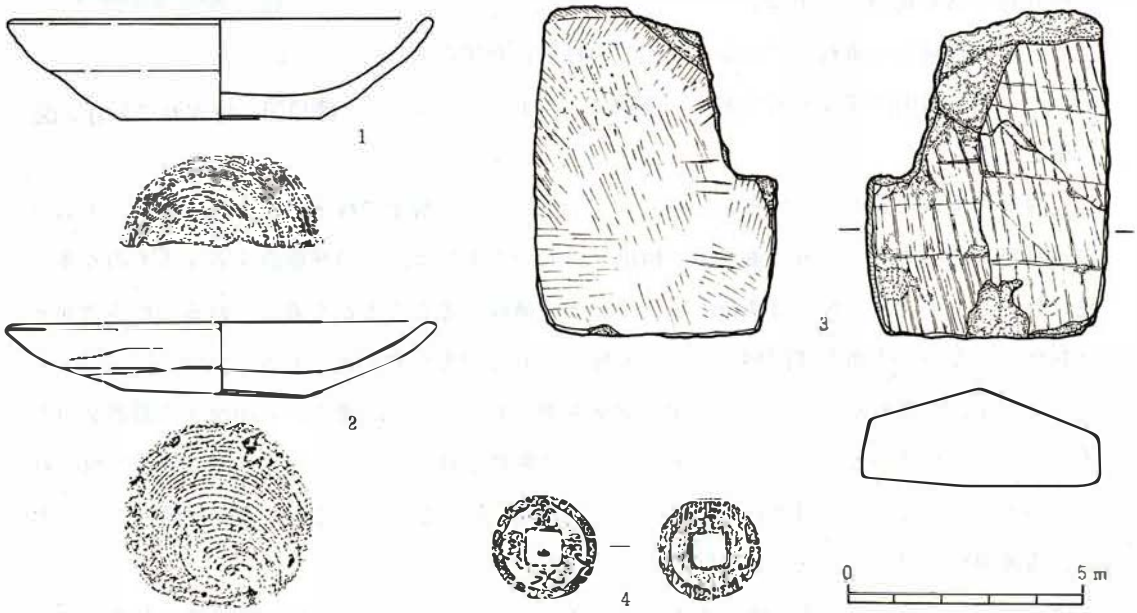
第1層・第2層・第3層・整地層（第4層）から出土した遺物としては須恵器、土師器、赤焼き土器、陶磁器、瓦、石製品、石器、古銭などがある。全体に出土量は多くないが、比較的多く出土しているのは第1層・第2層からで、第3層・整地層からは少ない。特に後者から出土しているものは摩耗が著しく、土師器と赤焼き土器との識別が困難である。以下、各層から出土している遺物について説明するが石器に関してはＳＢ０１建物跡出土のものをも含めて一括して述べることにする。

第1層・第2層から出土した遺物としては須恵器、土師器、赤焼き土器、陶磁器、瓦、石製品、石器、古銭などがある。須恵器と土師器には杯・甕、赤焼き土器には杯・高台杯があるが図示できるものはない。陶磁器はすべて近・現代に属するものである。瓦には丸瓦と平瓦とが

あるがいずれも小片で特徴を指摘できるものではない。石製品としては砥石が1点出土している（第13図3）。石材は凝灰質泥岩で色調は灰白色を呈する。古銭は、寛永通宝2点と近代の銭貨が数点出土した。第13図4は背面に「元」字のある寛永通宝である。

第3層から出土した遺物としては、土師器と赤焼き土器がある。土師器には杯があり、赤焼き土器には、杯・高台杯がある。

第4層からも土器が数点出土しているが、摩耗のため土師器か赤焼き土器か識別できない。



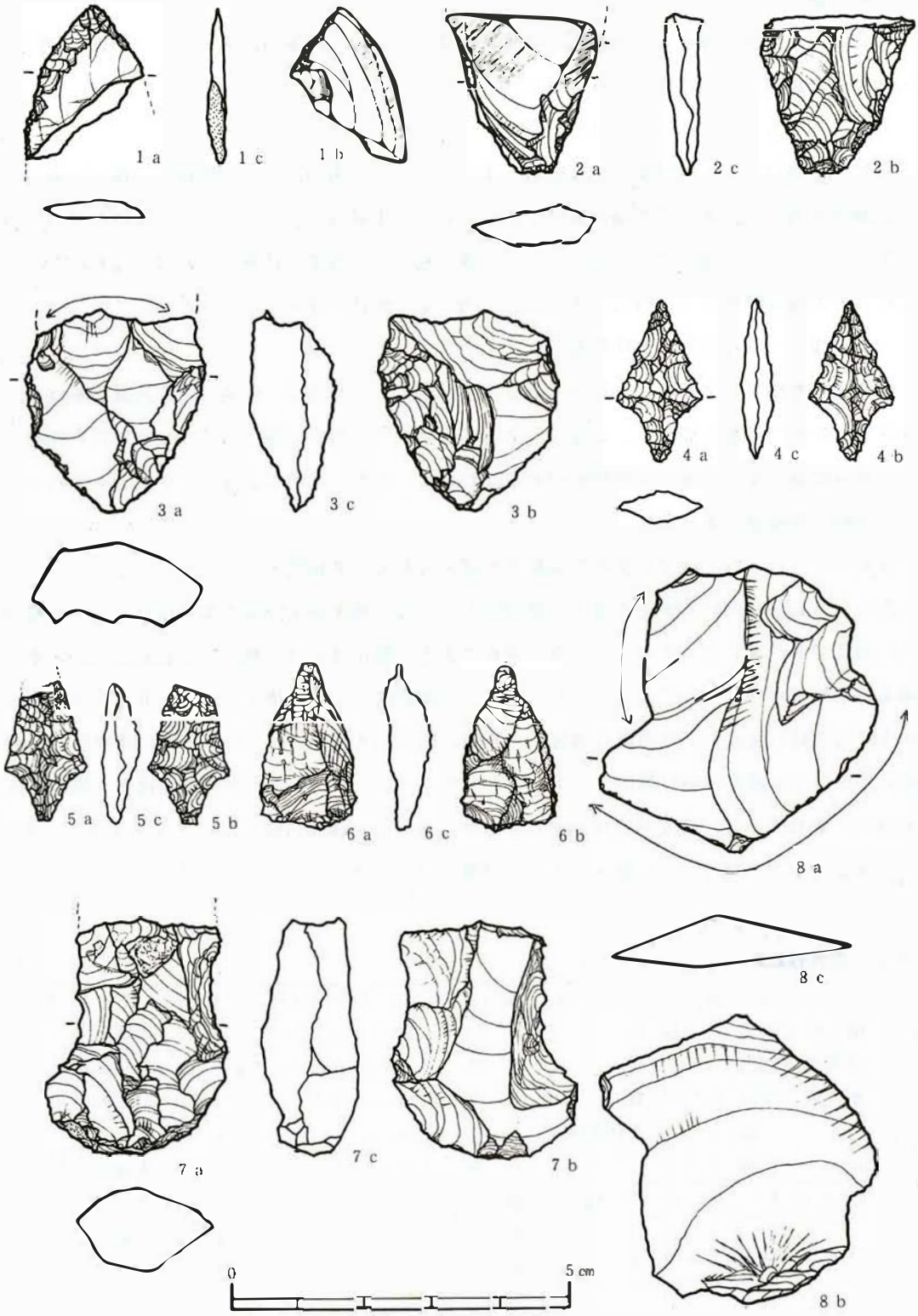
第13図　出土遺物

石　器

石器は、堆積土及び柱穴埋土より出土している。図示したものの他に、若干の流紋岩製剥片がある。以下、器種ごとに分類して記述していくことにする。

〈槍先形尖頭器〉

3点とも欠損品であり全体の器形が知れるものはないが、ほぼ木葉形を呈していたものと思われる。第14図1は、扁平な剥片を素材としている。b面に主要剥離面を残し、同面右縁辺を除いて周辺加工が施され、尖頭部（基部とも考えられる）を作り出している。2は、a面に主要剥離面を残した半両面加工の尖頭器基部である。a面にほとんど二次加工が加えられないのに対して、b面は入念な押圧剥離による調整が認められる。3は、やや厚手の尖頭器基部で、上半は折れのため欠損している。両面とも大きめの剥離調整の後、さらにa右側縁、b左側縁に基部作り出しのための整形剥離が加えられる。また、折れの後に（矢印の範囲）微細な剥離痕が認められる。


1 a
1 c
1 b
2 a
2 c
2 b
3 a
3 c
3 b
4 a
4 c
4 b
5 a
5 c
5 b
6 a
6 c
6 b
8 a
8 c
7 a
7 c
7 b
8 b
0
5 cm

第14図　石　　器

〈石　鏃〉

2点とも素材面を残さない両面加工の凸状有茎石鏃である（第14図4・5）。比較的小形で、入念な押圧剥離が丹念に加えられている。

〈ピエス・エスキーユ（くさび形石器）〉

石材は、縞目の入った特徴的な黒耀石を使用している（第4図6）。側縁の一端（b面右）に原礫面を残し、両面には両極剥離痕が認められる。上縁辺は、上方からの加撃により台形状に変形している。下縁辺には、細かいツブレ痕が見られ、黒耀石特有の光沢は失なわれている。これらの両極剥離痕と上下縁辺の特徴は、使用による痕跡と理解しておきたい。

〈二次加工のある石器（篦状石器？）〉

やや分厚な感じのする篦状の石器である（第14図7）。b面は、中央に主要剥離面を残し、側縁に大きめの剥離を加える。a面は、全面に丁寧な二次加工が施される。a、b両右側縁には、さらに抉りを入れるための整形がおこなわれる。また、火熱によるハジケも認められる。

〈微細な剥離痕のある剥片〉

a面の左縁辺、右下縁辺に微細な剥離痕が認められる（第4図8）。

出土した石器についてまとめると、第14図1～3は、槍先形尖頭器の尖頭部もしくは、基部の破損品であるとした。これらの石器の固有の形態、製作技術は、概して旧石器時代終末から縄文時代初頭の特徴としてとらえられている。宮城県内では、新提上遺跡E－Ⅱ層上部、新田B遺跡肘折軽石層直下、馬場壇A遺跡E－Ⅱ層[6]、座散乱木遺跡D－3区[7]、小梨沢遺跡肘折軽石層直下[8]出土の石器群の中に類似する例が求められる。4・5の尖頭部と基部の境が明確な有茎石鏃は、東日本では、縄文時代前期終りごろからあらわれ後期以降に盛行するとされている。6～8は、大きく縄文時代に属するものと位置づけておきたい。

表2　石器観察表

No	器　種	地区名	石　質	素材	大きさ（長×巾×厚cm	重g	備　考
1	槍先形尖頭器	表　採	頁　岩	剥　片	(1.6)×(1.5)×0.2	0.63	先端もしくは基部破損
2	槍先形尖頭器	A－01	頁　岩	剥　片	(2.4)×(2.1)×0.6	2.93	尖頭部破損
3	槍先形尖頭器	SB01 柱穴	頁　岩	不　明	(3.0)×2.7×1.2	2.94	尖頭部破損
4	石　鏃	A－02	珪化凝灰岩	不　明	2.4×1.3×0.5	0.62	完形品
5	石　鏃	SB01 柱穴	玉ずい	不　明	(1.9)×1.2×0.5	0.78	先端部破損
6	ピエス・エスキーユ	表　採	黒耀石	剥　片	3.0×1.4×0.6	1.88	
7	二次加工のある石器	A－02	頁　岩	剥片？	(3.5)×2.6×1.4	12.52	破損
8	微細な剥離痕のある剥片	SB01 柱穴	頁　岩	剥　片	4.3×3.6×0.8	13.44	

Ⅳ 考　　察

今回の大臣宮地区の発掘調査で発見された遺構については、多賀城跡の南面地域の遺構を考える上で、極めて重要な要素を内包している。また、石器についても志引遺跡につぐ旧石器の出土であり、これも貴重な資料となる。

ここで、今回の調査によって発見された建物跡の年代と性格について、考察を行なうことにする。

1．建物跡の変遷と年代について

台地上面で検出した掘立柱建物跡の柱穴は、合計12基である。そのうちの８基は、それぞれ重複関係を有しており、「コ」の字形の配列を呈している。このＳＢ01建物跡は、残存する台地中央部から西寄りに所在するため、建物の西側は既に削平を受けており、全体の形状や規模等は不明である。しかしながら、残存する東妻柱と南側柱列から梁行２間、桁行３間以上の東西棟であることが判明した。柱穴は、３回の切り合いが認められ、最新の柱穴には不整楕円形の抜き穴がつく。このＳＢ01北側柱列に並行して２基の柱穴が検出されたが、この柱列については、ＳＢ01建物跡の東妻柱列と柱筋が一致すること、２基の柱穴の間隔が北側柱の間隔とほぼ等しい数値をもつことから、新しい時期の廂を構成する柱列として把えておきたい。さらに、削平を受けた台地西端部の崖面に検出した２基の柱穴については、ＳＢ01建物跡とは組み合わないもので、おそらく西方に延びる建物跡の柱穴と考えられ、ＳＢ02とした。ＳＢ01とＳＢ02は、直接的な切り合いをもっていないため、両者の新旧関係は不明である。

ＳＢ01については、前項で述べたとおり、Ａ→Ｂ→Ｃの３期の変遷が確認された。変遷の内容については、柱穴の規模、形状、埋土の状況と重複関係を確実に把握できた南側柱列の東妻から２間目と３間目の柱穴から推察して組み合わせを行なっている。Ａ～Ｃ期の柱穴についてみると、Ａ期のものは、３期の中で最も大きな規模を有し、一辺 1.2～ 1.3mの略方形プランを呈するものが多い。東妻柱南の柱穴は、南側柱列に対してやや傾きをもついわゆる隅柱の様相を呈している。また、この時期の柱穴埋土は、黄褐色土と暗褐色土の互層となる特徴をもっている。Ｂ期のものは、Ａ期に比べて小形になり平面プランも一様でない。さらに、柱穴の深さも概して浅くなる特徴を有している。Ｃ期のものは、Ａ・Ｂ期の柱穴を切り込んでつくられているため形状は明瞭に把握できたが、Ｂ・Ｃ期の埋土は、地山である凝灰岩の粒やブロックを含む土が一度に埋められているため、検出には苦労した。柱穴の規模は小形で長方形、楕円形を呈するものが多い。この時期の柱穴に抜き穴が付くことは、前に述べた通りである。

このように、Ａ～Ｃ期の柱穴については、それぞれに規模や形状等に差異が認められる。さ

らに、A期とC期の柱穴についてはほぼ同位置で切り合いを有しているのに対し、B期の柱穴は北側柱列柱穴が外側に大きくはみ出しており、梁行寸法がやや大きくなったことが想像される。以上のことから、SB01建物跡は、（A）2間×3間以上→（B）一回り大き目の2間×3間以上→（C）北廂付の3間×3間以上の建物へと変遷したものと考えられる。

さて、この3期の変遷をもつSB01の造営年代であるが、前述のとおりこの台地は、削平が著しいため柱穴自体の残りも決して良好な状態ではなく、特にB期の柱穴は、埋土がごく僅かしか遺存していない状況であった。このため、遺物の出土量も少量であり、遺物からの年代決定は困難である。柱穴内からの出土遺物は須恵器、土師器、赤焼き土器、瓦などであるが、土器類はいずれも小片であり器形を復元できるものは出土していない。瓦については、堆積土出土のものが多く、SB01建物跡南側柱列東妻から2間目のC期抜き穴から数点出土しているが、いずれも丸瓦の破損品であるため時期決定資料とは成り得ない。

そこで、建物跡の年代を推定するためC期抜き穴埋土と小ピット群について検討を加えることにする。SB01建物C期柱穴には、不整楕円形の抜き穴が認められているが、この埋土中から灰白色火山灰が検出されている。この抜き穴は、南側柱列西端部のもので暗褐色土の埋土に混入してブロック状に認められたものである。灰白色火山灰は、多賀城跡や周辺地域の遺跡内では随所に認められているもので、降灰期が10世紀前半頃と考えられている。[9]

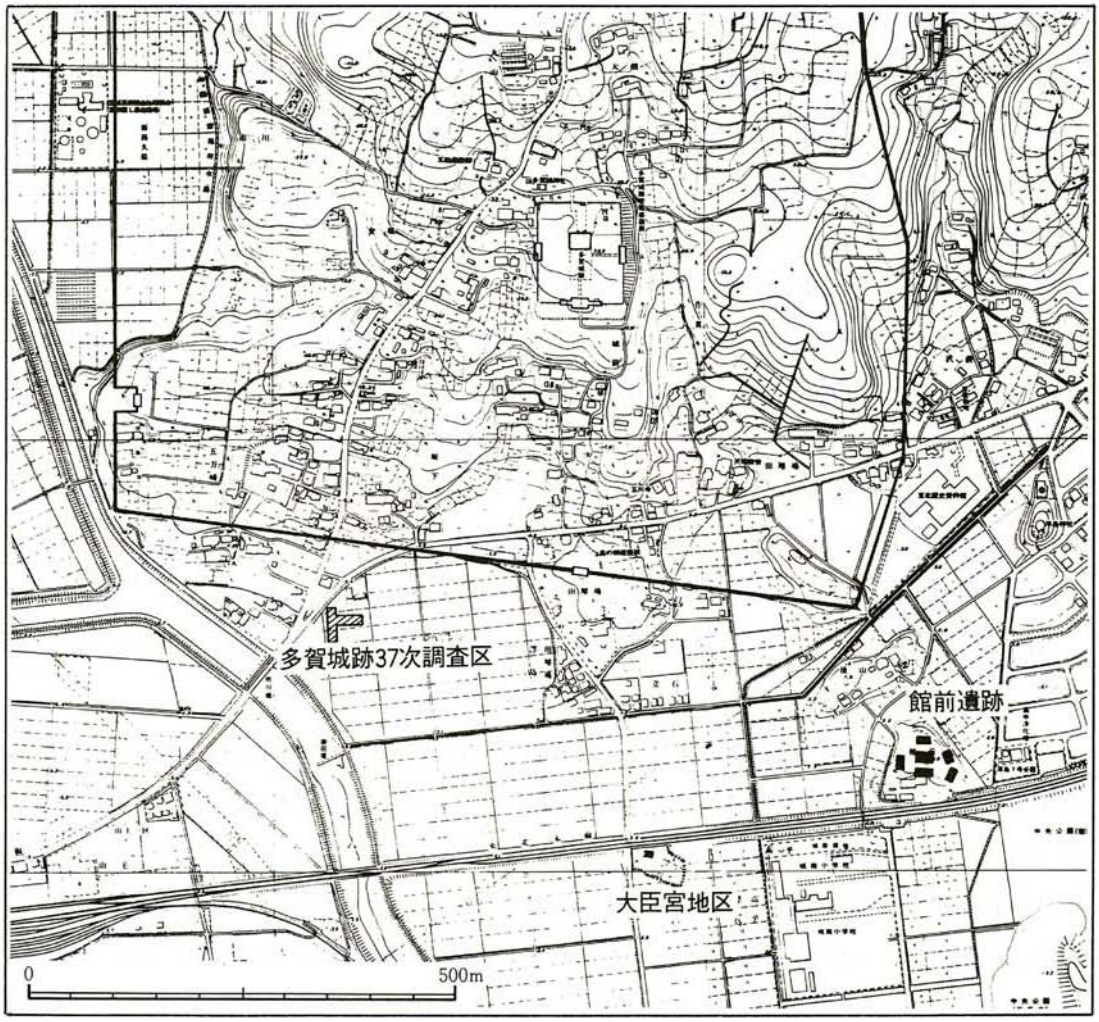
さらに、台地上面全体で検出されている小ピット群は、建物跡の検出面である第Ⅳ層（整地層）の上面に堆積した第Ⅲ層から掘り込まれており、明らかに建物跡より後出のものである。ピット内からは、赤焼き土器が多く出土する特徴を有しており、ピット1から出土した赤焼き土器皿は、ロクロ調整で底部に明瞭な回転糸切り痕を残すもので、多賀城跡や周辺遺跡では灰白色火山灰降下以後に多く出現するものである。

以上のことから、SB01建物跡C期は、10世紀前半を下限として把えられることから、SB01建物跡の上限については、おおむね9世紀代の年代を与えることに異論はないと考えられる。

2．遺構の性格と多賀城跡との関連について

本調査の結果、台地上面から古代の建物跡の存在が実証されたが、調査区は前述のとおり台地全体の削平が著しいため、遺構の全容を捉えることは不可能であった。おそらく調査で発見された遺構以外にも、複数の建物跡が存在していたものと推察される。この様な状況から、当地区の遺構の性格を究明することは極めて困難であるが、多賀城跡南面地域で検出されている遺構と対比しながら、この問題について考えてみたい。

本調査で発見した建物跡の性格について考察する上で、まず調査区の北方に位置する多賀城跡との位置関係を明示する必要があろう。このことは、市川橋遺跡が多賀城跡に接続しており



第15図　多賀城跡南面地区調査区位置図

特に、多賀城跡の南面一帯に所在する位置的関係上、多賀城に関連する遺構・遺物の存在が強く予想され、方八丁四方の多賀城跡が国庁域とすれば、市川橋遺跡など周辺地域を占地するその他の遺跡は、いわゆる国府域に相当する地域と考えられるからである。

そこで、まず大臣宮地区の位置を述べると、多賀城政庁基準線からの距離を測定すると南へ約 700m、東へ約90m の地点に位置し、外郭南門跡からは、約 320m 南方に所在している。そこは、政庁跡と外郭南門跡を結ぶ中軸延長線に近接する南面地域のほぼ中央部分に位置している。そして、周辺水田部との比高差が約 3 ～ 3.5m を有する台地形を呈する地形上の特徴をもっている。大臣宮地区に類する地形は、当地区の東方約 300m に位置する館前地区の丘陵、その北側の後山丘陵、さらに東方の浮島神社が所在する丘陵などがあり、南面地域の東半部に点在していることが知られる。同地域の字名が「浮島」と呼ばれる所以である。

多賀城跡の南面地域において検出された遺構について述べると、まず第一に、大臣宮地区と同様の立地形状を呈する館前遺跡が上げられる。遺跡は、水田中に島状に隆起した独立の台地上に立地しており、台地上面の平場から6棟の建物跡、整地層、溝跡が発見された。この掘立柱建物跡は、台地中央部に位置する四面廂の建物を中心として、その前後に建物を配し、さらに、東西に2間×5間を基準とする建物跡を配置する遺構のあり方は、官衙的体裁を整えている遺跡であるとして、国府機関の重要な一役を果していた官衙ブロックと考えられた。[00] 次に、外郭南辺築地に近接する市川字館前地区の調査（多賀城跡調査研究所の第37次調査）においては、掘立柱建物跡、一本柱列、道路遺構、溝跡、井戸跡などの遺構が発見され、木簡をはじめとする多量の遺物が出土した。これらの遺構には、3時期の変遷が認められ、その年代を8世紀後半～11世紀に位置づけている。特に、幅約 4.5m、深さ 1.5mの南北に延びる大溝や、両側に側溝を伴う幅約 5.4mのバラス敷きの道路遺構の発見は、これまであまり調査が及んでいなかった南面地域の遺構のあり方を考える上で、貴重な発見となった。[01]

今回調査を実施した大臣宮地区からは、掘立柱建物跡2棟と小ピットが検出されただけであるが、当地区の遺構の性格を考察する上で前記の遺構のあり方は参考になる。

ところで、大臣宮地区の調査で発見した2棟の掘立柱建物跡のうちＳＢ01建物跡は、3時期の変遷があり最新の柱穴に抜き穴が付くものである。これまで南面地域から発見された建物跡で、同一の建物が3回の建て替えを行なったものは検出されていない。特に、大臣宮と同じ様な立地形状を呈する館前遺跡では、6棟の建物跡が全て単一時期のものであり、重複を呈するものは認められていない。しかし、この建物群は、9世紀前半以降の年代が与えられているが、上面平場周縁部分に灰白色火山灰が堆積している溝跡があり、その内側には無数の小柱穴が検出され、この溝跡とセット関係をもつ建物が存在していたと考えられることから、一世紀以上にわたってこの台地面が使用されていたことになる。これは、大臣宮地区の建物跡の年代と一致する。

多賀城跡外郭南辺築地に近接する多賀城跡第37次調査区でも、大臣宮地区や館前遺跡と同時期とみられる遺構が検出されている。それは、ＡII期として分類されている溝跡、建物跡、一本柱列、土壙などである。建物跡についてみると、一辺1～1.2mの方形を呈する柱穴をもつ5間×2間以上の大規模な建物跡と、一辺50～60cmの隅丸方形を呈し規模の小さな建物跡が存在し、相互に重複関係をもつものが多いことから、この時期には規模の異なる多数の建物跡が存在し、建物は何度か建て替えられていたことが判明している。

ここで、時期的に共存する3地区の建物跡についてまとめると、表3のとおりである。この表から言えることは、建物の規模にはややばらつきが認められるものの、建物の方位が多賀城跡中軸線に対して北で東へ偏じる共通性を有することである。館前遺跡のＳＢ04･05建物跡は、

表3．多賀城跡南面地区建物跡一覧

遺跡名	遺構名	規模(南北)×(東西)	方位	柱間寸法	柱穴形状 平面プラン	柱穴形状 規模(cm)	備考
市川橋遺跡(市川字館前)	SB1227	南北2間以上	N6°E	約8尺	隅丸方形	一辺約50	
	SB1228	5×2以上	N10°E	桁行約8尺 梁行約10尺	方形	一辺100～120	抜き穴
多賀城跡第37次調査	SB1235	3以上×2	N4°E	桁行約7尺 梁行約6尺	隅丸方形	一辺50～60	柱痕跡 15～17cm
	SB1236	2以上×2	N8°E	桁行約10尺 梁行約7尺	楕円形	径45	柱痕跡 15～20cm
館前遺跡	SB01	2×4以上	N4°E	約10尺	方形	一辺100～120	抜き穴
	SB02	4×7	N4°50′E	約10尺	方形	一辺100～120	柱痕跡 30～40cm
	SB03	2×7	N4°17′E	約10尺	方形	一辺90～130	抜き穴
	SB04	2×5以上	N34°7′E	約10尺	方形	一辺110～140	柱痕跡 30～36cm
	SB05	5×2	N25°24′E	約10尺	方形	一辺100～150	柱痕跡 30～38cm
	SB06	5×2以上	N4°E	約10尺	方形	一辺100～120	
市川橋遺跡(大臣宮)	SB01A・B	2×3以上	N3°E	約10尺	方形	一辺130(A)	
	SB01C	3×3以上	N6°E	約10尺	長方～楕円	多様	抜き穴
	SB02	—	N1°35′E	約9尺	円形	不明	柱痕跡 25～30cm

地形の制約上から生じたものとして捉えられることから、この2棟を除外して考えると、3地区の建物跡の方位はN4°～10°Eの間に位置づけられる。このことは、南面地区の建物にも何らかの規制が生じていたものと思われる。館前遺跡の建物跡は、台地の中央部に検出された3棟と西側の1棟の方位がN4°Eの方位を示しており、一定の規制に基づいて建物を配置したものと推察される。また、大臣宮地区のSB01建物跡は、3期の変遷を持っており最新のC期建物の方位を測定すると、柱痕跡や柱位置が想定できる南側柱列では約6°の傾きを呈している。この建物は、ほぼ同位置で柱穴の切り合いを有していることから、造営当初から同方位の規制に基づいて造られたものと解し得る。これらの建物の方位は、多賀城跡の外郭南辺築地の方向—W6°N—ときわめて近似している。

これまで、多賀城跡の周辺地域には国府多賀城を取り巻く〝まち並み〟が形成されており、そこには何らかの規制が存在しているものと想像していたが、本稿で述べた前記3地区の調査結果によれば、9世紀前半～10世紀前半の時期には外郭南辺築地の方位に規制を受けたと考えられる遺構の存在が明らかになった。多賀城跡の西方に所在する山王遺跡から発見された幅約12mを有する道路状遺構は、広範囲にわたる〝まち並み〟の存在を裏づけるものである。[13] このまち並みは、国府を支える生活居住空間として編成され、展開して行ったと考えられるが、この地域内にあって、台地上に営まれた大臣宮地区や館前遺跡の建物跡は、規模や構造の点で多賀城内から検出される官衙建物跡に類するものであり、生活居住地域の中で特異な性格をもつ

ものと推察される。これらのことから、今回の調査で発見した大臣宮地区の建物跡については、多賀城との位置関係、立地状況、遺構規模などから、陸奥国府多賀城に赴任した国司クラスの居宅として捉えておきたい。多賀城跡外郭築地の東南隅から南方約 200m に所在する館前遺跡で検出された建物跡の配置状況が、平城京左京三条二坊十五坪の遺構と酷似していることは注目される[13]。また、周辺遺跡から発見されている緑釉・灰釉陶器や石帯などの遺物は、官人層との結びつきを傍証するものと考えられる。

大臣宮についての記録が「安永風土記御用書出」の中にみられる[14]。

一大臣神社　一小名　大臣の宮

一勸請　誰勸請と申義并右年月共ニ相知不申候へ共　淳和帝御猶子河原左大臣融公を奉祭塩竈一ノ宮十四末社之内ニ御座候由申伝候事

△一社地　一社　西向貳尺作　一鳥居　西向

……略……

風土記によれば、この神社は嵯峨天皇第12の皇子源融を祀ったものと言われている。源融は、貞観6年（864）2月奥羽按察使に任命されていることが「公卿補任」にみられるが、実際に赴任したかどうかは定かではない。しかし、調査で発見された建物跡の年代が奇しくも一致していることは、興味深い。

多賀城跡を取り巻く周辺地域の発掘調査は、ここ数年継続的に行なわれて来ている。国府多賀城を中核とする遺構の広がりは、古代の政治・文化の中心的な位置を有する地域として、その基盤を形成している。その基盤の上に国府が存続し、長期にわたって国府としての機能を発揮し、展開されて来たものと考えられる。この様な意味からも、当市が実施している国府周辺地域の調査活動は、古代の都市構造を解明する大きな目的を有しており、今後の調査によって次第にその内容が明らかになるものと期待するものである。先学諸兄のご指導を願うものである。

（註）

(1) 多賀城市教育委員会「新田遺跡現地説明会資料」（1982）

(2) 多賀城市教育委員会「山王・高崎遺跡発掘調査概報」多賀城市文化財調査報告書第2集（1981）

(3) 多賀城市教育委員会・多賀城市史編さん事務局「志引遺跡現地説明会資料」（1983）

(4) 宮城県多賀城跡調査研究所「多賀城跡」宮城県多賀城跡調査研究所年報1980（1981）

(5) 多賀城市教育委員会「館前遺跡」多賀城市文化財調査報告書第1集（1980）

(6) 岡村道雄・鎌田俊昭「宮城県北部の旧石器時代について」東北歴史資料館研究紀要第6巻（1980）

(7) 石器文化談話会「座散乱木遺跡発掘調査報告書Ⅰ」石器文化談話会誌第1集（1978）

(8) 小野田町教育委員会「鹿原D遺跡」小野田町文化財調査報告書第1集（1980）

(9) 白鳥良一「多賀城跡出土土器の変遷」宮城県多賀城跡調査研究所研究紀要Ⅶ (1980)

(10) 註(5)に同じ

(11) 註(4)に同じ

(12) 山王遺跡の東町浦地区から両側に側溝を持つ幅12mの道路跡とみられる遺構を発見している。この道路跡は、東西に走るもので多賀城跡外郭南辺築地と同方位をとっている。

(13) 奈良国立文化財研究所「平城京左京三条二坊」奈良国立文化財研究所学報第25冊 (1975)

(14) 宮城県史刊行会「宮城県史」第24巻 (1954)

(参考文献)

○ 岡村道雄「ピエス・エスキーユについて」東北考古学の諸問題 (1976)

○ 鎌田俊昭・藤村新一「宮城県大崎地方北部における先土器時代遺跡群」多賀城跡調査研究所研究紀要Ⅱ (1975)

○ 桑原滋郎編「多賀城跡」日本の美術2 至文堂 (1984)

○ 直木孝次郎・岩本次郎編「万葉びとの夢と祈り」日本歴史展望第2巻 旺文社 (1981)

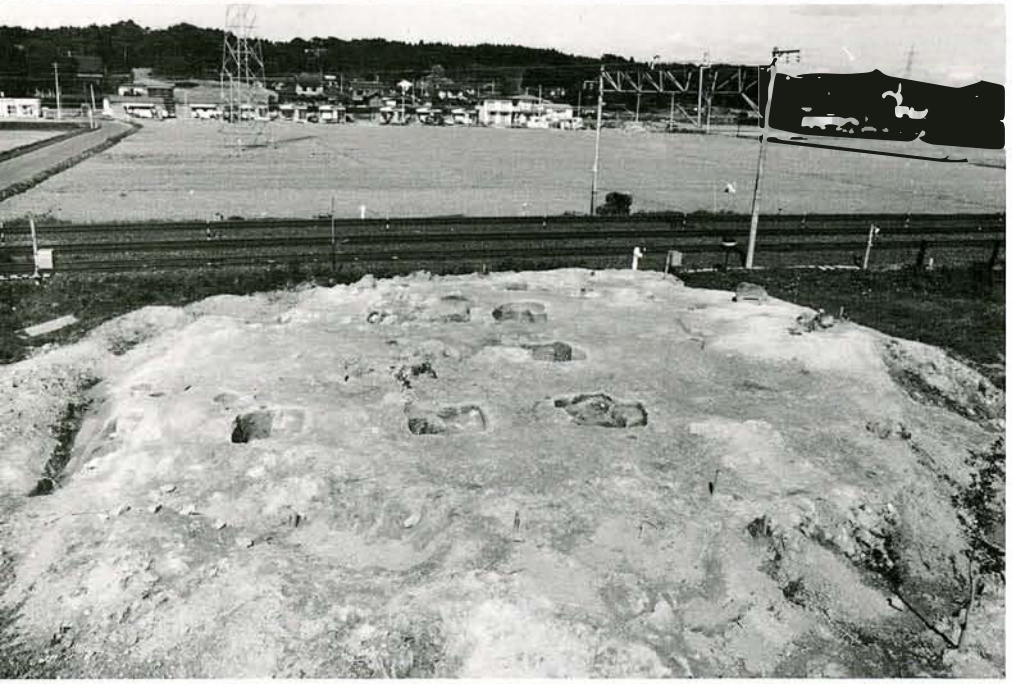
○ 渡辺信夫編「宮城の研究2」古代篇・中世篇Ⅰ 清文堂 (1983)

図版１
調査地区周辺航空写真

図版２
調査地区遠景
（南側より）

図版３
遺構検出状況
（西側より）

図版4
調査地区航空写真



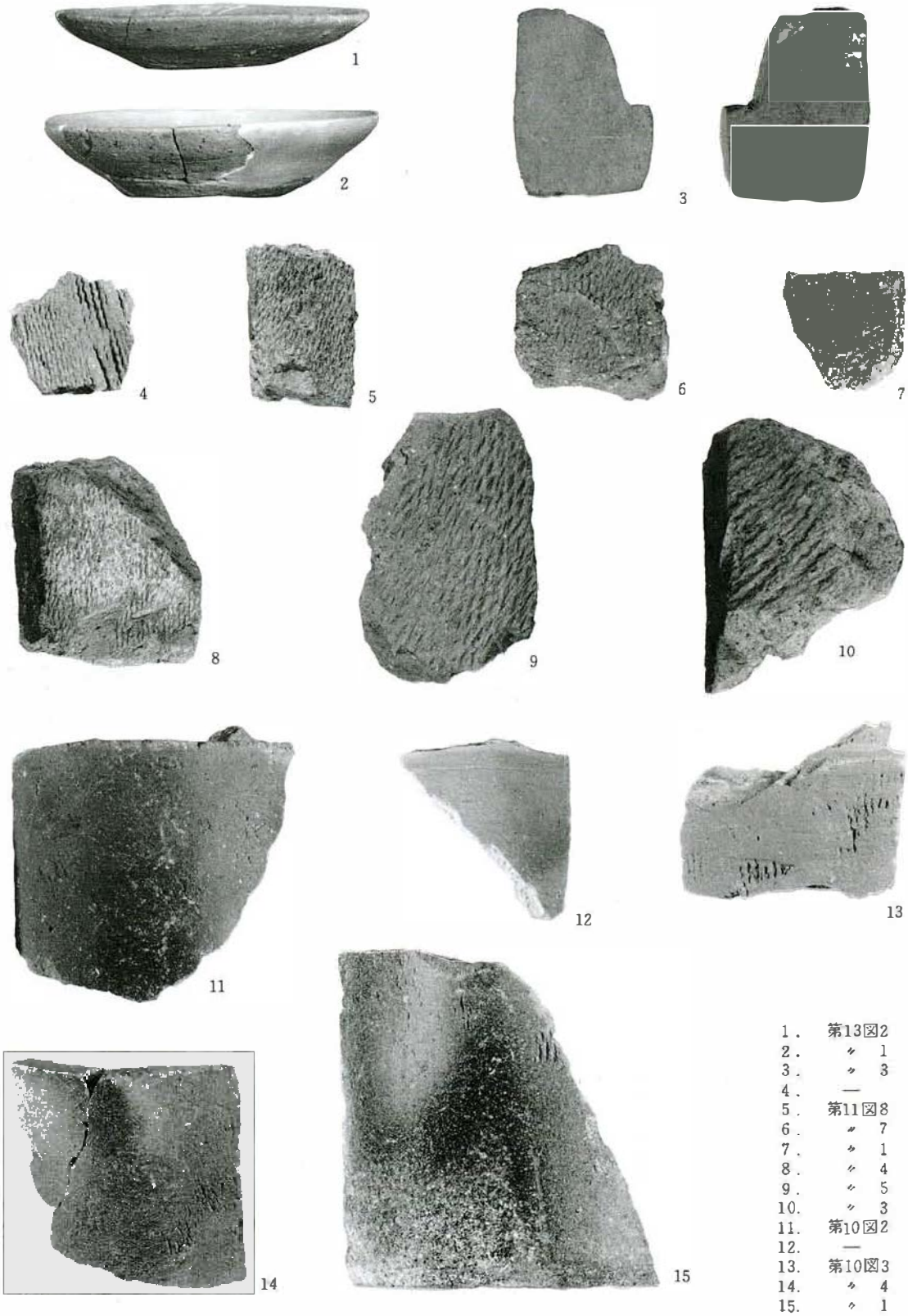
図版5
ＳＢ０１建物跡
（南側より）

図版6
ＳＢ０１建物跡
ＳＢ０２建物跡
（西側より）

図版7
ＳＢ０１建物跡
南側柱列東から１間目
の柱穴　　(西側より)

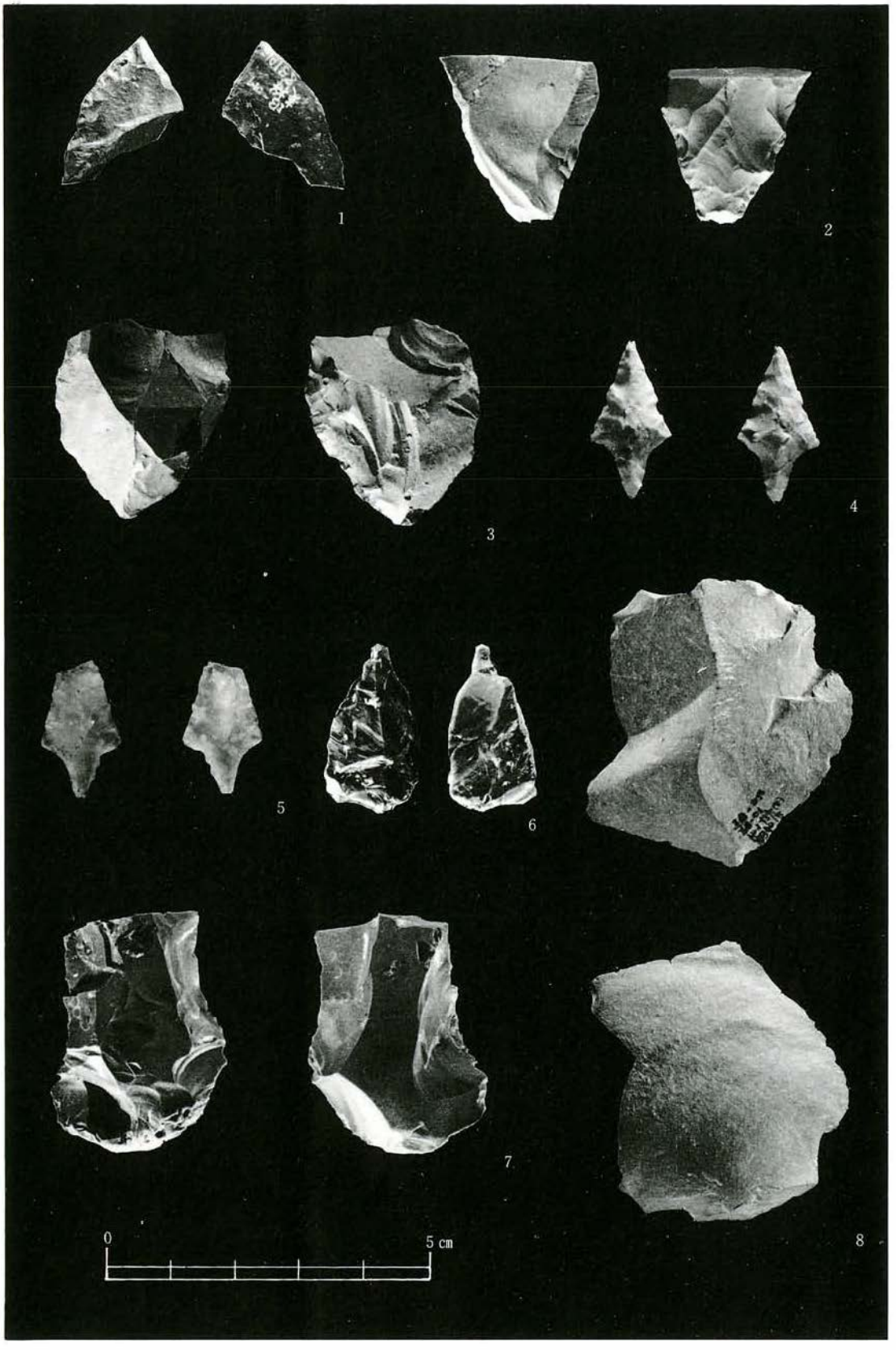
図版8
ＳＢ０１建物跡
南側柱列東から３間目
の柱穴　　（西側より）

図版9
ＳＢ０１建物跡
北入側柱列東から２間目
の柱穴　　（西側より）



1．　第13図2
2．　〃　1
3．　〃　3
4．　—
5．　第11図8
6．　〃　7
7．　〃　1
8．　〃　4
9．　〃　5
10．　〃　3
11．　第10図2
12．　—
13．　第10図3
14．　〃　4
15．　〃　1

図版10　出土遺物


1
2
3
4
5
6
7
8
0
5 cm

水入地区発掘調査報告

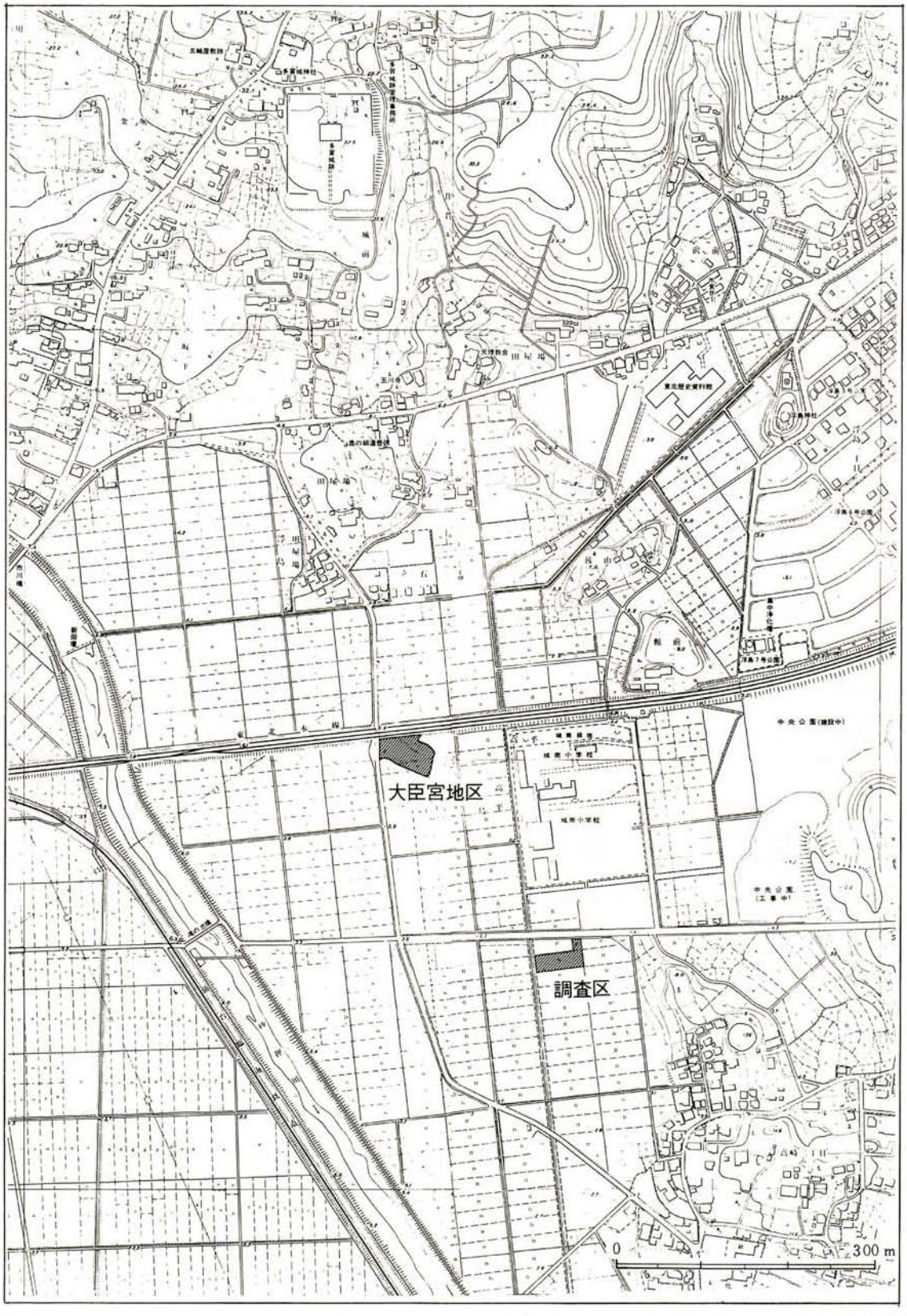
Ⅰ　調査に至る経緯

本調査区周辺地域は、市街化区域とされているが、現在は水田地帯となっているため、開発計画等については、具体的な形であらわれてはいない。しかし昭和54年に調査区西方約80ｍのところに、東北電気通信局の第二塩釜電話交換局の建設に伴なう発掘調査が、県文化財保護課により実施され、これを契機に、この水田地域でも開発計画が発生し始めている。昭和56年11月に、調査区の南方約 400ｍの高崎字樋の口地内で、開発行為に伴う試掘調査が実施された。また、この年に大臣宮地区の試掘調査を実施している。本件については、昭和58年度に入って地権者から住宅建設に係る計画が示され、申請者と当地区の開発計画の内容等について協議を行なった。当該地は、昭和48年に行なわれた城南小学校建設に伴う高平遺跡の調査区に隣接し、また、県文化財保護課が実施した西方水田部の調査によって、多量の遺物を含む包含層や、東西方向に延びる大溝跡が存在していることなどから、当該地においても遺物包含層等が発見される可能性が考えられた。そこで、申請者に対し調査を実施するため協力を依頼し、12月１日に埋蔵文化財の発掘届の提出を受けて、調査に踏み切ったものである。

Ⅱ　調査方法と経過

調査区の設定は、調査予定地の水田のほぼ中央部に幅３ｍ、長さ40ｍのトレンチを設定し、遺構の拡がりや層の拡がりに注意して、水田の地形に沿って拡張した。その際に、調査予定地の北西部と南東部は土捨て場とするため、調査区から除外した。基準点は国家座標を使用し、原点１（Ｘ：－189，230．000、Ｙ：＋14，140．000）と原点２（Ｘ：－189，230．000、Ｙ：＋14，109．000）を結ぶ線を基準線とし、北側をⅠ区、南側をⅡ区とした。

さらに、原点１を基準として、調査区全域を一辺３ｍのグリットで区画し、南北方向をアルファベット、東西方向を東側からアラビア数字で表示した。また、実測図は平板実測を行なうため、２点の原点の他に原点３（Ｘ：－189，244．000、Ｙ：＋14，109．000）と原点４（Ｘ：－189，244．000、Ｙ：＋14，097．000）を設置した。調査対象面積は約 1,160㎡で、その内の約500㎡について調査を実施した。今回の調査は、昭和59年１月９日より開始した。まず、調査地の遠景を南方より撮影し、器材搬入を行なう。その後、調査予定地中央部に幅３ｍ、長



第１図　調査区位置図

さ40mの東西トレンチを設定し、掘り込み調査を開始する。このトレンチ調査の成果に基づいて調査地区を設定し、バックホーによる表土剝離を行ない、調査地区東側より粗掘り作業を行なう（1月11日）。調査区の中央で南北に走る旧農道と、それに沿って走るＳＤ０１溝を検出し、ＳＤ０１溝の掘り込み調査を行なう（1月13日）。 1月17日、前日の降雪のため除雪作業を行なう。旧農道西側において南北に走るＳＤ０２溝を検出し、掘り込み調査を行なう。旧農道、ＳＤ０１溝、ＳＤ０２溝の掘り込み調査終了後、遺構全景の写真撮影、平面図作成を行なう（1月20日）。調査区南側において、東西に走るＳＤ０３溝と南北に斜行するＳＤ０４溝を検出するが、1月22日に降雪があり、遺構の掘り込み調査を1月24日より行なう。また、旧農道の除去作業も開始する。Ⅰ区北壁の土層堆積状況の写真撮影、セクション図作成を行なう。また、ＳＤ０３溝、ＳＤ０４溝の堆積状況の写真撮影とセクション図作成終了後、遺構の全景撮影をし平面図作成を行なう（1月26日）。1月27日、Ⅱ区西側において南壁に沿って東西に走るＳＤ０７溝を検出し、掘り込み調査を行なう。1月31日、旧農道下の遺構検出作業を開始する。調査区中央部において、幅の広い東西に走るＳＤ０５溝を検出し、掘り込み調査を行なう。2月6日、除雪作業を行なったのちＳＤ０５溝、ＳＤ０７溝の掘り込み調査を再開し、調査区中央部の旧農道下において検出した南北に走るＳＤ０６溝の掘り込み調査を行なう。ＳＤ０５溝、ＳＤ０７溝の土層堆積状況の写真撮影、セクション図作成を行なう（2月8日）。2月9日の午後と2月13日は、降雪のため調査を中止した。2月16日、ＳＤ０６溝とⅡ区の西壁土層堆積状況の写真撮影を行ない、セクション図を作成する。2月17日より平面図作成を行ない、2月20日に調査区全景の写真撮影を行ない全調査を終了した。

Ⅲ　調査成果

1．基本層位

調査区の堆積土は、基本的に5層に分けられる。

第Ⅰ層は、水田の耕作土である。厚さ約20cmの灰褐色土層で、下層との境に酸化鉄、マンガン粒が沈殿している。

第Ⅱ層は、褐灰色土層で水田からの影響により、やや青灰色気味の土色を呈する。厚さ約15cmで、調査区全面に分布している。

第Ⅲ層は、暗褐灰色土層（Ⅲ－ａ層）、暗灰褐色土層（Ⅲ－ｂ層）、褐灰色土層（Ⅲ－ｃ層）に細分される。各々、厚さ5～10cmで水平に薄く堆積している。Ⅲ－ｂ層のみ調査区東半分に分布が限られている。3層とも粘性があり、酸化鉄、マンガン粒を霜ふり状に含んでいる。

第Ⅳ層は、黒灰色粘土質土層である。水分を多く含み、しまりは弱い。遺構の1次確認面で

ある。遺物は土師器、須恵器を中心に、若干出土している。土色、土性、分布状況などから4層に細分される。Ⅳ－a層は調査区東半部に分布し、地山上面に厚さ約10cmで水平に堆積している。灰白色火山灰をごく僅かに含む。Ⅳ－b層は中央部北側に僅かに分布している。地山の黄灰色粘土質土を多量に混入している。Ⅳ－c層はやや土色が濃い土層である。調査区西半部の、北側に若干傾斜する部分に堆積している。灰白色火山灰をブロック状に多量に含んでいる。Ⅳ－b層は南西部に分布し、土色、土性ともⅣ－c層に近似するが、灰白色火山灰を含まない。

第Ⅴ層は、にぶい黄灰褐色砂質土層である。調査区西半部に分布し、厚さは10～15cmである。遺構の2次確認面であり、北側と南側をＳＤ０５溝、ＳＤ０７溝が東西に走る。遺物は小破片が多いが、須恵器を中心に多量に出土している。

2．発見遺構

今回の調査で発見した遺構は、古代の溝跡5条と農地整理前の旧農道、それに伴う溝2条と土壙一基である。

（1） 古代の遺構

〈ＳＤ０３溝〉

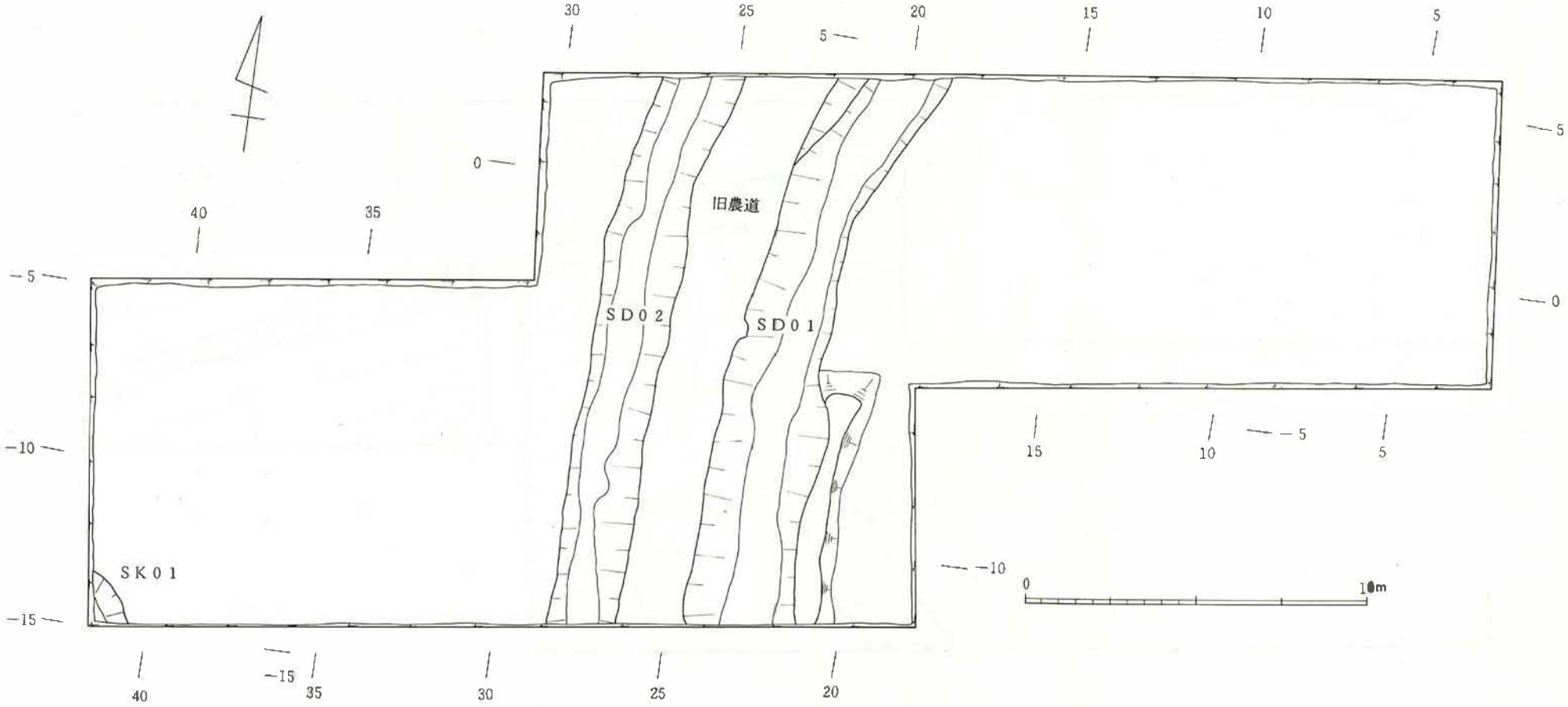
調査区南半部において検出された東西溝で、幅約 1.0m、深さ約40cmを測り、断面形はほぼ逆台形を呈している。方向は基準線に対し、東で南へ約6度偏している。ＳＤ０４、ＳＤ０５、ＳＤ０６、ＳＤ０７溝を切っているが、旧農道、ＳＤ０１溝、ＳＤ０２溝によって切られている。堆積土は4層に分けることができ、粘土質で全体的に灰色がかっている。堆積土中からは須恵器杯・甕、土師器杯・高台付杯・甕、赤焼き土器皿・杯、瓦などが出土している。また、墨書土器が2点出土している。

〈ＳＤ０４溝〉

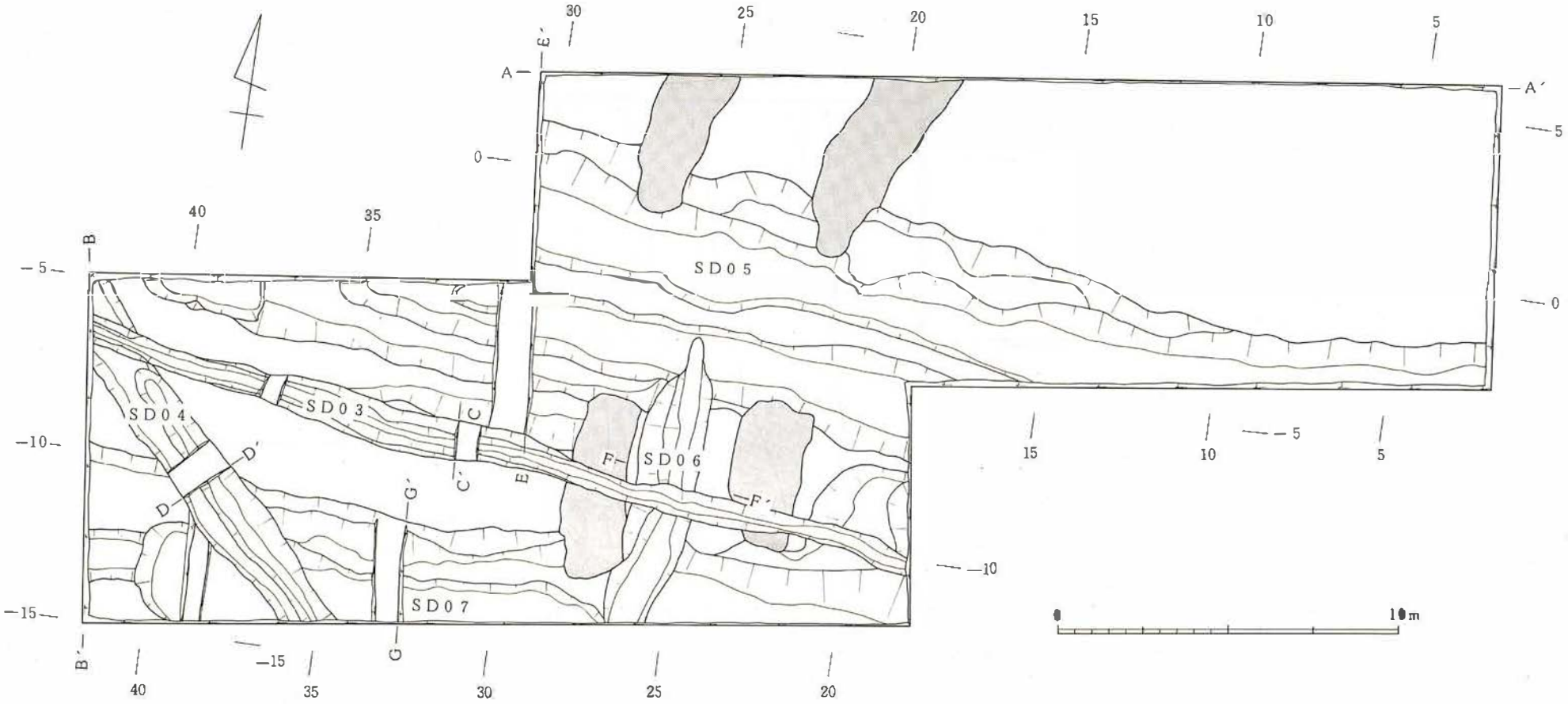
調査区西方部において検出された南北に斜行する溝で、幅1.6m、深さ約30～50cmを測り、底面はほぼ平坦で南へ傾斜している。壁の立ち上がりは、東側で比較的急であるのに対し、西側では緩やかである。ＳＤ０７溝を切っているが、ＳＤ０３溝によって切られている。堆積土は、5層に分けることができた。堆積土からは須恵器杯・甕、土師器杯・甕、平瓦などがあり、土師器の杯体部に「万」と記された墨書土器が出土している。他に木製品で斎串が一点出土している。

〈ＳＤ０５溝〉

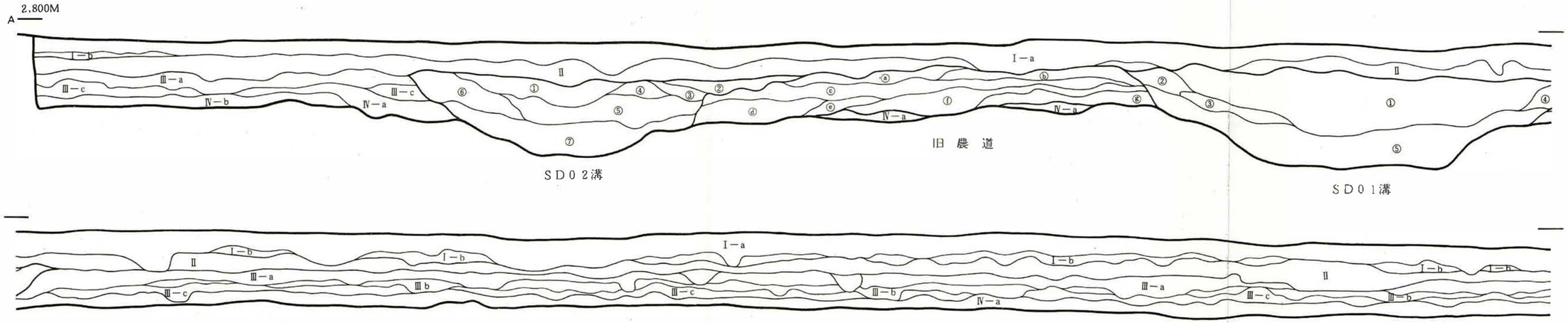
調査区中央部において検出された東西溝で、幅が約9.0mを計る大規模な溝である。深さは約60cmを計り、溝の中央部に幅約90cm、高さ20cmほどの高まりがある。壁の立ち上がりは緩やかである。方向は東で約5度南へ偏している。ＳＤ０６溝、ＳＤ０７溝を切り、旧農道、ＳＤ０

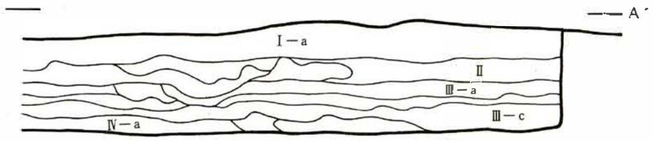


第２図　遺構配置図Ⅰ



第3図　遺構配置図Ⅱ





北壁セクション図

SD01溝

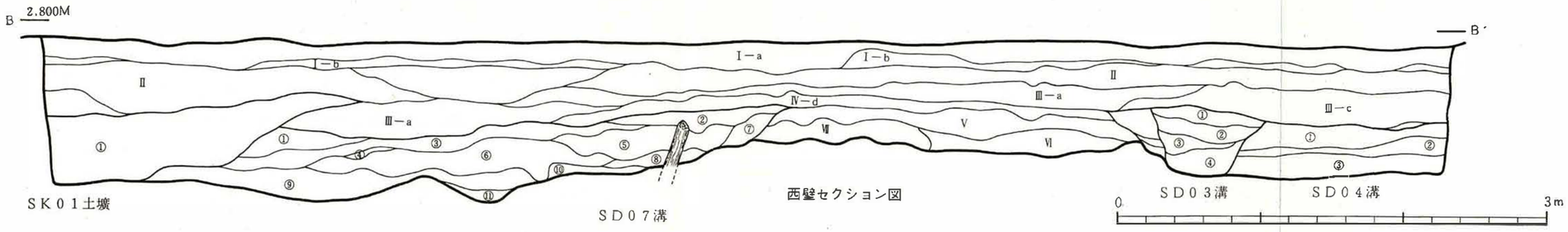
層No.	土色・土性	備考
1	暗灰褐色土	植物繊維を含む。
2	暗灰褐色土	
3	にぶい黄灰褐色土	
4	にぶい黄灰褐色土	
5	暗青灰色土	植物繊維を含む。

SD02溝

層No.	土色・土性	備考
①	暗灰色土	灰褐色土を混入。
②	暗褐灰色土	
③	褐灰色土	
④	暗褐灰色土	
⑤	暗灰褐色土	植物繊維を含む。
⑥	暗灰色土	〃
⑦	暗灰色土	〃 黄灰褐色土を斑状に含む。

旧農道

層No.	土色・土性	備考
ⓐ	黄灰褐色土	黄褐色土を粒状に含む。酸化鉄を含む。
ⓑ	黄褐色土	暗褐色土を混入。酸化鉄を含む。
ⓒ	暗褐灰色土	黄褐色土を粒状に含む。
ⓓ	暗灰色土	
ⓔ	暗灰色土	黄褐色土をブロック状に含む。
ⓕ	黒灰色土	
ⓖ	暗灰色土	



基本層位

層No.	土色・土性	備考
Ⅰ－a	灰褐色土	耕作土。
Ⅰ－b	褐灰色土	〃
Ⅱ	褐灰色土	酸化鉄、マンガン粒を含む。
Ⅲ－a	暗褐灰色土	酸化鉄を若干含む。
Ⅲ－b	暗灰褐色土	〃
Ⅲ－c	褐灰色土	〃
Ⅳ－a	黒灰色土	灰白色火山灰を若干含む。
Ⅳ－b	黒灰色土	黄灰色粘土質土を混入。
Ⅳ－c	黒灰色土	灰白色火山灰を多量に含む。図中になし。
Ⅳ－d	黒灰色土	
Ⅴ	黄灰褐色砂質土	遺物を含む。
Ⅵ	暗灰色土	砂質気味。
Ⅶ	黒灰色粘土質土	青灰色粘土質土を混入。

SK01土壙

層No.	土色・土性	備考
①	暗青灰色土	酸化鉄を含む。

SD07溝

層No.	土色・土性	備考
①	暗褐色土	
②	褐灰色砂質土	暗褐灰色土を混入。
③	暗褐灰色土	褐灰色砂質土を混入。
④	暗灰色土	灰白色火山灰を斑状に含む。
⑤	にぶい暗灰色土	暗褐灰色砂質土を混入。
⑥	暗灰色土	植物類を含む。
⑦	黒灰色土	植物類を多く含む。
⑧	黒灰褐色土	〃
⑨	黒灰色土	青灰色粘土質土を斑状に含む。
⑩	黒灰色粘土質土	青灰色粘土質土をブロック状に含む。
⑪	黒灰色土	

SD03溝

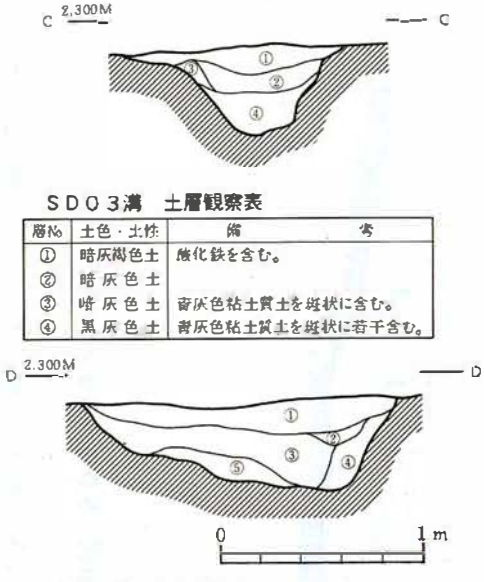
層No.	土色・土性	備考
①	にぶい褐灰色土	黄灰褐色土を斑状に含む。
②	暗灰褐色土	酸化鉄を含む。
③	暗灰色土	
④	黒灰色土	青灰色粘土質土を斑状に若干含む。

SD04溝

層No.	土色・土性	備考
①	暗灰褐色土	酸化鉄を含む。
②	暗灰色土	植物類を含む。
③	にぶい暗灰色土	暗灰色砂質土を混入。

第4図　調査区セクション図

1、ＳＤ０２、ＳＤ０３溝に切られている。堆積土は、６層に分けることができ、全体に粘土質で灰色がかった黒褐色土である。第１層には、灰白色土がブロック状に含まれている。堆積土中からは須恵器杯・高杯・甕・壺、土師器杯・高台付杯・高台付皿・蓋・甕、赤焼き土器杯・高台付皿・高台付鉢、灰釉陶器椀、瓦、木製品などが出土している。墨書土器は19点出土しており、中には４ヶ所に墨書されている土師器杯がある。灰釉陶器の椀は角高台をもち、内面に施釉されている。内面底部に三叉トチンの痕跡がみられる。木製品は斎串、祭祀用木製品、曲物、曲物の底板、蓋板、盤、柄の把手、もじり編み用の木製錘、下駄などがある。



ＳＤ０３溝　土層観察表

層No.	土色・土性	備　　考
①	暗灰褐色土	酸化鉄を含む。
②	暗灰色土	
③	暗灰色土	青灰色粘土質土を斑状に含む。
④	黒灰色土	青灰色粘土質土を斑状に若干含む。

ＳＤ０４溝　土層観察表

層No.	土色・土性	備　　考
①	暗灰褐色土	酸化鉄を含む。
②	黒灰色土	
③	暗灰色土	植物類を含む。
④	にぶい暗灰色土	暗灰色砂質土を混入。
⑤	暗灰色砂質土	青灰色砂質土と交互に堆積。

第５図　ＳＤ03・04溝セクション図

〈ＳＤ０６溝〉

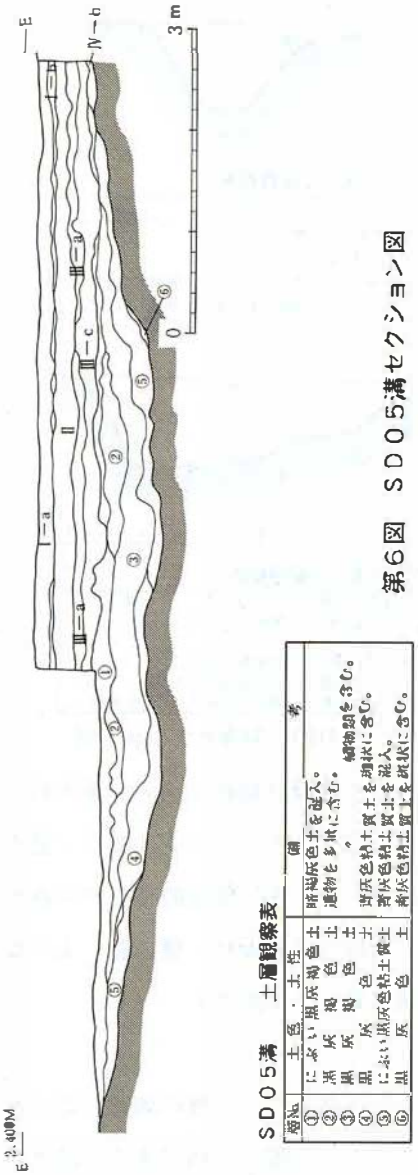
調査区中央部の旧農道下において検出された南北溝で、ＳＤ０７溝を切り、ＳＤ０５溝によって切られている。規模は幅約 2.0m、深さ45～55cmを計り、溝の断面形は下方部で「コ」の字形を呈し、上方部で逆「八」の字に開く。壁の下方部に一定の間隔で、太さ５cm前後の丸太杭を打ち込み護岸している。部分的にしがらみが認められた。８層に分けられ、全体的に灰色がかっている。遺物は須恵器杯・甕・壺、土師器杯・甕、瓦などがある。須恵器杯の底部に「寺」・「瓦」の墨書銘が２点出土している。

〈ＳＤ０７溝〉

調査区南側において検出された東西溝で、旧農道、ＳＫ０１土壙や、その他の溝跡に切られており発見遺構の中で最も古いものである。南側が調査区外のため規模は不明である。深さは約80cmを測るが、東側では約30cmと浅く、幅も広くなっている。壁は緩やかに立ち上がり、壁には一定の間隔で、径５cmほどの丸太杭を２列に打ち込み護岸されている。堆積土は10層に分けることができ、第３層上面には灰白色火山灰が自然堆積している。遺物は須恵器杯・高台付杯・甕・把手付甕、赤焼き土器杯、灰釉陶器皿、瓦、土錘、木製品、鉄製品、砥石などがある。墨書土器は23点を数え、その中には須恵器甕の体部に「□□郡進」と墨書されたものなどがある。灰釉陶器の皿は、三ヶ月形の高台をもつ底部の小破片である。木製品には「禁杖八十…」と書かれた木簡や盤、曲物の蓋板と底板、弓などがある。鉄製品は斧、釘が出土している。

（２）　近代の遺構

旧農道ＳＤ０１溝、ＳＤ０２溝は、調査区中央部の第３層上面で検出された。いずれもＳＤ



SD05溝　土層観察表

層No.	土色・土性	備考
①	にぶい黒灰褐色土	暗褐灰色土を混入。
②	黒灰褐色土	遺物を多量に含む。
③	黒灰褐色土	〃　　植物類を含む。
④	黒灰色土	青灰色粘土質土を混入。
⑤	にぶい黒灰色粘土質土	青灰色粘土質土を混入。
⑥	黒灰色土	青灰色粘土質土を斑状に含む。

第6図　SD05溝セクション図

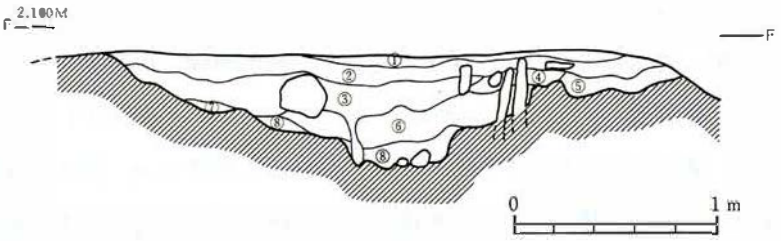
03、SD05、SD06、SD07溝を切っている。旧農道は、両側に側溝を伴い幅約 1.8～ 2.5m で南北に延び北側で東に偏している。堆積土を観察すると、地山面まで一旦掘り込み、黄褐色土を含む暗灰色土を積み上げ、その上層には、黄褐色土や暗褐色土をブロック状に含み、さらに黄褐色土の礫を含んでいる層が、10cmほど厚く積み上げられている。SD01溝、SD02溝は旧農道の側溝である。SD01溝は幅約3m、深さ約60～80cmで、底面はほぼ平坦で北へ若干傾斜している。壁は緩やかに立ち上がる。SD02溝は幅約 2.3m、深さ約60～90cmである。底面はほぼ平坦で、SD01溝と同様に北へ傾斜している。壁は緩やかに立ち上がる。堆積土はSD01溝が5層に、SD02溝が7層に分けることができ、いずれも粘土質で灰色がかっている。

これらの遺構より出土した遺物は、旧農道の第3層より須恵器杯・甕、土師器杯・甕の小破片が出土している。SD01溝の堆積土からは須恵器杯・高台付杯・甕・壺、土師器杯・甕、灰釉陶器の瓶、瓦、現代の陶磁器類などがあり、須恵器の高台付杯には墨痕がある。SD02溝の堆積土からは須恵器杯・甕、土師器杯・高台付杯・甕、瓦、現代の陶磁器類の他に木製品が出土している。木製品は、側板と加工されている板材である。これらの遺構の他に、調査区南西隅においてSK01土壙が検出された。SK01土壙は第3層上面より掘り込まれ、SD07溝を切っている。形態や規模については、遺構が調査区以外に延しているため不明である。壁は緩やかに立ち上がり、堆積土は1層である。出土遺物は須恵器杯・甕、土師器杯・甕などの小破片である。

3．出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器、瓦、木製品、鉄製品、砥石などである。この中で須恵器の出土量が最も多く、次いで土師器、瓦と続く。また、木製品の出土量が多いことも、本調査での特徴の1つである。

出土遺物は、大部分が溝跡から出土しており、特にＳＤ０５、０７溝跡出土のものが大半を占める。堆積土からの出土遺物は、第Ⅴ層から僅かに出土しただけであり、全体の器形を復元できるものは出土していない。



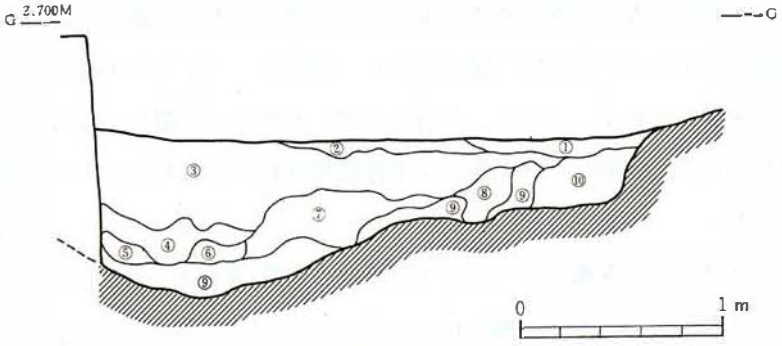
ＳＤ０６溝　土層観察表

層No.	土色・土性	備考
①	暗褐灰色砂質土	
②	にぶい褐灰色土	暗灰色土と交互に堆積。
③	にぶい暗灰色土	褐灰色砂質土を混入。
④	黒灰色土	青灰色粘土質土を斑状に含む。
⑤	にぶい暗灰色土	褐灰色砂質土を混入。
⑥	黒灰色土	植物類を含む。
⑦	暗灰色土	暗灰色砂質土を混入。
⑧	にぶい黒灰色土	青灰色粘土質土を斑状に含む。

第７図　ＳＤ０６溝セクション図

（１）　土師器

土師器には杯、高台付杯、蓋、甕の器種がある。この中で杯の出土量が圧倒的に多い。以下、器種ごとに特徴を述べることにする。



ＳＤ０７溝　土層観察表

層No.	土色・土性	備考
①	褐灰色砂質土	暗褐灰色土を混入。
②	暗褐灰色土	褐灰色砂質土を混入。
③	暗灰色土	植物類を含む。
④	暗灰色土	青灰色粘土質土をブロック状に含む。
⑤	暗灰色土	
⑥	にぶい黒灰色土	
⑦	黒灰色土	青灰色粘土質土を斑状に含む。
⑧	にぶい暗灰色土	黒灰色土を混入。
⑨	黒灰色粘土質土	青灰色粘土質土をブロック状に含む。
⑩	黒灰色土	植物類を含む。

第８図　ＳＤ０７溝セクション図

〈杯〉

出土した個体数は須恵器に比べ、さほど多いとはいえないが、原形をとどめた状態で出土した個体が多いため、図示できた点数は須恵器杯を上回る。杯の製作技法としては、ロクロ未使用のものは、僅かに小破片１点のみであり、他は全てロクロ使用のものである。ロクロ成形のものは、内面にヘラミガキ・黒色処理を施している点で共通しているが、底部の切り離し技法と再調整の有無によって、３種類に分類することができる。

Ⅰ類：体部下端および底部全面に再調整がなされ、切り離し痕跡が残らないものである。再調整の技法は、(a)回転ヘラケズリを施すもの（第9図１～４）と(b)手持ちヘラケズリを施すもの（第９図５～８）がある。(a)が器高４cm前後の法量を示すのに対し、(b)は法量にばらつきがみられ、形態は多様である。全体的には、体部が内湾気味に立ち上がるものが多

い。

Ⅱ類：回転糸切りの後、体部下端および底部周縁に再調整を施しているものである。Ⅰ類と同じく再調整の技法は、(a)回転ヘラケズリのもの（第10図1・2）と(b)手持ちヘラケズリのもの（第D図3～6）がある。(a)は口径16cm、底径9cm、器高7cm前後の数値を示す。(b)は口径15～17cm、底径6～7cm、器高5.5～6cmと(a)に比べ、底径と器高の数値が小さい。体部は直線的に外傾して立ち上がるものが多いが、内湾気味のものもみられる。

Ⅲ類：回転糸切りの後、無調整のものである（第Ⅱ図1～10、第12図1～13）。杯の主体を占める種類である。口径13～15cm、底径5～6cm、器高4～5cmを中心とする数値を示す。Ⅰ、Ⅱ類に比べ、底径が小さいという特徴をもつ。体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部で外反するものが多い。

〈高台付杯〉

出土数が少なく、図示できたものは2点だけである。器形のわかるものには、杯部が扁平で皿状を呈するものがある（第12図16）。内面はヘラミガキ・黒色処理され、ヘラミガキは外面の口縁部までおよんでいる。高台は外側に大きくふん張り、端部で外反する。この他、低い高台をもち、内外面にヘラミガキ・黒色処理されているものもある（第12図15）。

〈蓋〉

宝珠形のつまみ部分が1点出土している（第2図14）。中心部がやや突出するもので、内外面に丁寧なヘラミガキが施されている。

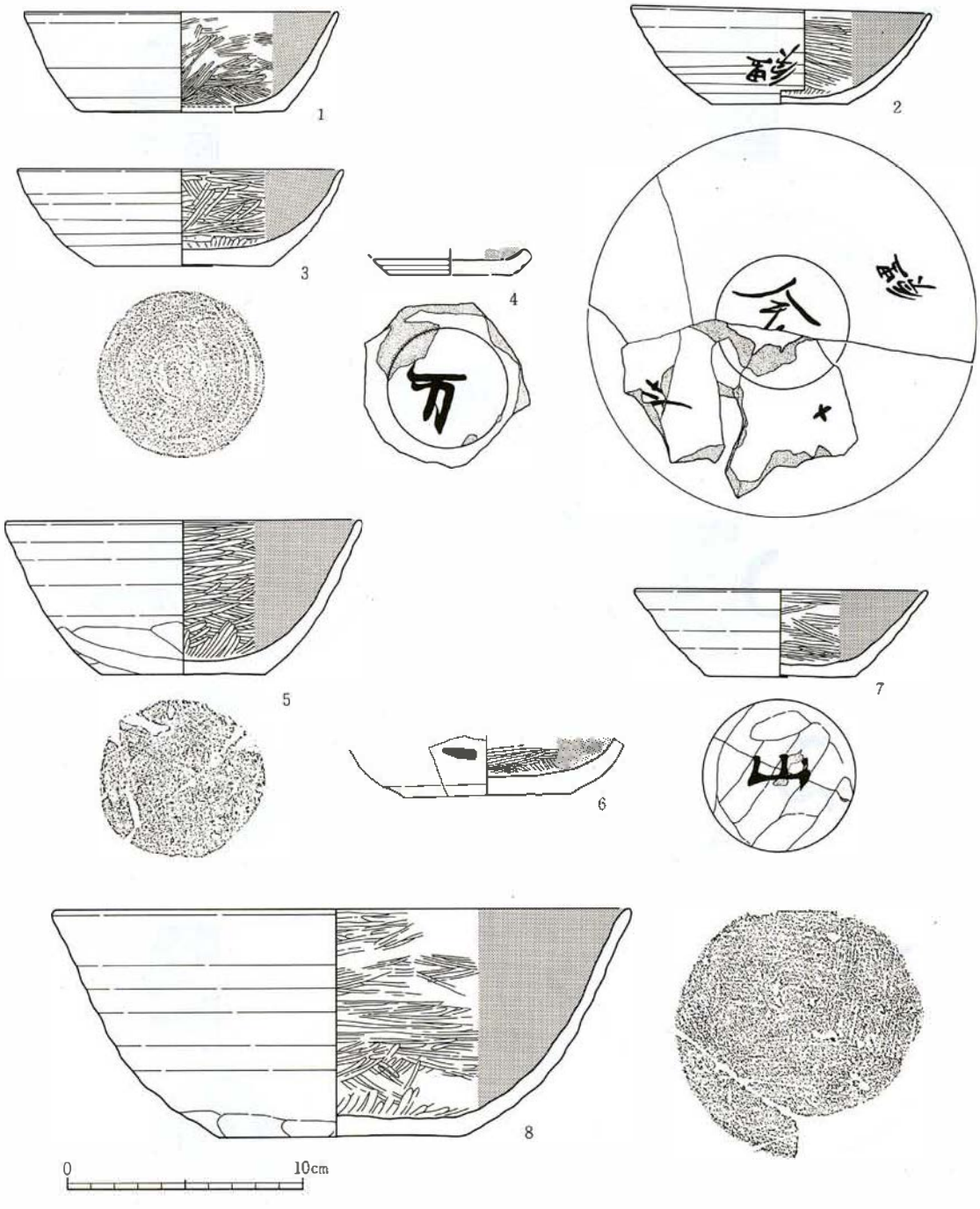
〈甕〉

杯に次いで出土量が多いが、ほとんどが破片のため図示できるものは少ない。成形の際にロクロを使用しないもの（A類）と使用するもの（B類）に大別できる。

A類：出土量が少ないうえ、部分的にしか残存していないため、全体の形態がわかるものは出土していない。口縁部から体部にかけて、内外面にヨコナデを施しているもの（第13図1）。内面にヘラナデを施し、底部に木葉痕を残すもの（第13図2）が出土している。

B類：小形のものと大形のものとがある。小形のものは、最大径の位置が口縁部にあり体部がやや膨らむものである。口縁部は「く」の字形に短く外反し、そのまま丸くおさまるもの（第13図3）と、端部で上方につまみ出されるもの（第13図4・5）とがある。前者は底部が回転ヘラ切りされ、後者は回転糸切りされている。

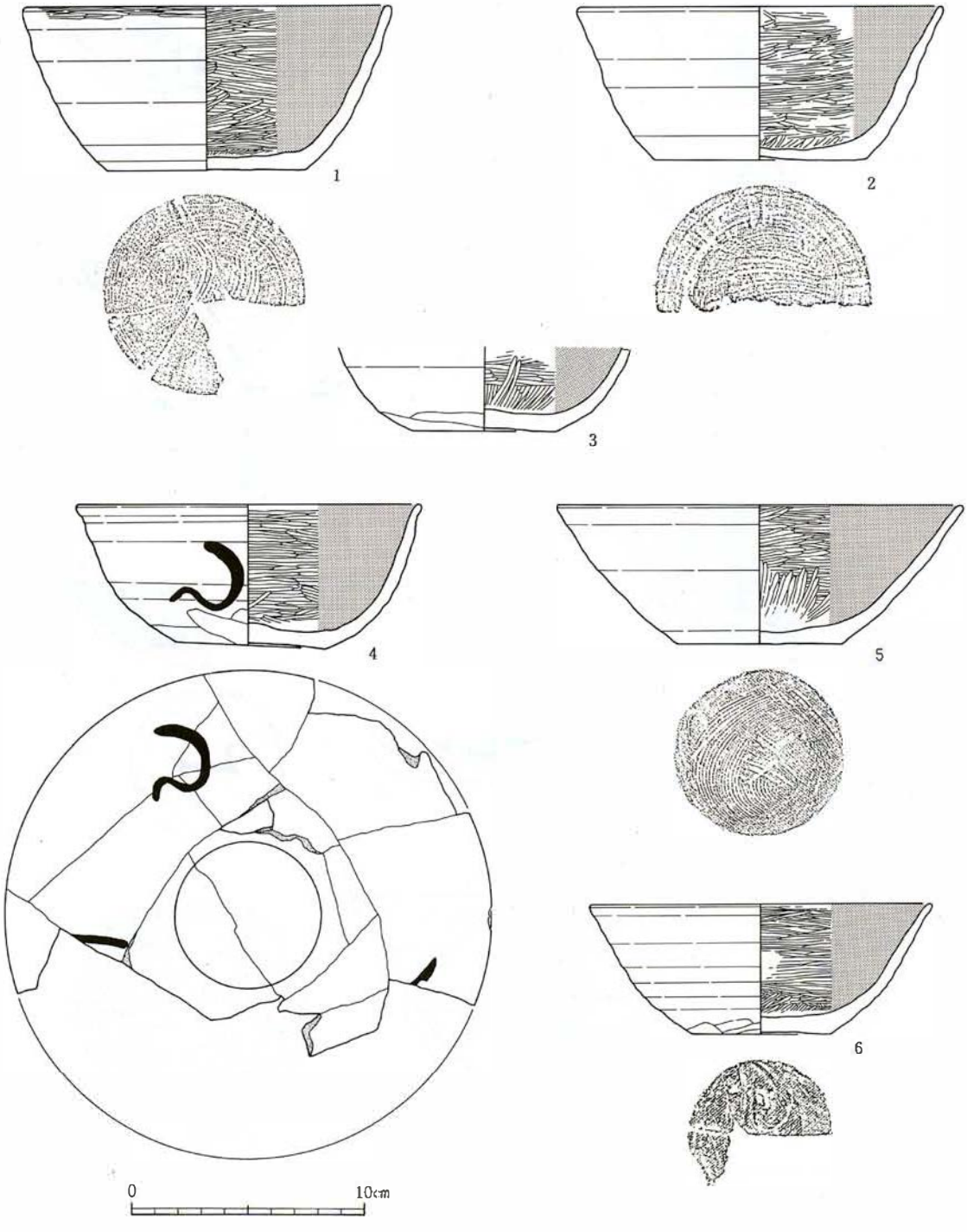
大形のものには、最大径の位置が肩部にあり、頸部が内側にくびれて口縁部が立ち上がって外反するもの（第13図8）と、最大径の位置が口縁部にあり、口縁部は「く」の字形に屈曲して、体部は円筒状を呈するもの（第3図9）がある。前者は、体部外面にヘラケズリの後、刷毛目が施され、内面にも横方向の刷毛目がみられる。後者は、体部下半を欠損しているが、体部



（推定値）

No.	種類	器種	出土遺構	層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考
1	土師器	杯	SD07	3層	ロクロナデ、体部～底部 回転ヘラケズリ	ヘラミガキ黒色処理	1/3	(13.4)	(8.6)	4.2	油煙付着
2	〃	〃	SD05	1層	〃	〃	3/4	12.7	5.6	4.0	
3	〃	〃	SD05	2層	〃	〃	3/4	13.8	7.4	4.1	墨書、体「鰐」カ、底「鳧」カ、他二ヶ所
4	〃	〃	SD05	1層	〃	〃	一部		5.1		底部に「万」の墨書
5	〃	〃	SD05	2層	ロクロナデ、体部～底部 手持ヘラケズリ	〃	2/3	(15.2)	(6.9)	6.5	
6	〃	〃	SD05	1層	ロクロナデ、底部 手持ヘラケズリ	〃	1/4		(6.1)		体部に墨書痕
7	〃	〃	SD05	2層	ロクロナデ、体部～底部 手持ヘラケズリ	〃	1/3	(12.3)	(6.3)	3.7	底部に「山」の墨書
8	〃	〃	SD03	1層	〃	〃	1/3	(22.4)	(10.4)	9.7	

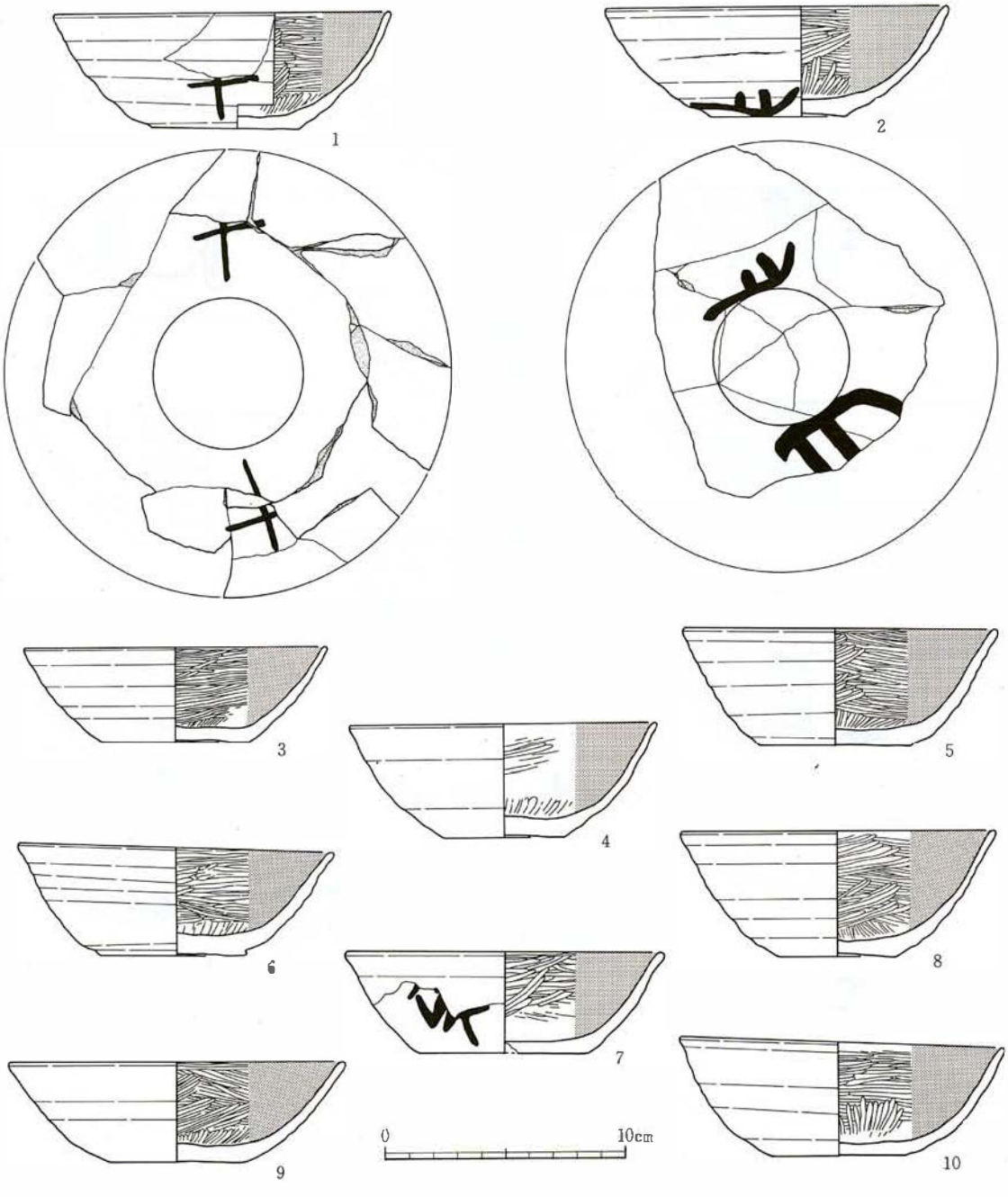
第9図　出土遺物



（推定値）

No.	種類	器種	出土遺構	層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考
1	土師器	杯	SD07	3層	ロクロナデ、底 回転糸切り、体～底 回転ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	1/2	(15.8)	(8.5)	7.0	
2	〃	〃	SD05	2層	〃	〃	1/4	(15.6)	(9.0)	6.5	
3	〃	〃	SD07	1層	ロクロナデ、底 回転糸切り、体～底 手持ヘラケズリ	〃	1/3		(6.2)		
4	〃	〃	SD07	2層	〃	〃	1/3	14.8	6.3	6.0	体部三ヶ所に 遺器
5	〃	〃	SD05	1層	ロクロナデ、底 回転糸切り、底 手持ヘラケズリ	〃	1/3	(17.2)	(7.0)	5.9	
6	〃	〃	SD05	1層	ロクロナデ、底 回転糸切り、体～底 手持ヘラケズリ	〃	1/3	(14.6)	(5.9)	5.5	

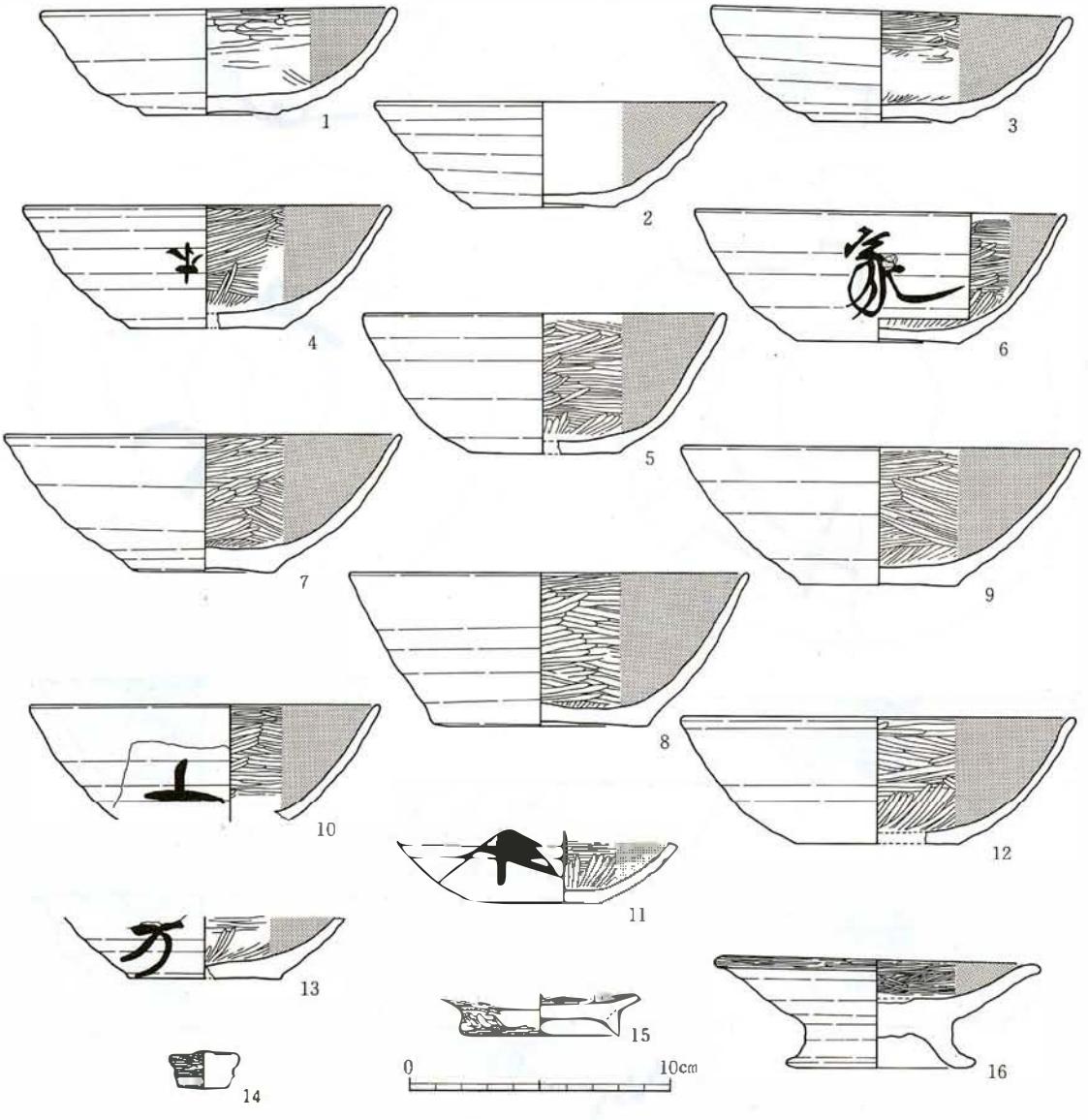
第10図出土遺物



（推定値）

No	種類	器種	出土遺構	層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考
1	土師器	杯	SD05	1層	ロクロナデ、底部 回転糸切り	ヘラミガキ・黒色処理	3/4	14.0	6.1	4.8	体部二ヶ所に「す」の墨書
2	〃	〃	SD07	2層	〃	〃	1/2	(14.2)	(5.6)	4.5	体部二ヶ所に墨書
3	〃	〃	SD05	2層	〃	〃	3/4	(12.6)	(6.1)	3.9	
4	〃	〃	SD05	1層	〃	〃	1/2	(12.6)	(5.0)	4.7	
5	〃	〃	SD05	2層	〃	〃	3/4	13.0	6.2	4.9	
6	〃	〃	SD05	2層	〃	〃	3/4	13.1	6.1	4.5	
7	〃	〃	SD07	2層	〃	〃	1/2	(13.0)	(7.0)	4.2	体部に墨書
8	〃	〃	SD07	1層	〃	〃	3/4	(13.0)	4.8	5.2	
9	〃	〃	SD05	1層	〃	〃	1/2	(13.8)	(5.5)	4.3	
10	〃	〃	SD05	1層	〃	〃	1/2	13.4	5.5	4.7	

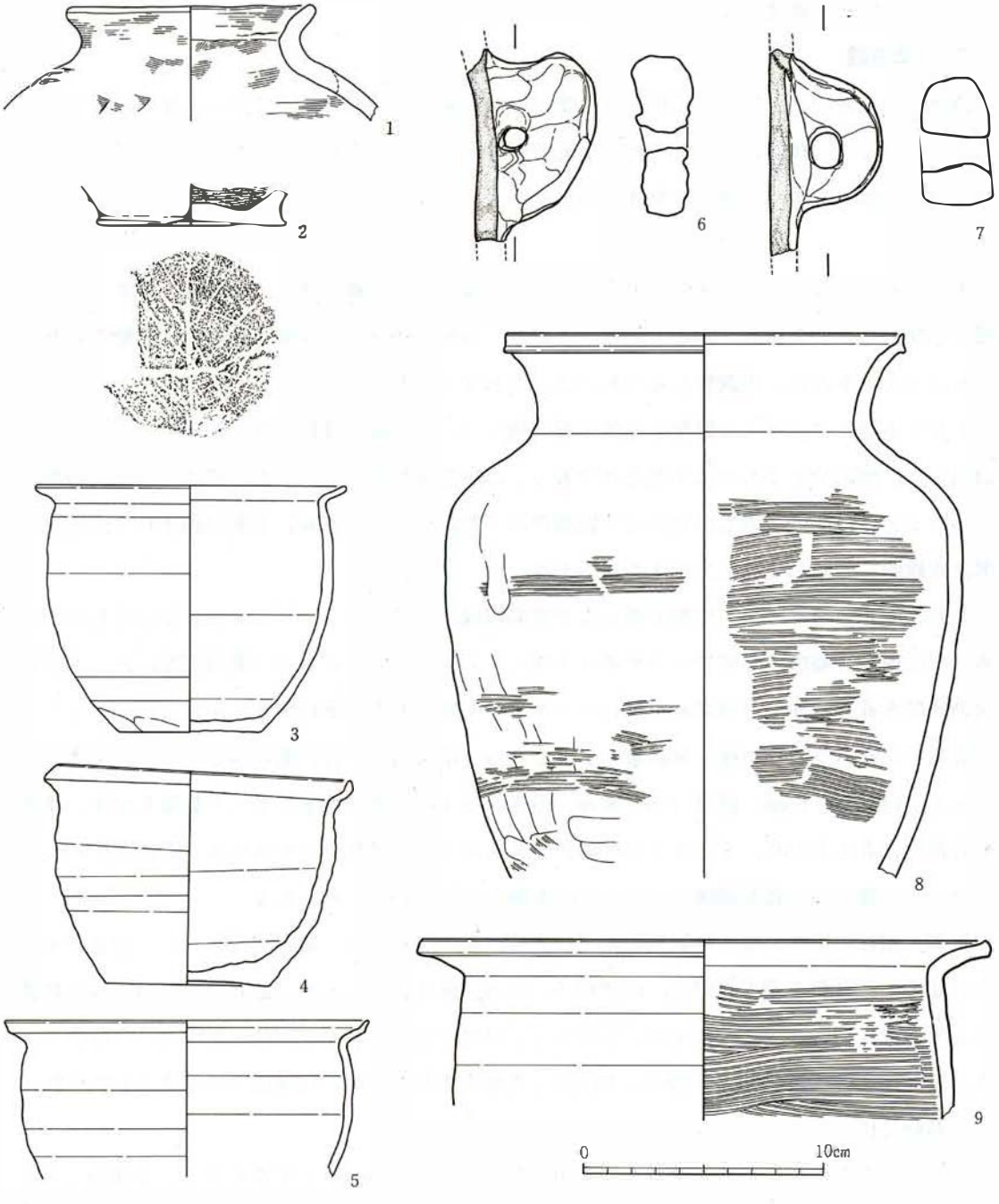
第11図　出土遺物



（推定値）

No.	種類	器種	出土遺構	層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考
1	土師器	杯	SD05	1層	ロクロナデ、底部 回転糸切り	ヘラミガキ・黒色処理	1/3	13.9	5.1	4.1	
2	〃	〃	SD05	1層	〃	黒色処理	3/4	13.5	5.5	4.1	
3	〃	〃	SD05	1層	〃	ヘラミガキ・黒色処理	3/4	13.9	5.5	4.3	
4	〃	〃	SD05	2層	〃	〃	1/3	(14.3)	(5.9)	4.7	体部に「木」の墨書
5	〃	〃	SD05	1層	〃	〃	1/3	(14.0)	(5.8)	5.3	
6	〃	〃	SD05	2層	〃	〃	1/6	(14.4)	(6.3)	5.0	体部に「家」の墨書
7	〃	〃	SD05	1層	〃	〃	1/4	15.4	5.6	5.3	
8	〃	〃	SD05	1層	〃	〃	3/4	(15.2)	6.3	5.9	
9	〃	〃	SD02	2層	〃	〃	1/3	(15.4)	(6.0)	5.3	
10	〃	〃	SD05	1層	ロクロナデ	〃	1/3	(13.6)			体部に墨書
11	〃	〃	SD07	2層	ロクロナデ、底部 回転糸切り	〃	1/4		(4.8)		体部に墨書
12	〃	〃	SD05	1層	〃	〃	1/3	(15.0)	(6.2)	4.9	
13	〃	〃	SD04	1層	〃	〃	1/4		(5.8)		体部に「万」の墨書
14	〃	蓋	SD05	1層	ヘラミガキ	ヘラミガキ	一部				
15	〃	高台杯	SD07	2層	ヘラミガキ・黒色処理	ヘラミガキ・黒色処理	〃		(6.1)		
16	〃	〃	SD05	2層	ロクロナデ、口縁部 ヘラミガキ	〃	ほぼ完形	12.6	7.3	4.2	

第12図　出土遺物



（推定値）

No.	種類	器種	出土遺構	層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考
1	土師器	甕	SD07	3層	口縁部 ヨコナデ、体部 ヘラナデ	口縁部 ヨコナデ、体部 ヘラナデ	一部	(10.4)			
2	〃	〃	SD05	1層		体～底部 ヘラナデ	〃		7.6		底部に木葉痕
3	〃	〃	SD07	3層	ロクロナデ、体 ヘラケズリ、底 回転ヘラ切り	ロクロナデ	½	(13.0)	(6.0)	10.3	
4	〃	〃	SD07	2層	ロクロナデ、底部 回転糸切り	〃		12.9	6.9	8.9	油煙付着
5	〃	〃	SD05	1層	ロクロナデ	〃	一部	(15.1)			
6	〃	把手	SD07	3層	ヘラケズリ、ナデ		〃				
7	〃	〃	SD07	3層	〃		〃				
8	〃	甕	SD07	1層	ロクロナデ、体部 ヘラケズリ、刷毛目	刷毛目ナデ、体部	½	(16.8)			
9	〃	〃	SD07	1層	ロクロナデ	〃	一部	(23.8)			

第13図　出土遺物

内面に横方向への刷毛目が施されている。

（2） 須恵器

須恵器には杯、高台付杯、高杯、蓋、甕、壺、提瓶の器種がある。このうち甕の破片が多く出土しているが、接合によって器形を復元できるものは、ごくわずかである。図示できるものでは杯が圧倒的に多く、須恵器全体の約半分を占める。

〈杯〉

大部分がＳＤ０５、０７溝から出土している。底部の切り離し技法、再調整の有無から４種類に分類できる。全体的にみると回転ヘラ切り、回転糸切りで切り離した後、再調整をもたないものが大半を占め、再調整をもつものはごくわずかである。

Ⅰ類：手持ちヘラケズリ調整を底部全面に施して、切り離し痕跡が残らないものである（第14図１）。図示できるものは１点だけである。口縁部を欠損しているが、底径 7.2cm、器高も５cm以上と比較的大形のものである。底部のヘラケズリは一定方向に丁寧に施されている。体部は直線的に外傾して立ち上がるものである。

Ⅱ類：回転糸切りの後、体部下端および底部周縁に手持ちヘラケズリを施しているものである。底部周縁に幅広い単位でヘラケズリを施し、丸底状を呈するもの（第14図２）と、上げ底状の底部を有し、体部下端にわずかにヘラケズリを施すもの（第14図３）がある。

Ⅲ類：回転ヘラ切りの後、無調整のものである（第14図４～11、第15図１～５）。全体的にみると、口径13～15cm、底径 7.5～８cm、器高３～４cmと比較的まとまった数値を示す。体部が直線的に立ち上がり、そのまま口縁部に至るものと、口縁部でやや外反するものがみられる。また、この類の中に底部周縁にかるくナデを施しているものもみられる。

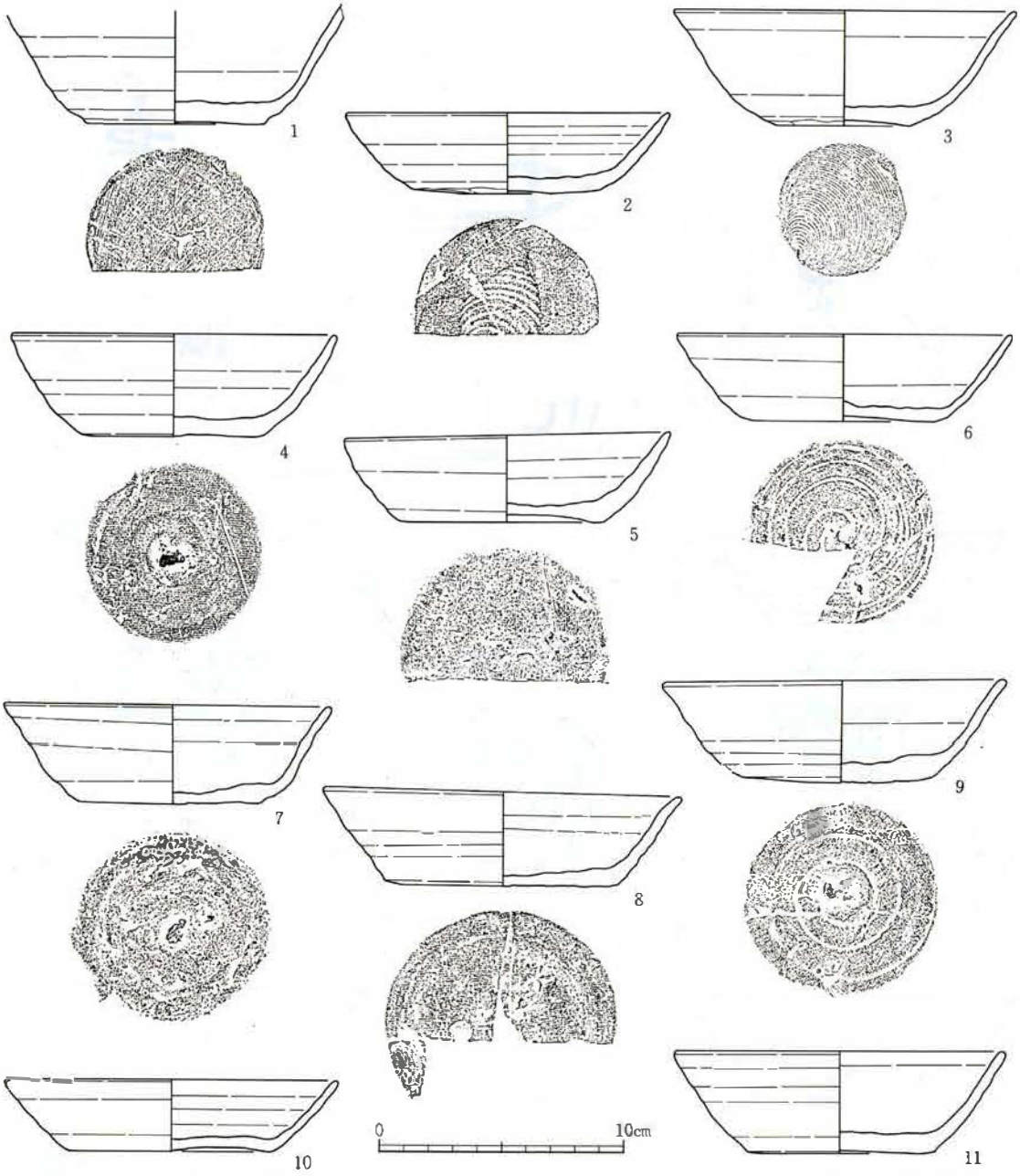
Ⅳ類：回転糸切りの後、無調整のものである（第15図６～13、第16図１～６）。図示できた点数は多く、Ⅲ類を若干上回る。口径12.5～15cm、底径 5.5～８cm、器高 3.5～ 4.5cmの数値を示す。特に、底径は６cm程度のものが多く、口径に比して小さな底径をもつという特徴を示す。底部は上げ底気味で、体部はやや内湾しながら立ち上がり、口縁部で外反するものが多い。

〈高台付杯〉

図示できたものは１点だけである（第16図７）。口径が10cmと小形のもので、全体的に丸味をおび、口縁部で外反する。高台は短く、外側にあまりふん張らない。底部に回転糸切り痕が残る。

〈高杯〉

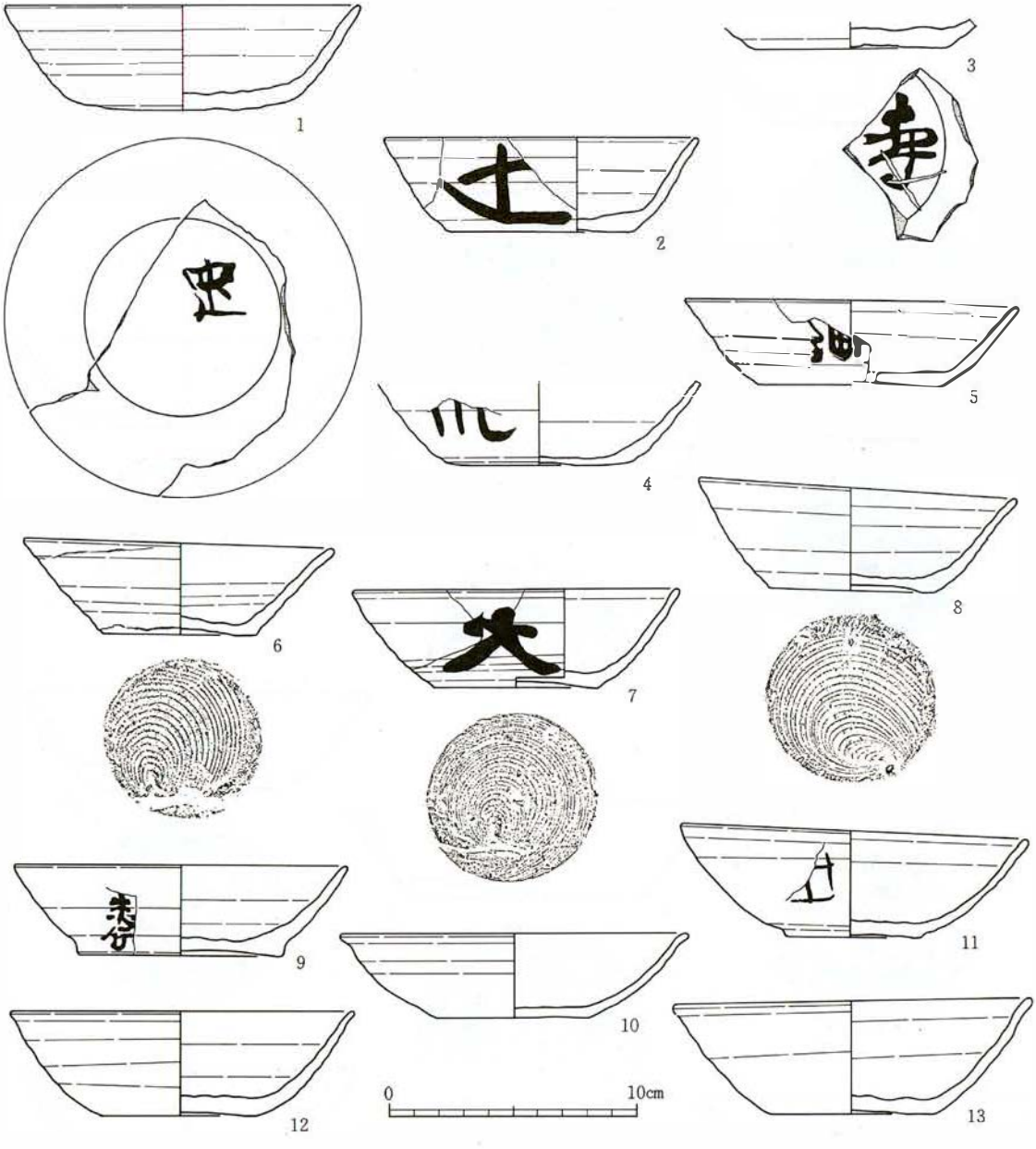
有蓋高杯がＳＤ０５溝から出土している。受部と脚部を欠損しているものである（第16図８）。口縁部は長くほぼ直立し、杯部は扁平で丸底状を呈する。杯部外面に回転ヘラケズリ、口縁部内面に横方向のヘラケズリが施されている。器厚が杯部で1.2cmと厚く、また成形、調整とも粗



（推定値）

No.	種類	器種	出土遺構	層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考
1	須恵器	杯	SD07	3層	ロクロナデ、底部 手持ヘラケズリ	ロクロナデ	1/3		(7.2)		
2	〃	杯	SD05	1層	ロクロナデ、底 回転糸切り、体～底 手持ヘラケズリ	〃	1/3	(13.0)	(7.6)	3.3	
3	〃	杯	SD05	1層	〃	〃	1/3	(14.8)	(5.4)	4.7	
4	〃	杯	SD07	2層	ロクロナデ、底部 回転ヘラ切り	〃	3/4	13.2	7.5	4.2	底部に墨書痕
5	〃	杯	SD07	3層	〃	〃	2/3	(13.3)	(8.3)	3.6	
6	〃	杯	SD05	1層	〃	〃	2/3	(13.4)	(7.4)	3.5	
7	〃	杯	SD05	3層	〃	〃	完形	13.5	7.4	4.1	
8	〃	杯	SD07	3層	〃	〃	1/3	(14.7)	(9.6)	3.9	
9	〃	杯	SD07	3層	〃	〃	ほぼ完形	13.7	7.7	4.1	
10	〃	杯	SD05	1層	〃	〃	1/3	(13.6)	(8.2)	3.0	内外面に火ダメ半痕
11	〃	杯	SD07	1層	〃	〃	1/3	(13.2)	(7.7)	4.2	

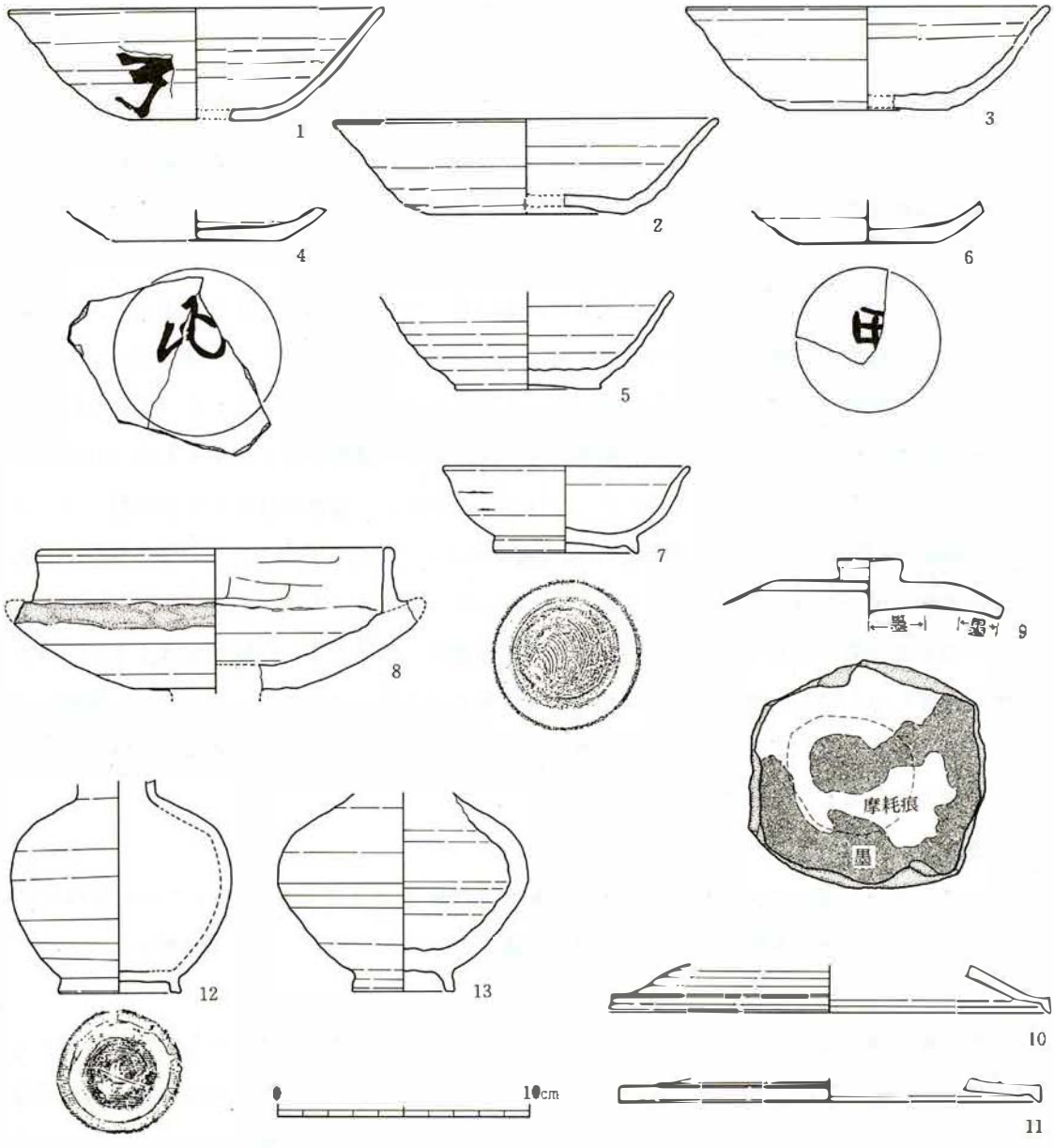
第14図　出土遺物



（推定値）

No.	種類	器種	出土遺構	層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考
1	須恵器	杯	SD07	3層	ロクロナデ、底部 回転ヘラ切り	ロクロナデ	½	(14.4)	(8.0)	4.2	底部に「岡」の墨書
2	〃	〃	SD07	3層	〃	〃	¼	(12.7)	(7.4)	3.8	体部に墨書
3	〃	〃	SD06	2層	〃	〃	一部		(7.6)		底部に「寺」の墨書、「×」のヘラ描き
4	〃	〃	SD05	1層	〃	〃	½		(7.6)		体部に墨書
5	〃	〃	SD07	2層	〃	〃	½	(13.4)	(7.4)	3.4	体部に「恵」の墨書
6	〃	〃	SD06	1層	ロクロナデ、底部 回転糸切り	〃	完形	12.4)	6.2	3.8	
7	〃	〃	SD05	2層	〃	〃	ほぼ完形	13.2	6.7	4.0	体部に「大」の墨書
8	〃	〃	SD05	1層	〃	〃	完形	12.8	6.7	3.1	
9	〃	〃	SD07	1層	〃	〃	½	(13.4)	(8.2)	3.9	体部に墨書「[illegible]」か
10	〃	〃	SD05	1層	〃	〃	½	(13.8)	(6.2)	3.4	
11	〃	〃	SD05	1層	〃	〃	½	13.9	5.4	4.3	体部に「田」の墨書
12	〃	〃	SD07	1層	〃	〃	¾	13.7	6.3	4.2	
13	〃	〃	SD07	1層	〃	〃	¾	14.2	6.5	4.5	

第15図　出土遺物



（推定値）

No.	種類	器種	出土遺構	層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考
1	須恵器	杯	SD05	1層	ロクロナデ、底部 回転糸切り	ロクロナデ	½	(15.0)	(5.4)	4.4	体部に「万」の墨書
2	〃	〃	SD02	2層	〃	〃	½	(15.4)	(7.8)	3.8	油煙付着
3	〃	〃	SD05	1層	〃	〃	⅓	(14.2)	(6.4)	4.1	底部に墨書痕
4	〃	〃	SD06	2層	〃	〃	一部		(6.6)		底部に墨書「瓦」カ
5	〃	〃	SD07	1層	〃	〃	½		5.8		
6	〃	〃	SD07	2層	〃	〃	一部		(5.6)		底部に「甲」の墨書
7	〃	高台杯	SD05	1層	〃	〃	½	(10.0)	5.8	3.4	
8	〃	高杯	SD05	1層	ロクロナデ、体部 回転ヘラケズリ	ロクロナデ、[illegible]ヘラケズリ	½	(14.3)			
9	〃	蓋	SD03	1層	ロクロナデ、天井部 回転ヘラケズリ		¼				硯に転用
10	〃	〃	B—07	皿層	ロクロナデ	ロクロナデ	一部	(17.6)			
11	〃	〃	SD07	3層	〃	〃	〃	(16.8)			
12	〃	蓋	SD03	2層	ロクロナデ、体部 回転ヘラケズリ	〃	½		4.8		摩耗痕「×」のヘラ傷、
13	〃	〃	SD07	1層	ロクロナデ、体、底部 回転ヘラケズリ	〃	½		(4.2)		肩部に自然釉

第16図　出土遺物

く、全体的に粗雑な感じを受ける。

〈蓋〉

蓋は、全体の形態がわかるものは出土していない。第16図９は、中心部がややくぼんだ宝珠形のつまみをもつものである。天井部は扁平で、回転ヘラケズリされている。硯に転用されたもので、内面は中心部が摩耗しており、墨痕も認められる。

〈壺〉

壺には、短頸壺と長頸壺がある。短頸壺は、広口壺と呼ばれる器種が１点出土している（第17図11）。口縁部は直線的に短く外傾し、肩部がやや張り出すものである。体部外面にわずかに平行叩きの痕跡が認められる。長頸壺には、小形のものと大形のものがある。小形のものは、いずれも頸部より上を欠損している。肩部が張り出し、やや算盤玉状を呈するもの（第16図13）と、さほど張り出さず球形を呈するもの（第16図12）がある。後者は体部下半を回転ヘラケズリし、頸部から体部にかけては、濃緑色の自然釉がかかっている。大形のものには、頸部の径が、(a)５cm前後と細いもの（第17図１・３・５）と、(b)約７cmと太いもの（第17図２・４）がある。ほとんどが部分的にしか残存しておらず、全体の形態は不明である。口縁端部は上下へのつまみ出しが著しいものと、さほど明瞭でなく、丸味をもっておさまるものなどがある。体部が残存しているもの（第17図６～10）の、体部下半には縦方向のヘラケズリ、あるいは回転ヘラケズリを施しているものもある。

〈甕〉

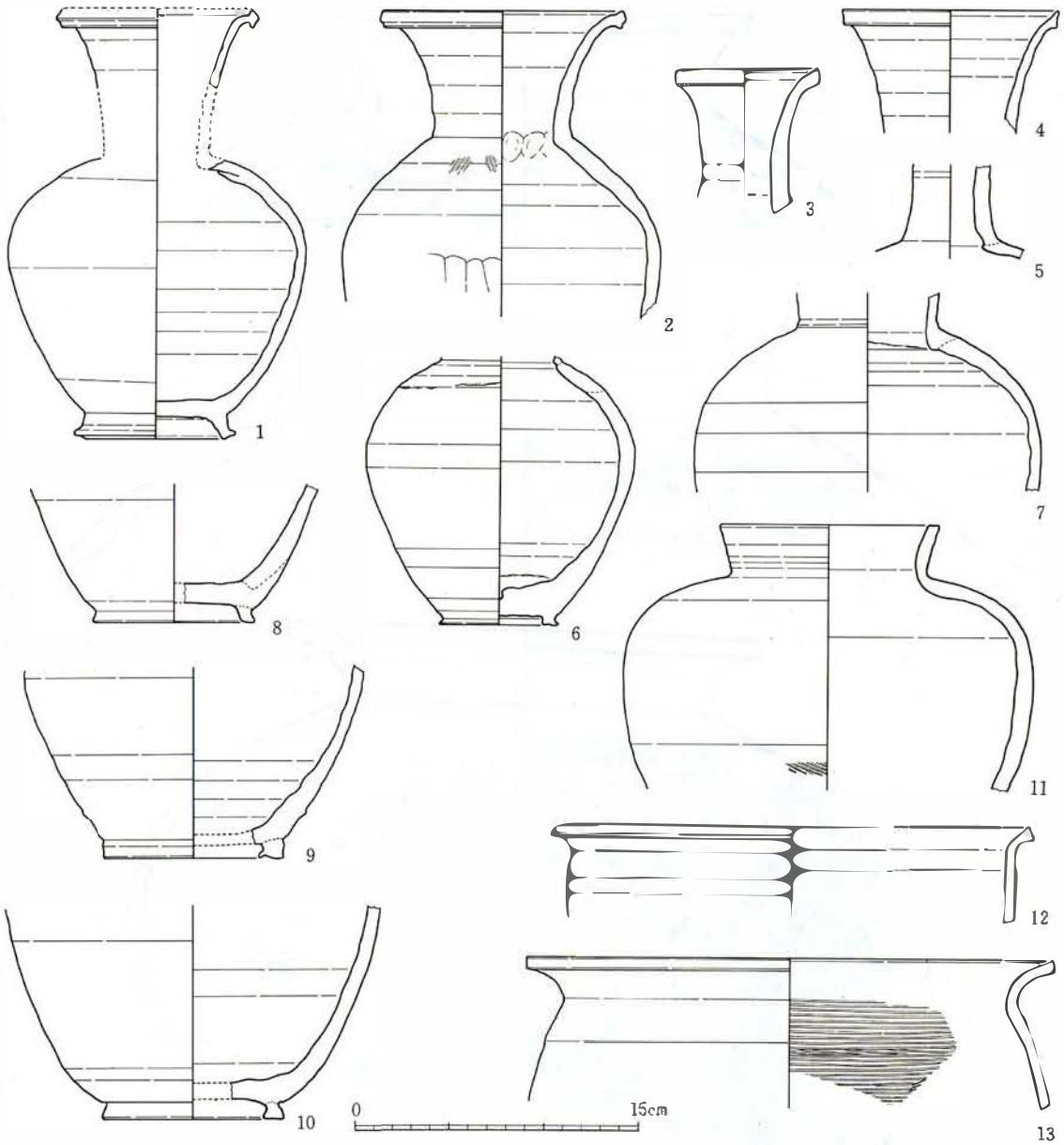
破片数に比べて図示できたものは少ない。多くは口縁部から頸部、肩部までしか残存しておらず、全体の形態は不明である。最大径の位置と形態から、大きく２つに分類することができる。

Ⅰ類：最大径の位置が肩部あるいは体部中央部にあり、体部はほぼ球形を呈するものである（第18図１～３、第19図１～６）。口縁部、頸部は大きく外反し、程度の差はあるが、口縁端部で上下につまみ出されているものがほとんどである。外面の頸部に櫛描き波状文を施し、体部には平行叩きの痕跡を残すものが多い。内面のあて具痕には、同心円文、無文、格子文、平行線文、花文などがあるが、この中では無文のあて具痕が最も多い。またヘラナデや刷毛目状の調整を施しているものもある。

Ⅱ類：最大径の位置が口縁部にあるもの（第17図12・13）である。口縁部は短く外反し、端部が上下につまみ出されている。いずれも体部中央部より下を欠損しているが、鉢形を呈する器形と思われる。

（３） 赤焼き土器

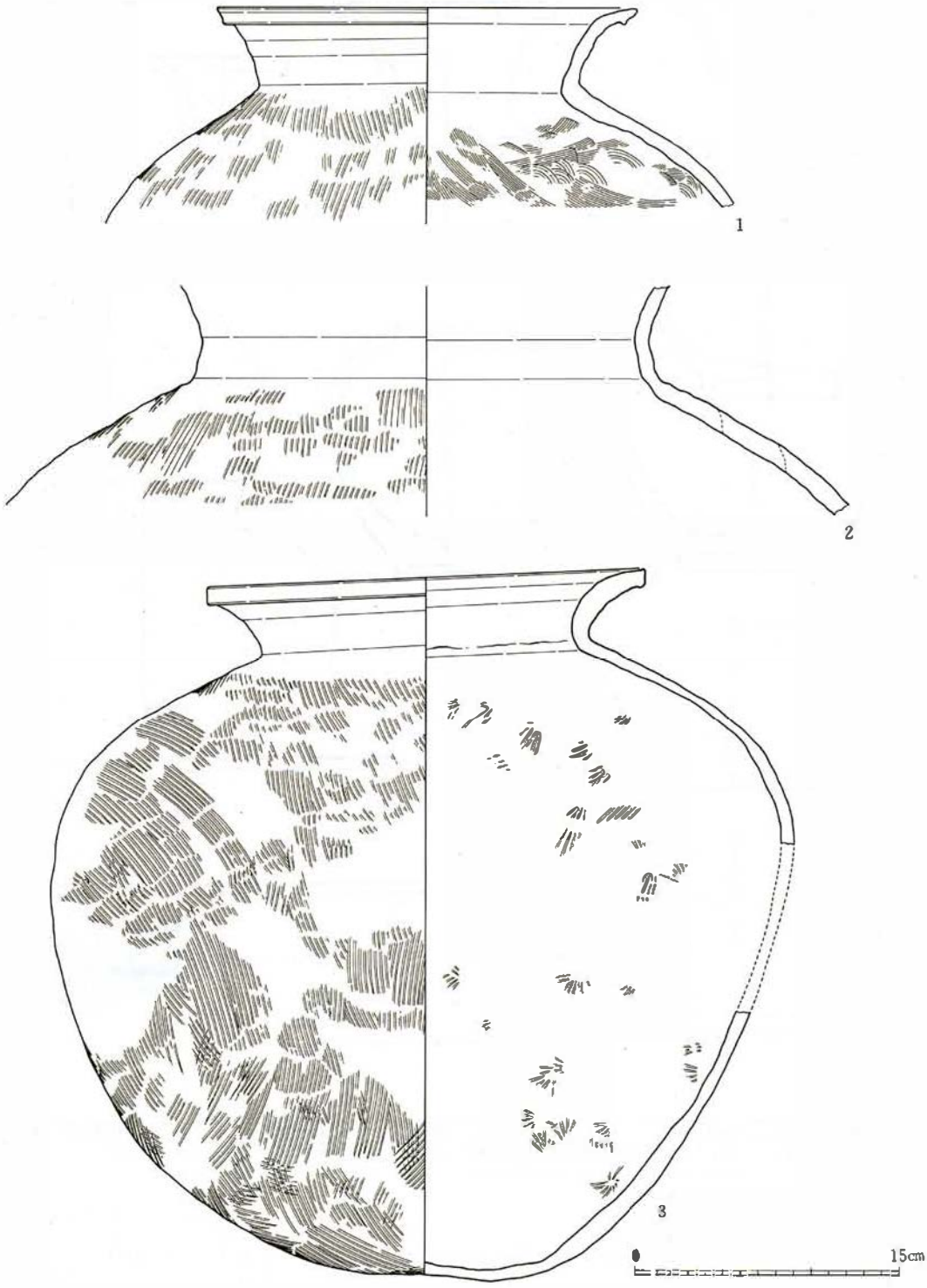
杯、皿、高台付皿、高台付鉢の器種がある。出土量は土師器、須恵器に比べて、さほど多い



（推定値）

No.	種類	器種	出土遺構	層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考
1	須恵器	壺	SD07	3層	ロクロナデ、体部 回転ヘラケズリ→ロクロナデ	ロクロナデ	⅓	(10.2)	(8.5)		
2	〃	〃	SD05	1層	ロクロナデ、体部 平行叩き、ヘラケズリ	〃	¼	(13.0)			
3	〃	〃	SD05	1層	ロクロナデ	〃	一部	7.3			
4	〃	〃	SD05	1層	〃	〃	〃	(11.3)			
5	〃	〃	SD03	2層	〃	〃	〃				
6	〃	〃	SD07	2層	ロクロナデ、体部 回転ヘラケズリ	〃	½		6.3		
7	〃	〃	SD07	1層	〃	〃	½				頸～体部に自然釉
8	〃	〃	SD07	2層	ロクロナデ、体部回転ヘラケズリ→ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラナデ	一部		8.4		
9	〃	〃	SD07	3層	ロクロナデ	ロクロナデ	〃		(9.5)		
10	〃	〃	SD07	2層	ロクロナデ、体部 回転ヘラケズリ→ロクロナデ	〃	〃		(9.6)		
11	〃	〃	SD03	2層	ロクロナデ、体部 平行叩き→ロクロナデ	〃	½	(11.6)			
12	〃	甕	SD03	2層	ロクロナデ	〃	一部	(24.9)			
13	〃	〃	SD05	1層	〃	ロクロナデ、刷毛目	〃	(27.8)			

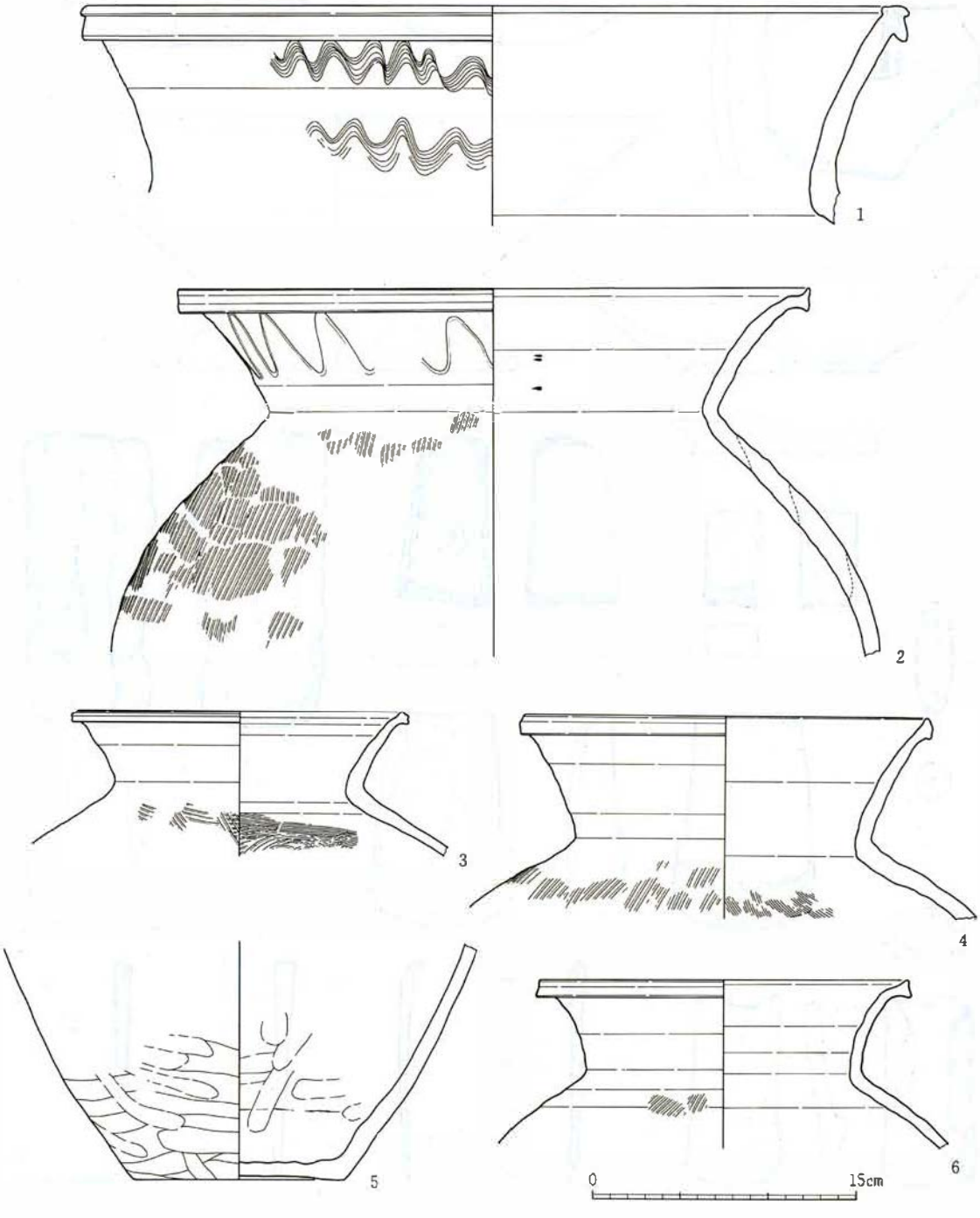
第17図　出土遺物



（推定値）

No.	種類	器種	出土遺構	層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考
1	須恵器	甕	SD07	2層	ロクロナデ、体部 平行叩き	ロクロナデ、同心円文→ヘラナデ	一部	23.9			
2	〃	〃	SD07	2層	〃	ロクロナデ	〃				
3	〃	〃	SD07	3層	〃	ロクロナデ、花文→ヘラナデ	½	(24.9)		(39.6)	

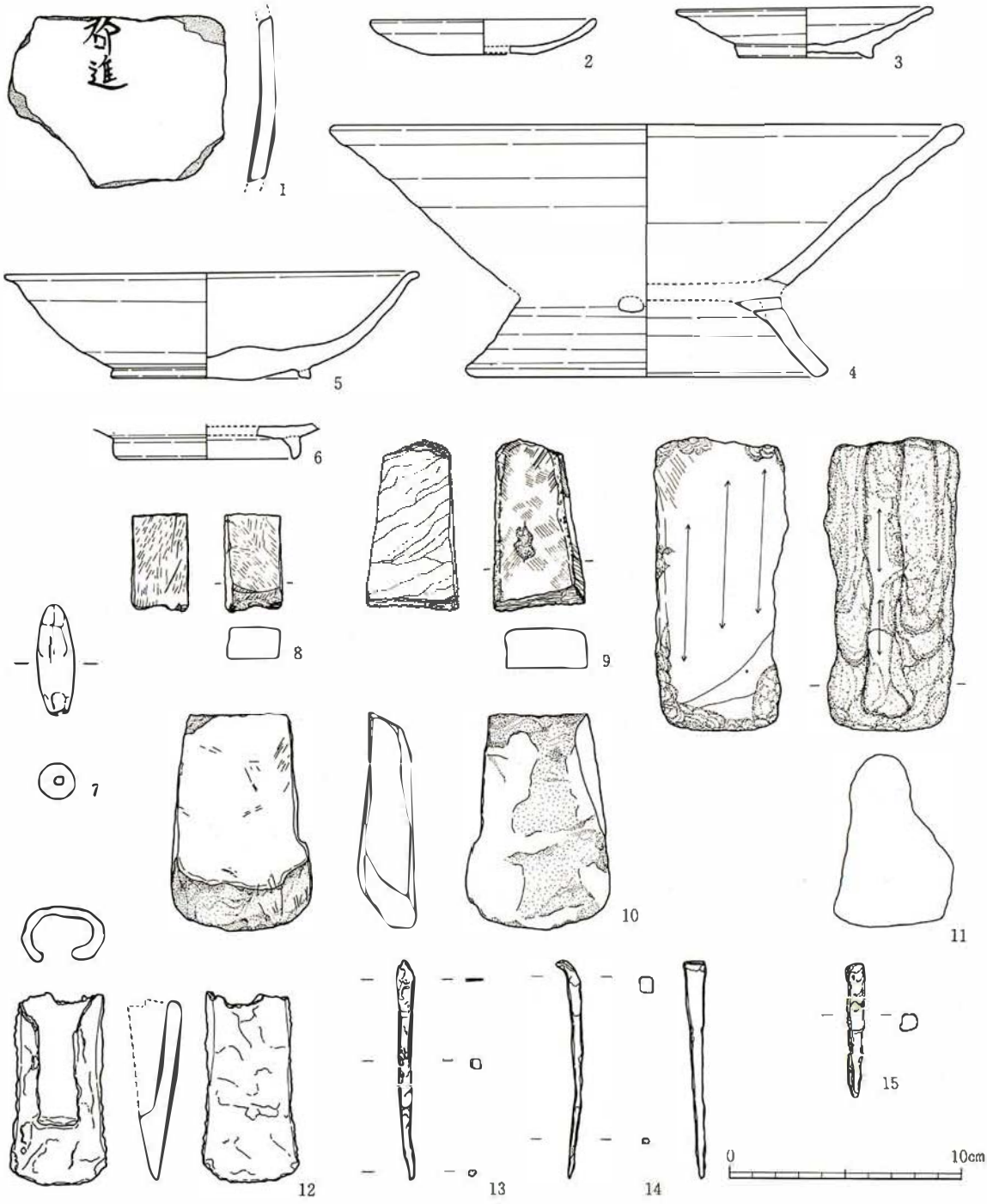
第18図　出土遺物



（推定値）

No.	種類	器種	出土遺構	層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考
1	須恵器	甕	SD07	2層	ロクロナデ、口縁部 波状文	ヒリクロナデ	一部	(47.2)			
2	〃	〃	SD05	1層	ロクロナデ、口縁 波状文、体部 平行叩き	〃	〃	(36.0)			
3	〃	〃	SD05	1層	ロクロナデ、体部 平行叩き	同心円文→ヘラナデ	〃	(18.4)			
4	〃	〃	SD05	1層	〃	ロクロナデ、体部 ヘラナデ	〃	(23.4)			
5	〃	〃	SD02	2層	ロクロナデ、体 ヘラナデ、体～底 ヘラケズリ	ロクロナデ 体～底部 ヘラナデ	〃		12.0		
6	〃	〃	SD07	2層	ロクロナデ、体部 平行叩き→ロクロナデ	ロクロナデ、体部 同心円	〃	(22.5)			

第19図　出土遺物



（推定値）

No.	種類	器種	出土遺構	層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考
1	須恵器	甕	SD07	2層	ロクロナデ、体部 平行叩き	ロクロナデ 無文のあて具痕	一部				体部に墨書「□□命進」
2	赤焼き土器	皿	SD07	1層	ロクロナデ、底部 回転糸切り	ロクロナデ	½	(9.8)	(4.6)	1.5	
3	〃	台付皿	SD03	2層	〃	〃	½	11.0	5.7)	2.1	
4	〃	台付鉢	SD05	1層	ロクロナデ	〃	½	(27.4)	5.7	(10.9)	高台部二ヶ所に穿孔
5	灰釉陶器	椀	SD07	2層	ロクロナデ、底部 回転ヘラケズリ	〃	½	18.0	8.7	4.5	内面に重ね焼きの痕
6	〃	〃	SD07	3層	ロクロナデ	〃	一部		(7.8)		

7、土錘、SD07、3層　8～11、砥石、SD07　12、鉄斧、SD07、3層　13、鉄鏃、SD07、2層　14、15、鉄釘、SD07、3層

第20図　出土遺物

とはいえない。推定口径 9.8cmと小形で扁平な皿（第20図２）と、削り出し高台をもつ高台付皿(第20図３)がある。いずれも底部には回転糸切り痕が残っている。高台付鉢は推定口径27.4cmを計る大形のもの（第20図４）である。体部から口縁部にかけて直線的に逆「八」の字形に開き、高台はやや外反しながら外側にふん張る。鉢部と高台の接合部分には２ヶ所で穿孔されている。

（4） 瓦

瓦は、調査区全域より出土している。種類は平瓦と丸瓦である。丸瓦の中には刻印文字瓦がある。平瓦は、総数90点で、叩きの原体、製作・調整の技法等より観察すると、叩きでは格子状、矢羽根状、縄目があり、中にはナデを施し叩きの原体が不明なものがある。縄目の叩きの中にはナデを施したものと、縄目が潰れたものとがある。凹面は、布目痕が残るものと布目をナデ消しているものがあり、この中には、樋巻痕の残るものと粘土塊から切り離した際に糸切痕の残るものがある。第22図４は凸面に格子状叩きを施し、凹面には布目痕の残るもので、側端部が折れ曲る特徴をもつ。第21図１・２は、凸面に縄目叩きを施しているが縄目が潰れており、凹面には布目痕の残るものである。大きさは１が長さ34.1cm、広端幅推定約27cm、狭端幅23.3cmで、２は長さ35.5cm、広端幅推定約24cm、狭端幅21.6cmを計る。

丸瓦は総数で 134点出土している。第22図１は玉縁付きの有段丸瓦で、凸面を縄叩きした後ロクロナデ成形を施し、凹面は布目痕が残っている。

刻印文字瓦は、丸瓦の凸面に「田」と刻印されたものが１点出土している（第22図３）。刻印の一辺の長さは2.0cmを計る。

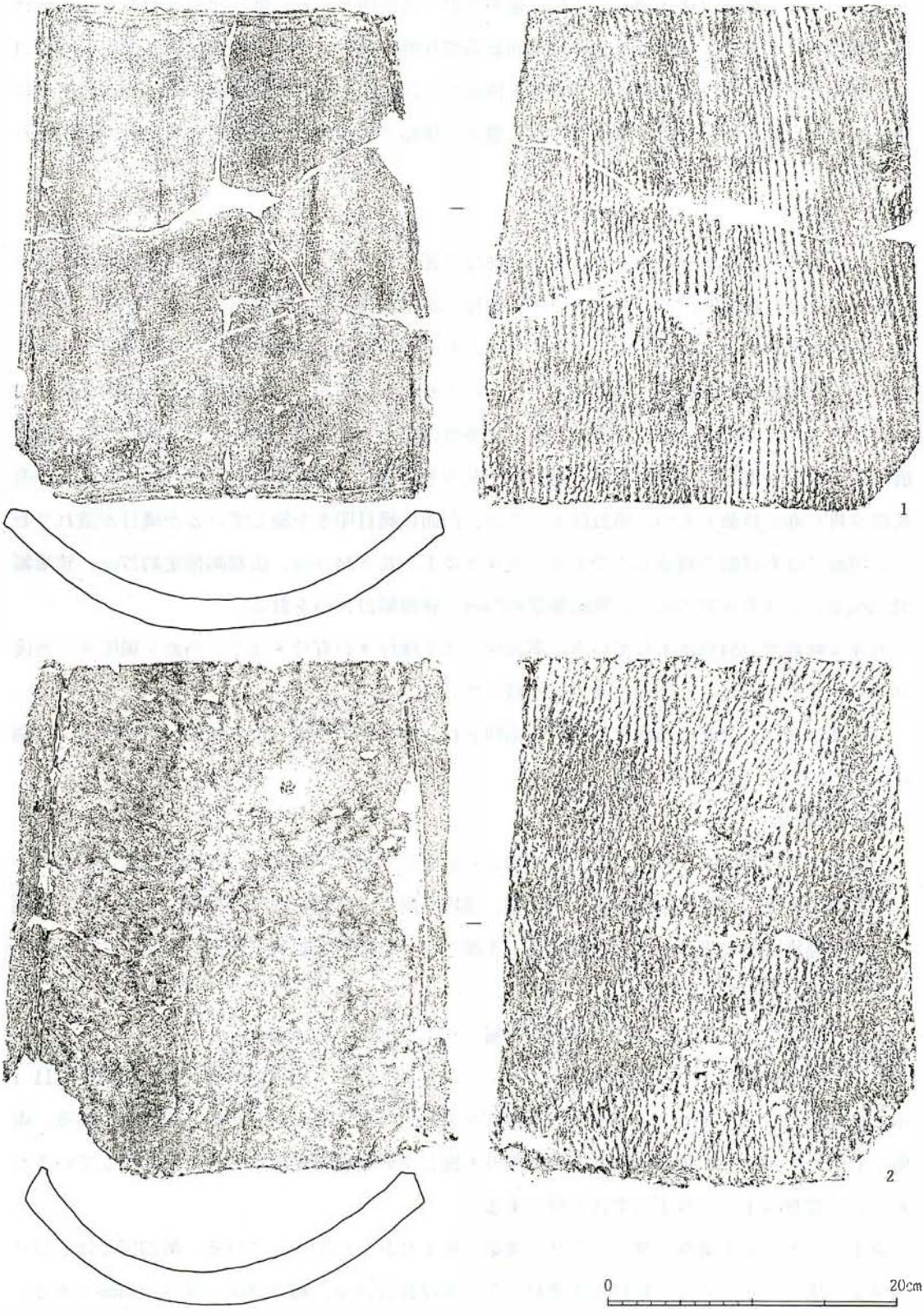
（5） 木製品

木製品はＳＤ０２、０４、０５、０７溝より出土しており、特にＳＤ０５溝からの出土が多い。種類は木簡、斎串、祭祀用具、椀、盤、曲物の側板、蓋板、底板、折敷、下駄、もじり編み用の木製錘、柄の把手、弓などである。本稿では、時間的な制約上代表的なものについてだけ紹介するにとどめる。

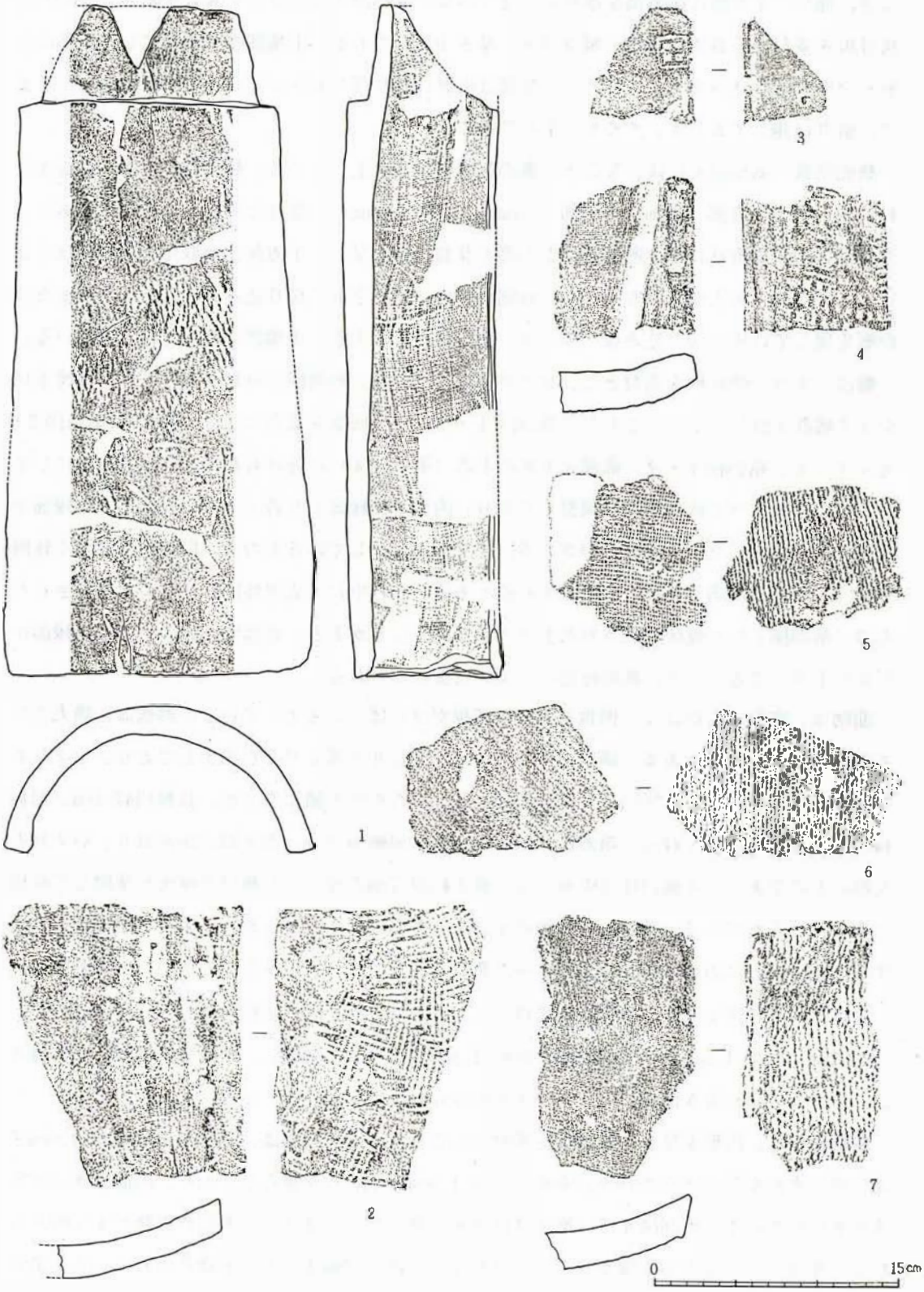
木簡（第23図１）は、ＳＤ０７溝の第４層より１点出土している。

上方部だけ残存しており「禁杖八十……」と記されている。柾目板を素材とし、現存長11.1cm、最大幅 2.7cm、厚さ 0.3cmほどで上端部を平頭状にしている。断面形は長方形である。両面とも削りが入念で、両側面にも入念な削りを施している。中央部から下方が欠損しているために、「禁杖八十」より下の字は不明である。

斎串は、ＳＤ０４溝第１層とＳＤ０５溝第１層より計２点出土している。第23図２はＳＤ０４溝より出土したもので、柾目板を素材とし、現存長21.9cm、幅 2.8cm、厚さ 0.3cmである。上端部は圭頭状のもので、断面形は長方形である。両面とも削りが入念で、両側面にも削りを



第21図　出土遺物（瓦１）



第22図　出土遺物（瓦２）

入念に施し、下方部は両側面を削り尖らせている。第23図３はＳＤ０５溝より出土したもので、板目板を素材とし長さ34.1cm、幅 3.3cm、厚さ 0.6cmである。上端部を圭頭状にし、頭部に三形と台形に切り込みを入れている。下端部は山形に切り落し尖らせている。側面は割ったままで、削りは施しておらず、やや形が歪んでいる。

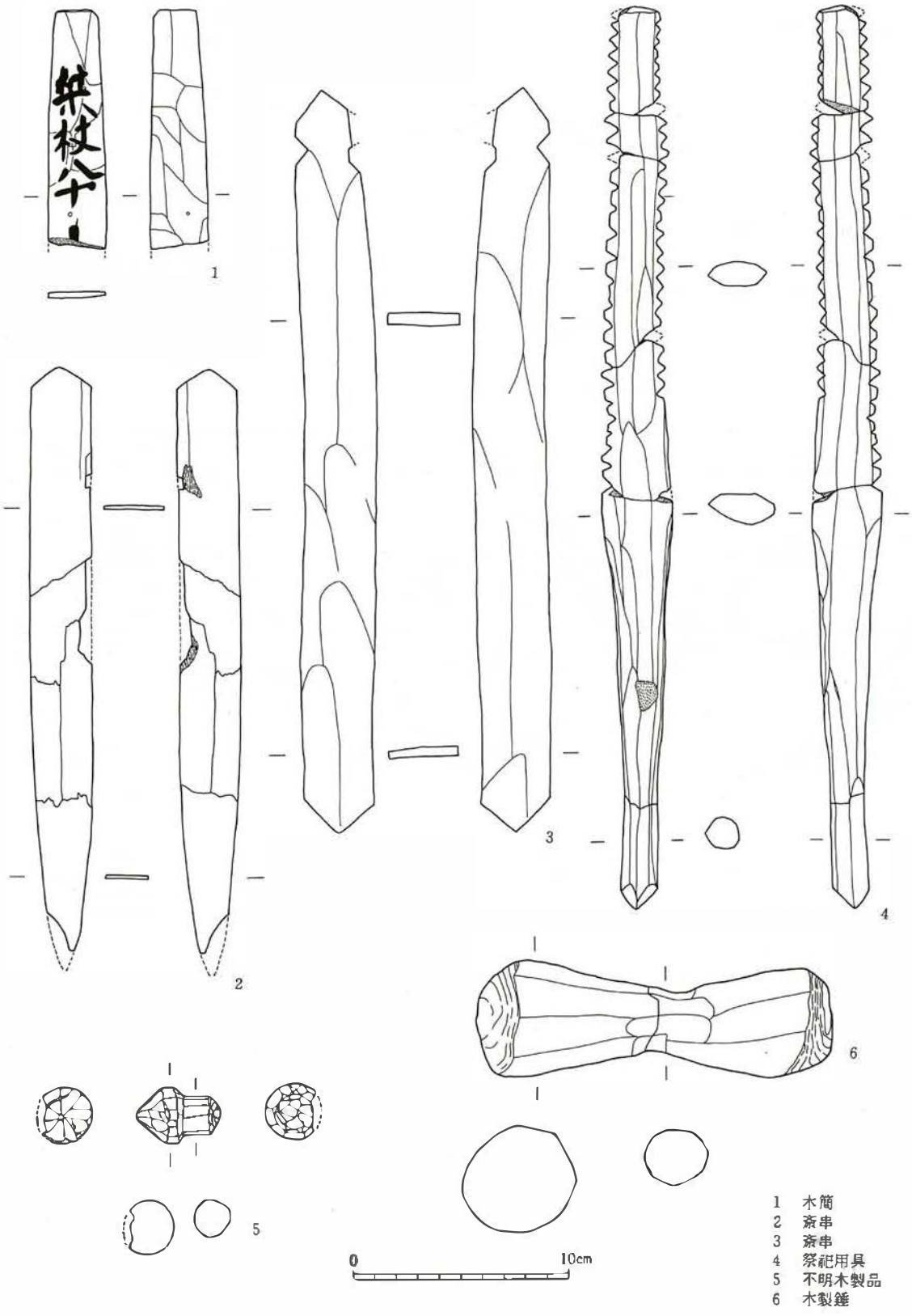
祭祀用具（第23図４）は、ＳＤ０６溝の第１層より出土している。板目材を使用し、長さは41.7cm、幅は上方部 2.2cm、中央部 3.1cm、下方部 1.6cmで、厚さは平均 1.3cmほどである。上端部は若干山形状にし、断面形は上方部が算盤玉状を呈し、下方部は面取りを施し棒状にしている。両面とも入念な削りを施し、両側面には「Ｖ」字形に切り込みを入れ、三角形または台形を呈している。切り込みは一方が26、他方は25を数える。下端部は削って尖らせている。

盤は、すべて柾目板を素材とし、ロクロ挽きしている。形態的に分類すると、ロクロ挽きによって底部を台付にしているもの（第24図１・３・５）底部を高台にしているもの（第24図２・６・７・８、第25図１・２）底部が丸底のもの（第24図４）に分けられる。底部を台付にしているものは、すべて底部を削り調整しており、内面が口縁部より若干くぼむものと、口縁部が短かく内湾気味に立ち上がるものがある。底部を高台にしているものは、口縁部が短かく外側へ開くものと、内湾気味に立ち上がるものがある。この中には底部外面に「万」と墨書されたもの（第25図１）と焼印の押されたもの（第25図２）とがある。底部が丸底のものは口縁部が短かく上方へ立ち上がり、底部外面にロクロ爪痕がみられる。

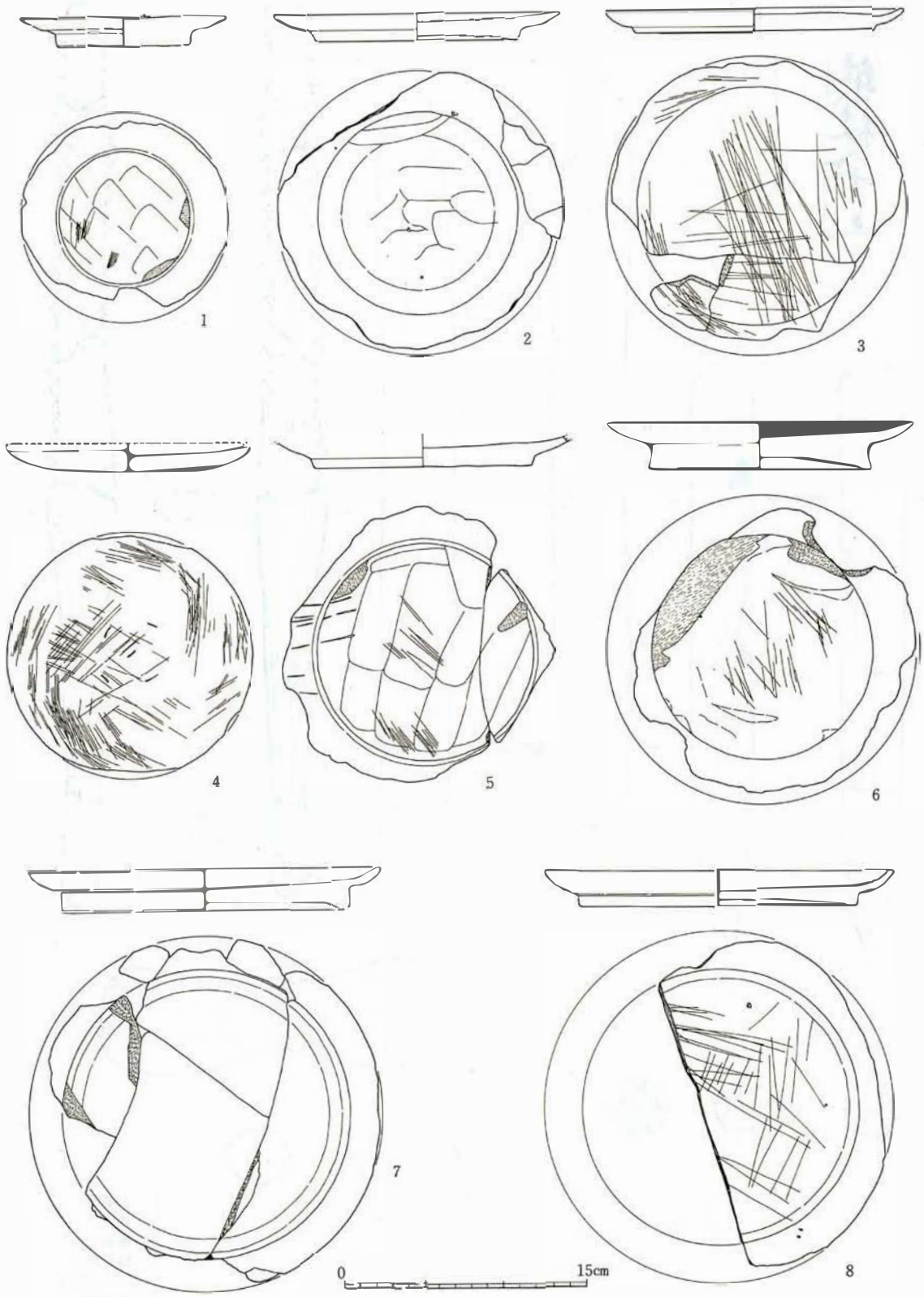
曲物は、完形のものはなく側板と蓋板、底板がばらばらに出土している。側板は、隅丸方形のものと円形のものがある。隅丸方形のものは、ＳＤ０５溝より２点出土しており、いずれも柾目板を用いている。第30図は一辺が破損しているため推定値になるが、長軸約47.1cm、短軸44.1cm、高さ21.1cmを計る。第29図は長軸46.8cm、短軸39.5cm、高さ23.2cmを計り、いずれも大形のものである。４面のほぼ中央には、長さ約27.7cmの加工した角材が樺皮を使用して側板に取り付けられている。角材は、曲物の足になるものと考えられるが、４本の角材のうち対面する２本は上方に方形の穴を穿ちその中に角材を通しており、把手として用いたと思われる。

蓋板は（第27図１）は、板目板を素材としたもので、約３分の２程残存しているものである。径22.2cm、厚さ 1.5cmで、下面周縁に幅約 1.3cmの切り欠きを施し、周縁を 0.9cmほどの薄さにしている。切り欠き部分にとじ穴が３ヶ所みられ、樺皮が残っている。

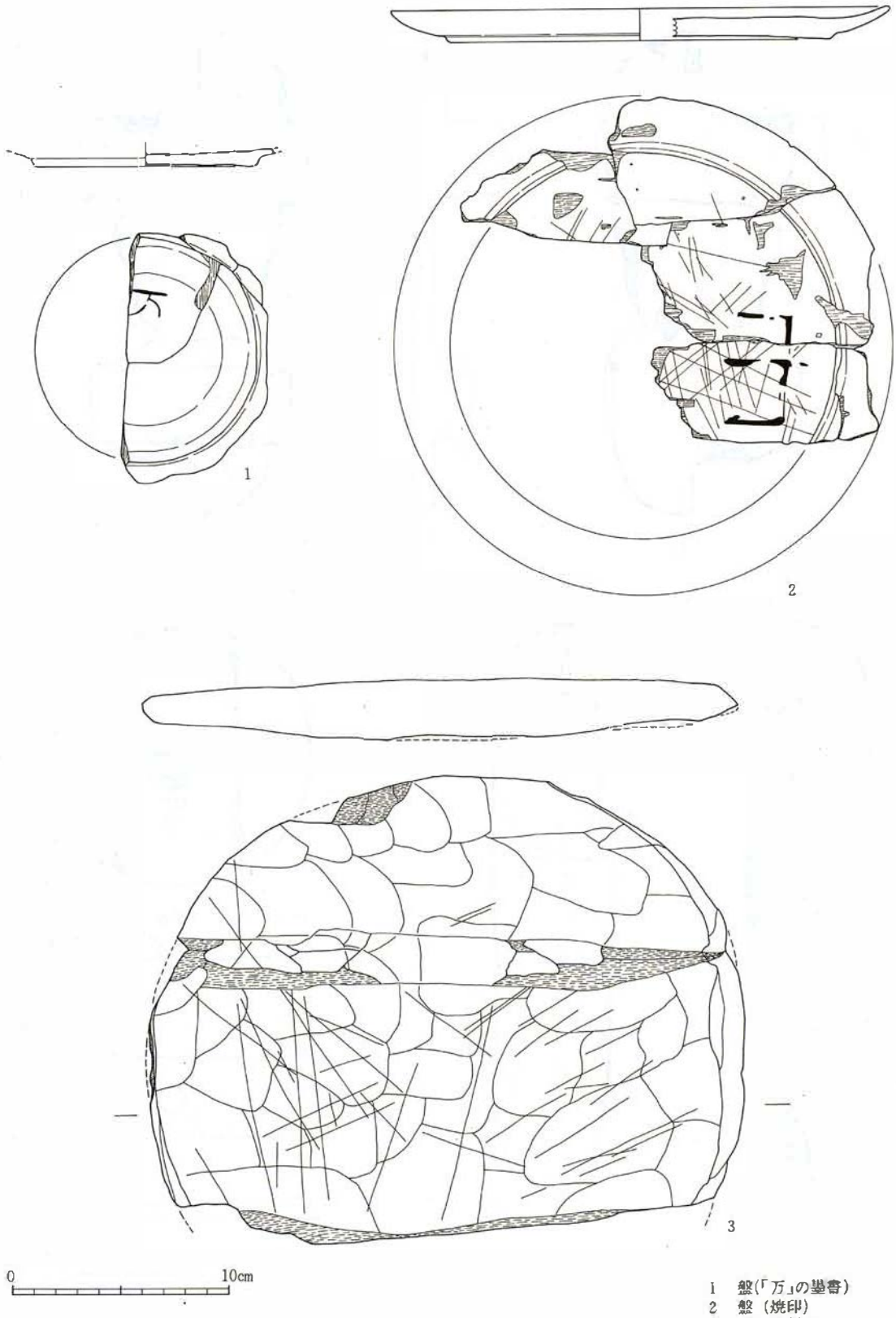
曲物底板は、円形を呈し、柾目板を素材としている。第26図３は、径12.0cm、厚さ 0.9cmで５ヶ所に木釘を打ち込んでいる。中央に一辺 1.0cmほどの孔を穿孔しており、内面全体には黒漆が塗られている。第26図４は、推定径15.9cm、厚さ 1.2cmほどで、木釘の痕跡が１ヶ所みられる。外面には不定方向の傷がみられ、中央部には径 1.2cmほどの孔が穿孔されている。第27図２は、約２分の１ほど残存しており、推定径25.7cm、厚さ 1.0cmである。木釘を打ち込んだ



第23図　出土遺物（木製品１）

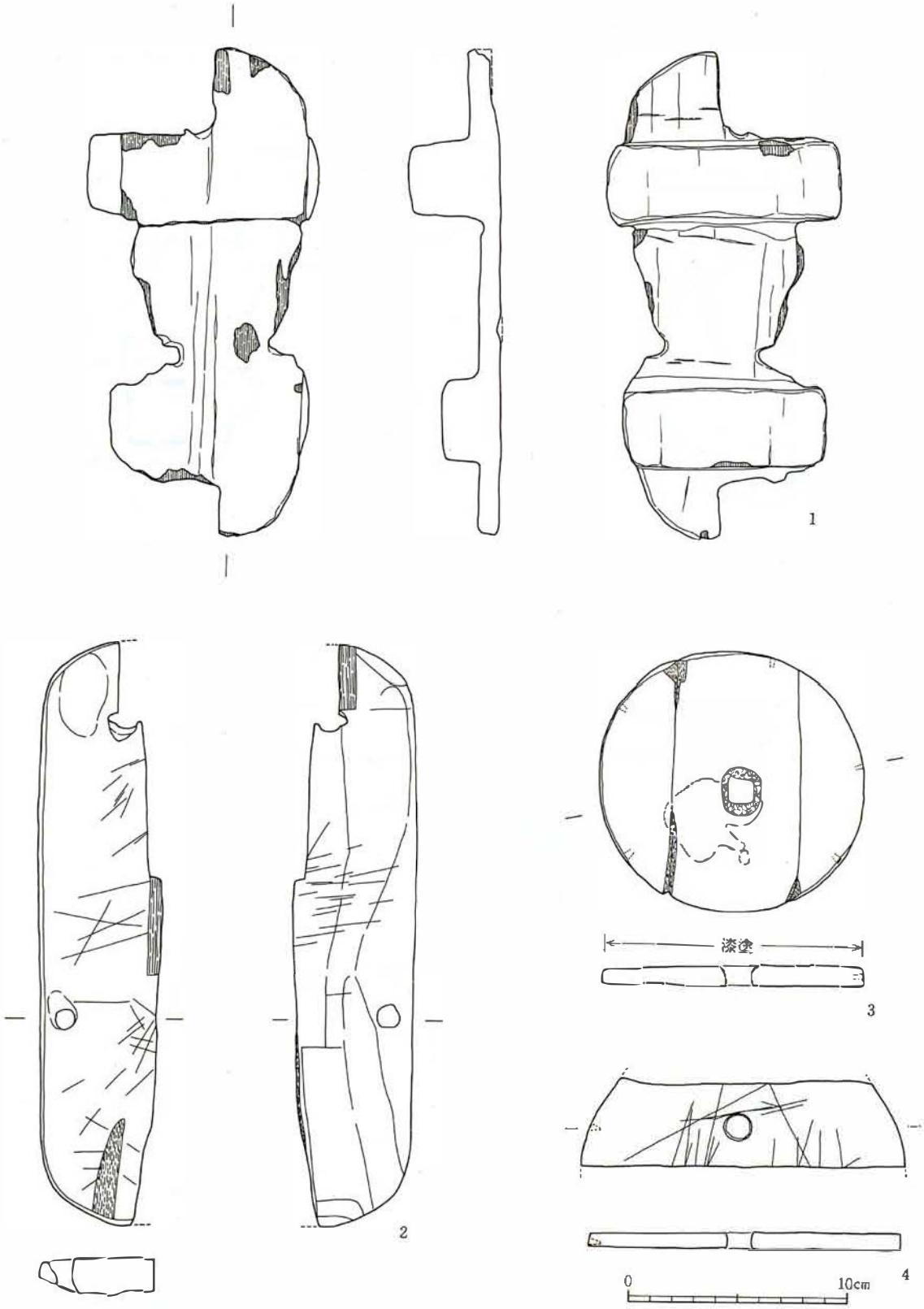


第24図　出土遺物（木製品2　盤）

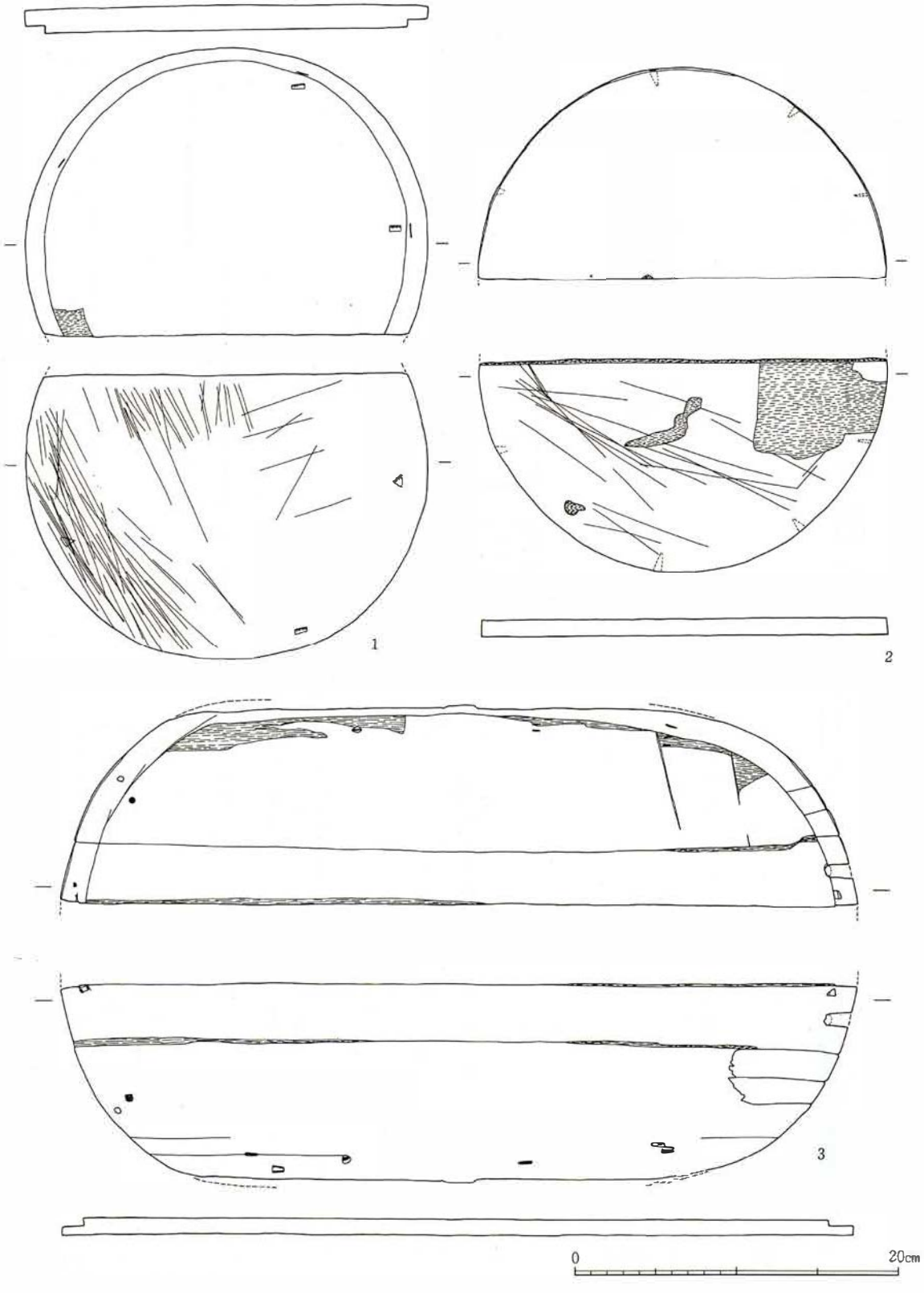


1　盤(「万」の墨書)
2　盤（焼印）
3　不明木製品

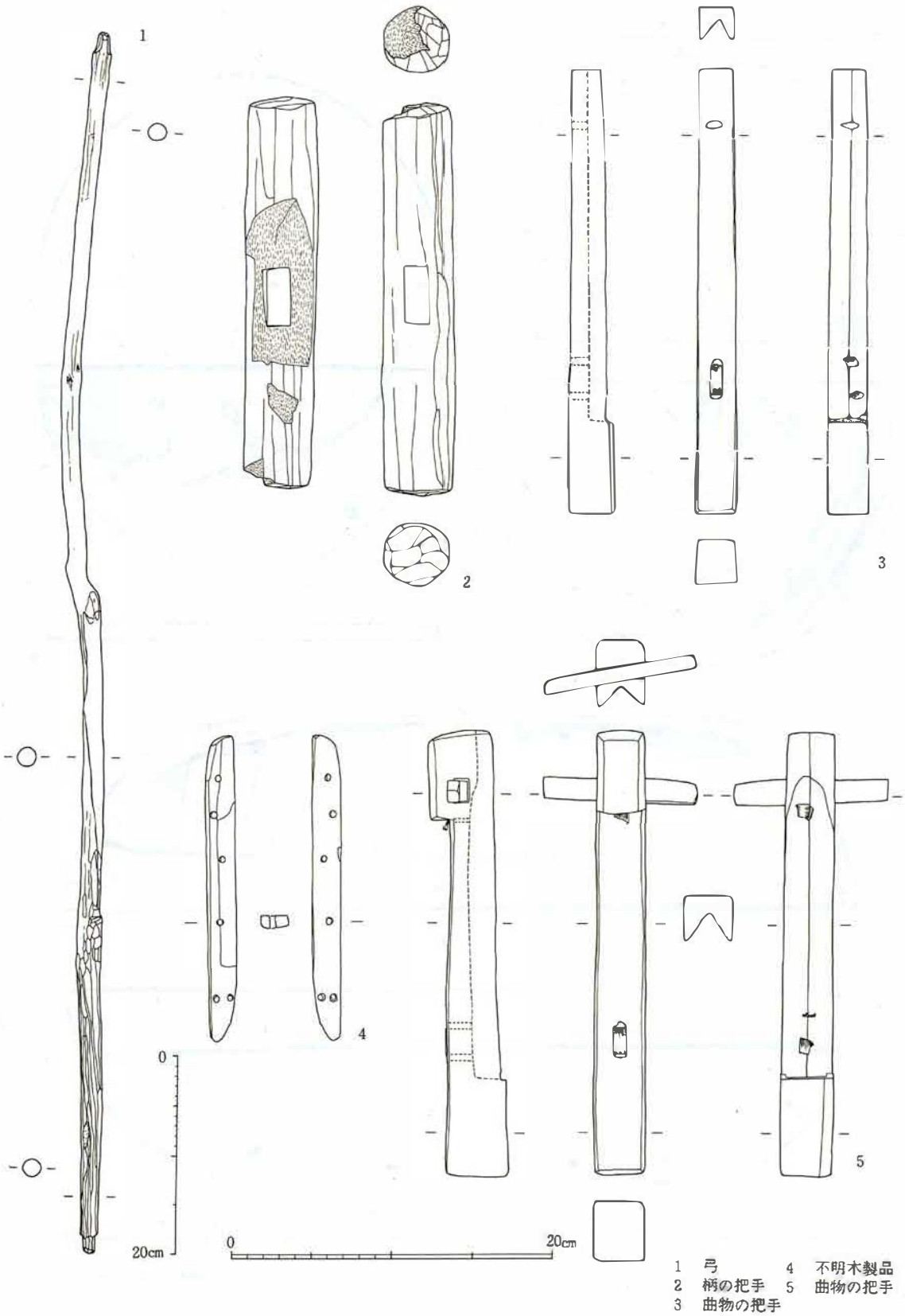
第25図　出土遺物（木製品３）



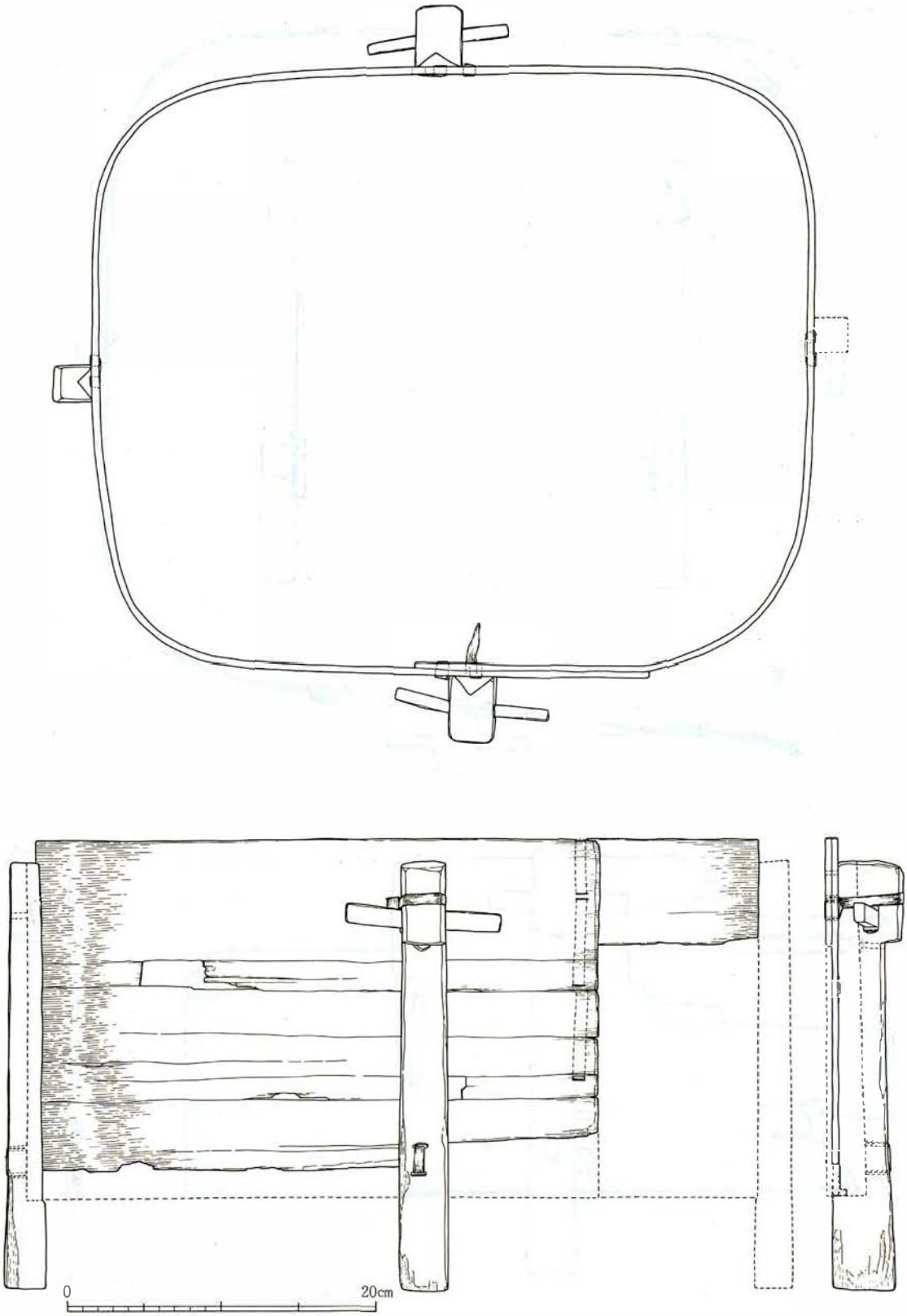
第26図　出土遺物（木製品4　下駄、曲物）



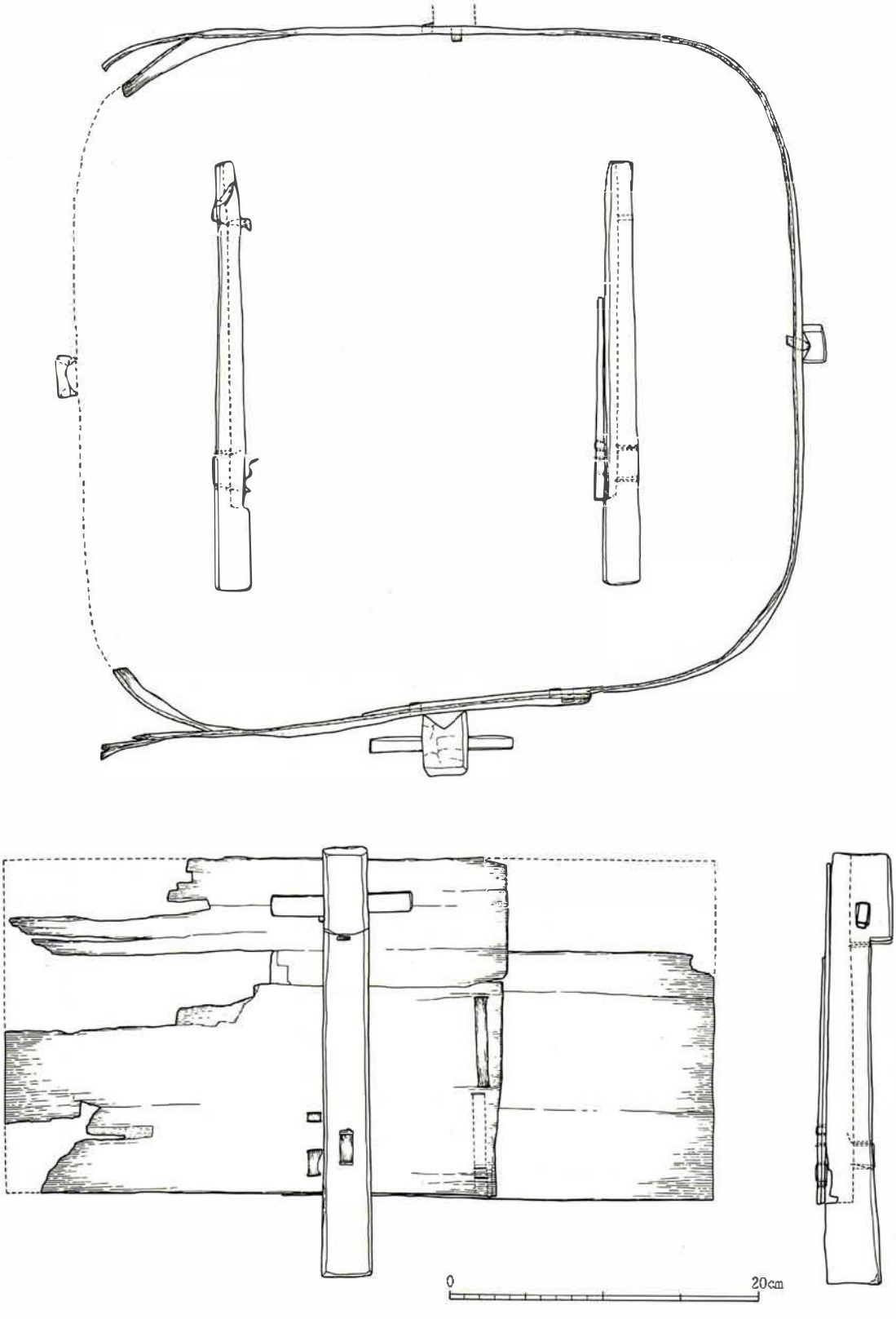
第27図　出土遺物（木製品５　曲物、折敷）



第28図　出土遺物（木製品6）



第29図　出土遺物（木製品7　曲物）



第30図　出土遺物（木製品8　曲物）

穴が4ヶ所にみられ、外面には不定方向の傷がみられる。

折敷（第27図3）は板目板を素材としており、約2分の1ほど残存し、長円形を呈するものである。長さは 1.1cmを計り、下面周縁に幅約 1.5cmの切り欠きを施し、周縁を 0.6cmほどの薄さにしている。この切り欠き部分に側板止めのとじ穴がみられ樺皮が残っている。

下駄は2点出土しており、いずれも連歯下駄である。第26図1は、小判形の台に歯をつくり出したもので、現存長22.3cm、高さは前歯で約 4.2cm、後歯で約 2.7cmを測り、後歯が極端にすり減っている。横緒孔は後歯に接し、歯は下方に開く。第26図2は半欠品で長さ約26.5cmである。前緒孔の左前方部に足づり痕が明瞭に残っていることから右足用と推定される。

もじり編み用の木製錘（第23図6）は短い棒状の中央を削って細くし、両端を面取りしている鼓形を呈する。大きさは長さ 4.5cm、最大径 5.3cm、中央のくびれ部で径 3.0cmである。

柄の把手は2点出土しているが、図示したものは1点だけである。第28図2はほぼ完形で、長さ23.3cm、径 4.2cmである。芯持材を使用しており、全体を削り整形している。両端部も面取りが施されている。中央部に長辺 3.5cm、短辺 1.5cmの孔を穿孔している。

弓（第28図1）は、ＳＤ０７溝の第2層より1点出土している。丸木の直弓で完形である。長さ 122.6cm、径 1.5～ 2.0cmを測り、全面に面取りを施しているが、摩滅により不明瞭な部分もある。両端部には2方向より削りを施し、長さ約 2.0cmの扁平な弭を作り出している。

この他にも多数の木製品が出土しているが、この中でも第28図4のように長さ19.0cm、幅 1.8cm、厚さ 0.8cmを測る板材に径約 0.3cmの孔を6ヶ所に穿孔した製品などがある。

Ⅳ　ま　と　め

今回の調査で検出した遺構は、古代の溝5条、農地整理前の旧農道とそれに伴う側溝2条である。ここでは、古代の遺構の年代について中心に述べることにする。

検出した溝の重複関係は、ＳＤ07→ＳＤ06→ＳＤ05→ＳＤ04→ＳＤ03となる。ＳＤ03・04溝は、第3層下面の第1次検出面で検出した。ＳＤ05・06・07溝は、第4層下面の第2次検出面において検出した。

ＳＤ05・06・07溝の堆積土から出土した土器類についてみると、土師器杯は、ロクロ使用のもので表杉ノ入式の範疇に入り平安時代全般に使用されたものである。須恵器杯は、分類したすべての種類が各溝より出土し、赤焼き土器も各溝から出土している。ＳＤ07溝は、10世紀前半頃に降灰したと考えられている灰白色火山灰が比較的浅い第2層に自然堆積していることより、灰白色火山灰が降灰した時期には、すでにこのＳＤ07溝は機能していなかったものと考えられる。さらに、赤焼き土器が灰白色火山灰の上層で数点みられるだけである。このことから、

表1　墨書土器一覧表

遺構	層位	墨書	器種・器形	墨書の位置	図版番号	備考
SD01	ℓ－3	墨痕	須恵器 高台杯	高台部外面		
SD03	ℓ－1	「万」	土師器　杯	体　部	第12図13	正位
SD04	ℓ－1	「ミ」	赤焼土器　杯	体　部		
	ℓ－2	「　」	土師器　杯	体　部		
SD05	ℓ－1	「万」　万	土師器　杯	底　部	第9図4	
	ℓ－1	「　」	土師器　杯	底　部		
	ℓ－1	「～」	土師器　杯	体　部	第9図6	
	ℓ－1	「余」　金	土師器　杯	底　部	第9図2	
		「午」		体　部		1個体
		「七」		体　部		1個体
		「鯉」鯉カ		体　部		1個体　倒位
	ℓ－1	「　」	須恵器　杯	体　部		
	ℓ－1	「ム」田カ	須恵器　杯	体　部	第15図11	
	ℓ－1	「小」?	須恵器　杯	体　部	第15図4	
	ℓ－1	「神」神カ	土師器　杯	体　部		
	ℓ－1	「十」「十」	土師器　杯	体　部	第11図1	2ヶ所にあり
	ℓ－1	「万」万カ	須恵器　杯	体　部	第16図1	
	ℓ－1	「ニ」?	土師器　杯	体　部		
	ℓ－1	「　」	赤焼土器　杯	体　部		
	ℓ－1	「丄」?	土師器　杯	体　部	第12図10	
	ℓ－1	「モ」?	土師器　杯	体　部		
	ℓ－1	「　」	土師器　杯	体　部		
	ℓ－2	「　」	須恵器　杯	体　部		
	ℓ－2	「山」	土師器　杯	底　部	第9図7	
	ℓ－2	「水」	土師器　杯	体　部	第12図4	倒位
	ℓ－2	「崋」	土師器　甕	体　部		戯画カ
SD06	ℓ－2	「寺」　寺	須恵器　杯	底　部	第15図3	「十」のヘラ書きあり
	ℓ－2	「瓦」瓦カ	須恵器　杯	底　部	第16図4	
SD07	ℓ－1	「　」	土師器　杯	体　部		
	ℓ－1	「　」萬カ	土師器　杯	体　部		
	ℓ－1	「奉」	須恵器　杯	体　部	第15図9	正位「養」・「養」?
	ℓ－1	「　」	土師器　杯	体　部		
	ℓ－2	「家」	土師器　杯	体　部	第12図6	
	ℓ－2	「　」	土師器　杯	体　部		
SD07	ℓ－2	「甲」カ	須恵器　杯	底　部	第16図6	
	ℓ－2	「卜」	土師器　杯	体　部	第12図11	
	ℓ－2	「示」カ	土師器　杯	体　部		倒位カ
	ℓ－2	「郡進」	須恵器　甕	体　部	第20図1	
	ℓ－2	「ク」	土師器　杯	体　部	第10図4	1個体
		「丨」		体　部		1個体
		「ハ」		体　部		1個体
	ℓ－2	「心」	土師器　杯	体　部	第11図2	1個体
		「盈」		体　部		1個体
	ℓ－2	「　」	土師器　杯	体　部		
	ℓ－2	「恵」　恵	須恵器　杯	体　部	第15図5	横位
	ℓ－2	「丨」	土師器　杯	体　部		
	ℓ－2	「田」　田	須恵器　杯	体　部		
	ℓ－2	「大」	須恵器　杯	体　部	第15図7	正位
	ℓ－2	「刈」?	土師器　杯	体　部	第11図7	正位カ
	ℓ－2	「入」　入	須恵器　杯	底　部		
	ℓ－3	「罔」	須恵器　杯	底　部	第15図1	「岡」
	ℓ－3	「辻」	須恵器　杯	体　部	第15図2	
	ℓ－3	「川」?	土師器　甕	体　部		
	ℓ－3	「奴」	須恵器　杯	体　部		戯画カ

ＳＤ07溝は、灰白色火山灰が降下する以前の９世紀に機能していたものと考えられる。ＳＤ05溝やＳＤ06溝は、ＳＤ07溝を切って構築していることや、ＳＤ05溝の堆積土中に灰白色火山灰がブロック状に含まれていることより、ＳＤ05溝は、灰白色火山灰が降下した後に構築されたものである。ＳＤ06溝は、ＳＤ07溝の切り合い関係より、ＳＤ07と05の間に位置づけられ、ＳＤ06溝廃絶後にＳＤ05溝が構築されている。

第１次検出面で検出したＳＤ03・04溝は、第４層より掘り込んで構築されていることやＳＤ05・06・07溝を切っていることより、ＳＤ03・04溝は、ＳＤ05・06・07溝廃絶後に構築されたものである。一方、出土遺物を検討すると、ＳＤ05・06・07溝より出土したロクロ使用の土師器、須恵器、赤焼き土器など平安時代に使用されたものが、ＳＤ03・04溝からもロクロ使用の土師器、須恵器、赤焼き土器が出土しているが、中世以降の遺物などは皆無であることより、ＳＤ03・04溝についても古代の遺構として把えられ、平安時代末期頃に機能していたものと考えられる。

次に古代の溝と多賀城の中軸線との関係についてみると、第２次検出面で検出したＳＤ05・06・07溝は、多賀城跡中軸線にほぼ平行に走るか、もしくは直交し構築されている。これに対し、第１次検出面で検出したＳＤ03・04溝は、方向性にばらつきがみられる。このことより、第２次検出面で検出した３条の溝は、多賀城の規格に基づいて構築された可能性があるが、第１次検出面で検出した２条の溝は、多賀城跡の規格がある程度緩和されたか、もしくは、規格の機能が失われた時期に構築されたものと思われる。

出土遺物は土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器、瓦などの他に約 150点もの木製品がある。この他に鉄製品や砥石がある。出土した遺物の傾向をみると、土器類では須恵器の出土量が多く、器種では杯が多い。木製品は、各溝より出土しているが、特にＳＤ05溝からの出土が多い。木簡や斎串、祭祀用具などの発見は注目される。さらに祭祀用具を出土したＳＤ06溝やＳＤ07溝からは、馬の骨や馬歯が出土しており、水と馬との祭祀的関係を示す可能性がある。

今回の調査では、溝だけが検出され、竪穴住居跡や掘立柱建物跡などの住居施設の遺構は検出されなかった。このことは、この地域の遺構検出面が海抜 2.2ｍ程の比較的低い低湿地帯であるため、この地域は居住するのに適していなかったものと思われるが、多量の土器や盤、椀、曲物、折敷、下駄などの生活用具の出土は、近接する場所に生活居住地域が存在したことが想定される。

〈引用・参考文献〉

岡田茂弘・桑原滋郎「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」『研究紀要』Ⅰ　宮城県多賀城跡調査研究所 (1974)

黒崎　直「斎串考」『古代研究』10 (1976)

桑原滋郎「多賀城における器物製作を示す二、三の資料」『研究紀要』Ⅴ　宮城県多賀城跡調査研究所 (1978)

古泉　弘「江戸の出土下駄」『物質文化』32　物質文化研究会 (1979)

鳥居良一「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要』Ⅶ　宮城県多賀城跡調査研究所 (1980)

浜松市教育委員会「伊場遺跡、遺物編Ⅰ」　伊場遺跡発掘調査報告書第3冊 (1978)

福島県教育委員会「御山千軒遺跡」『東北新幹線関連遺跡発掘調査報告Ⅵ』福島県文化財調査報告書第109集 (1983)

水野正好「祭礼と儀礼」『古代史発掘10　都とむらの暮らし』　講談社 (1974)

宮城県教育委員会「市川橋、山王遺跡」『宮城県文化財発掘調査略報 (昭和53年度分)』 宮城県文化財調査報告書　告書第57集 (1979)

宮城県教育委員会「上新田遺跡」　宮城県文化財調査報告書第78集 (1981)

宮城県教育委員会「多賀城市高崎水入遺跡発掘調査報告書」　宮城県文化財調査報告書第84集 (1982)

宮城県多賀城跡調査研究所「第22次発掘調査」『多賀城跡調査研究所年報』1973 (1974)

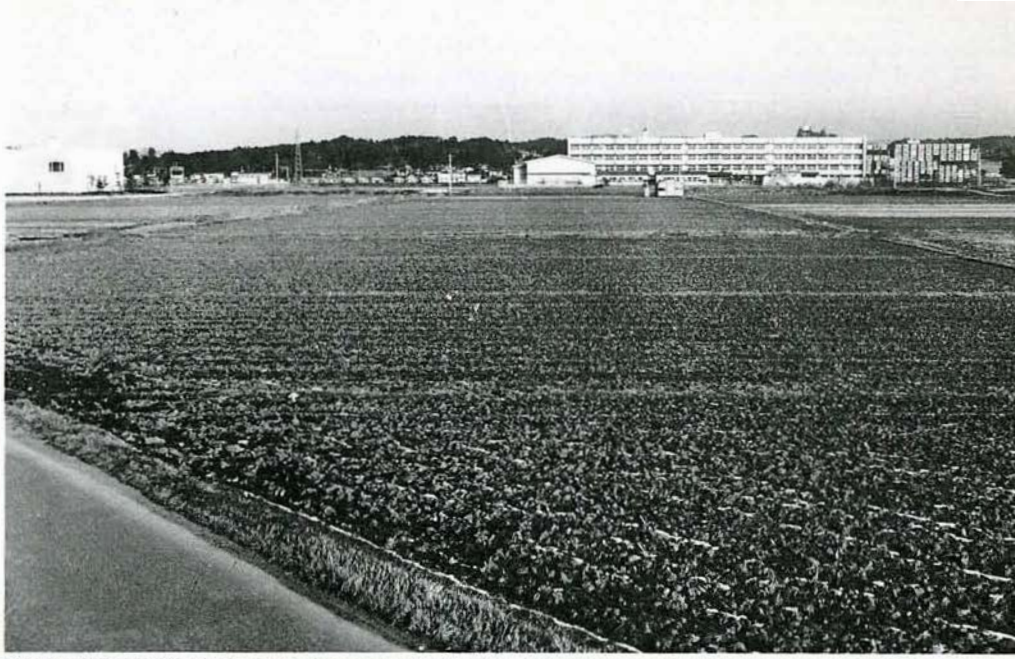
宮城県多賀城跡調査研究所「第34・35次発掘調査」『多賀城跡調査研究所年報』1979 (1980)

宮城県多賀城跡調査研究所「第37次発掘調査」『多賀城跡調査研究所年報』1980 (1981)

宮城県多賀城跡調査研究所「第38次発掘調査」『多賀城跡調査研究所年報』1981 (1982)

渡辺　誠「もじり編み用木製錘の考古資料について」『考古学雑誌』第66巻第4号 (1981)

図版１
調査地区遠景
（南側より）



図版２
旧農道・ＳＤ０１・０２溝
（北側より）

図版３
ＳＤ０３・０４溝
（東側より）

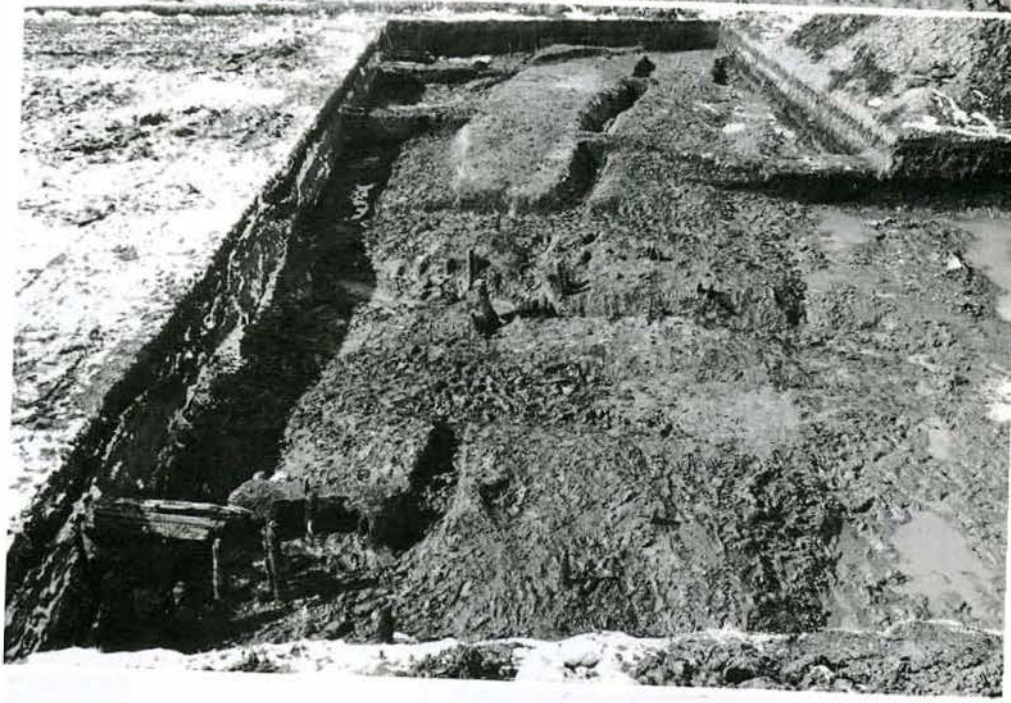
図版4
ＳＤ０３・０４・０７溝
（北側より）

図版5
ＳＤ０７溝
（西側より）

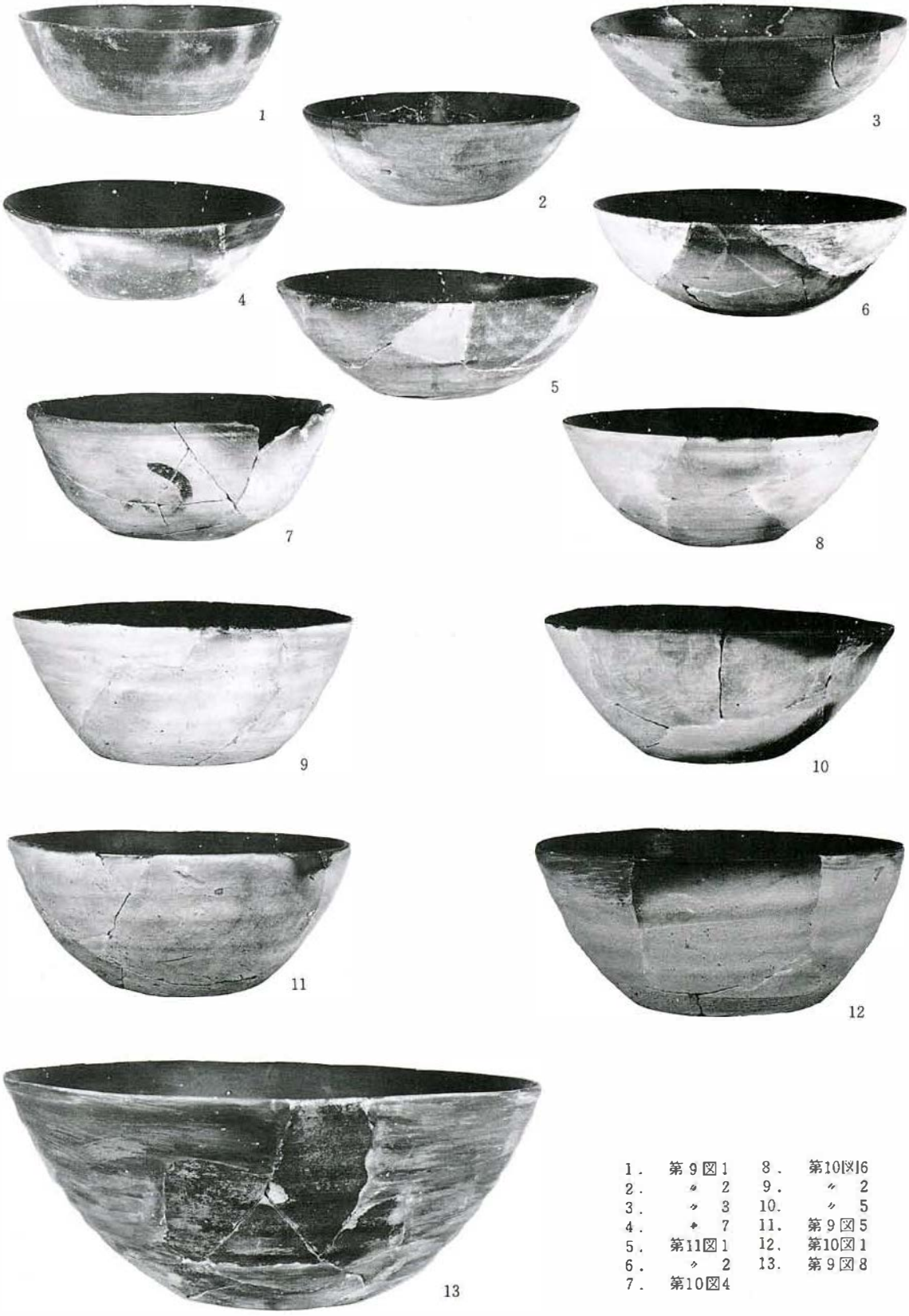
図版6
ＳＤ０６溝
（南側より）

図版7
曲物出土状況
（ＳＤ０５溝）

図版8
調査地区西側
（東側より）

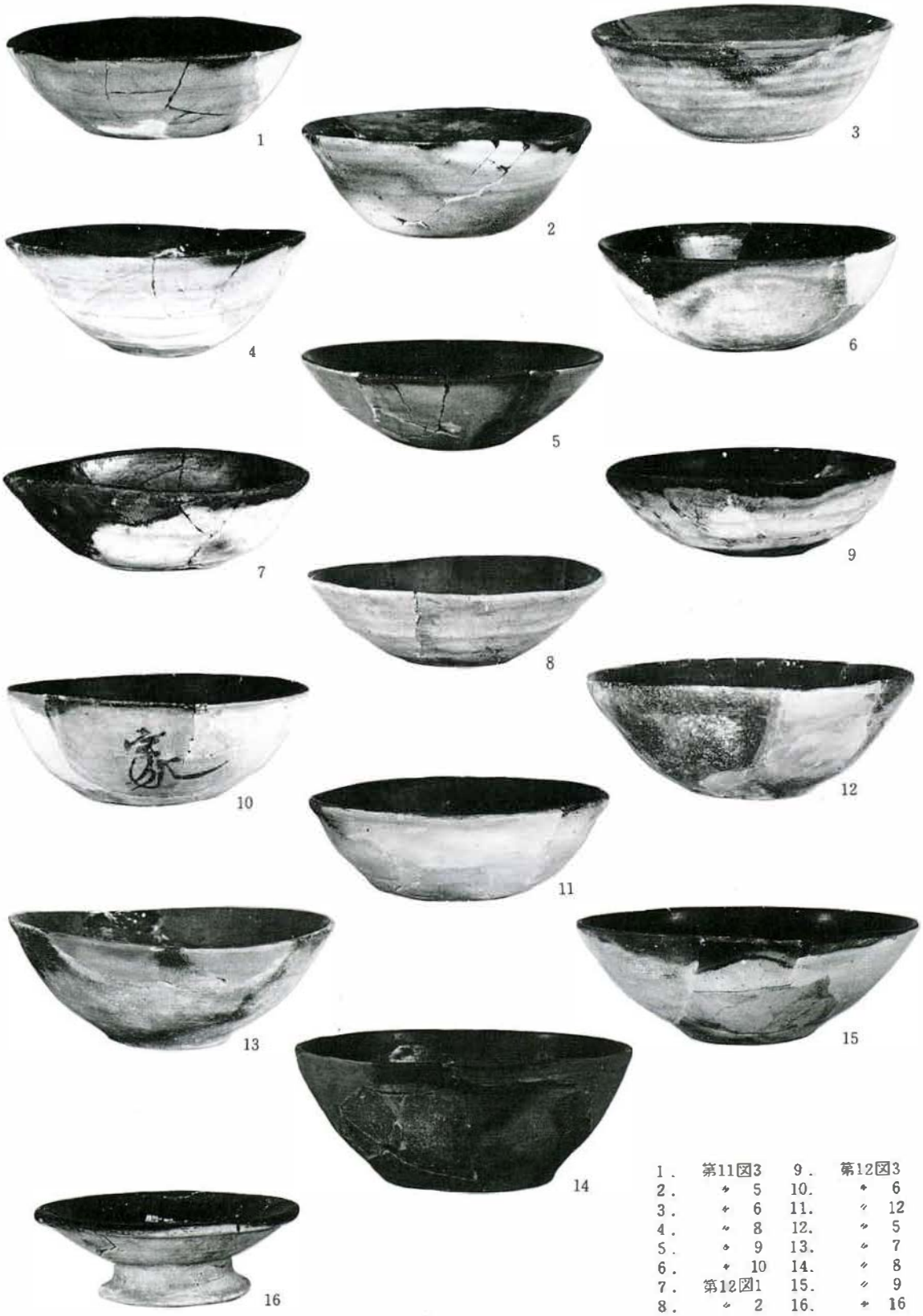


図版９
調査地区全景
（東側より）



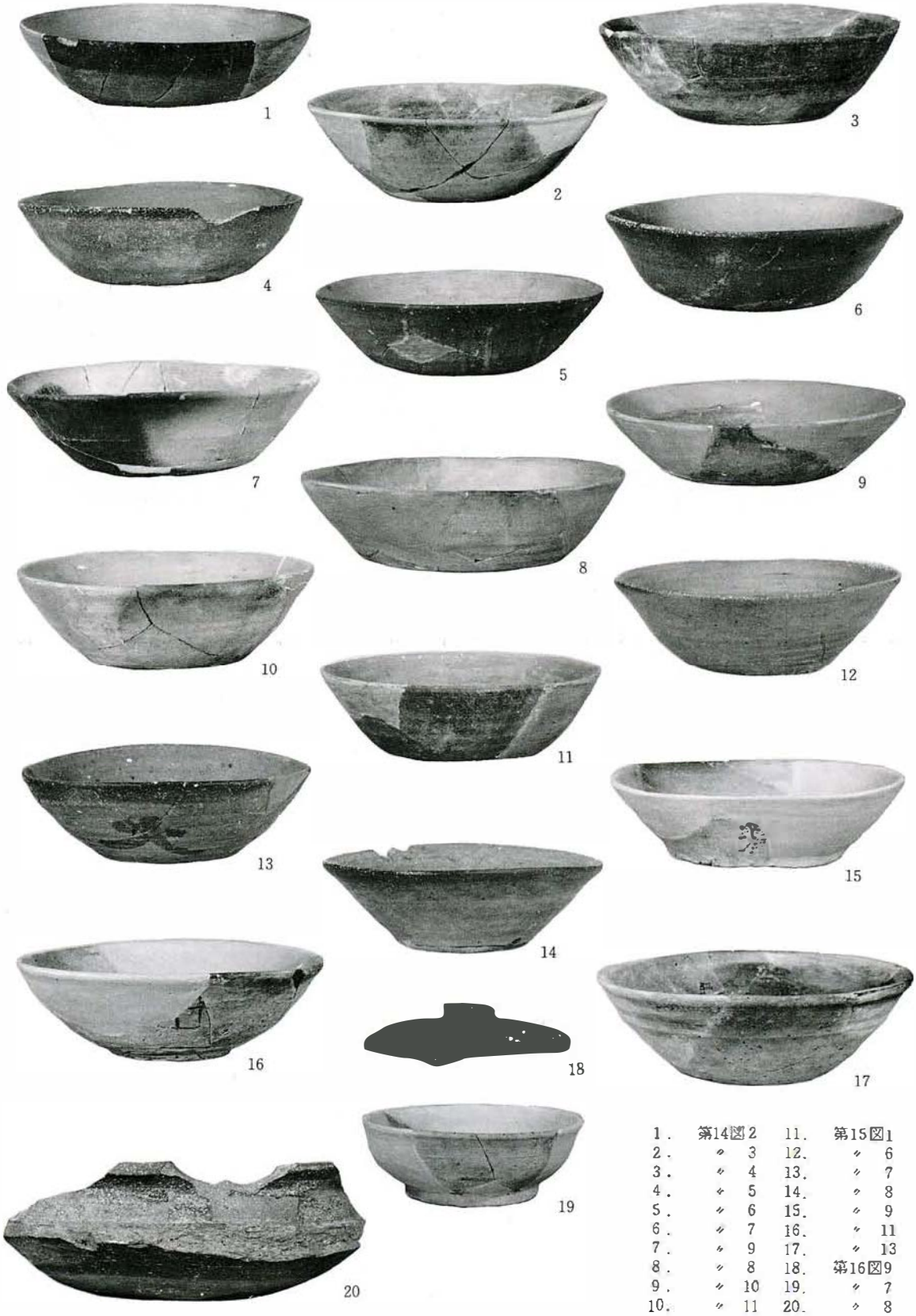
1．　第9図1
2．　〃　2
3．　〃　3
4．　〃　7
5．　第11図1
6．　〃　2
7．　第10図4
8．　第10図6
9．　〃　2
10．　〃　5
11．　第9図5
12．　第10図1
13．　第9図8

図版10　出土遺物



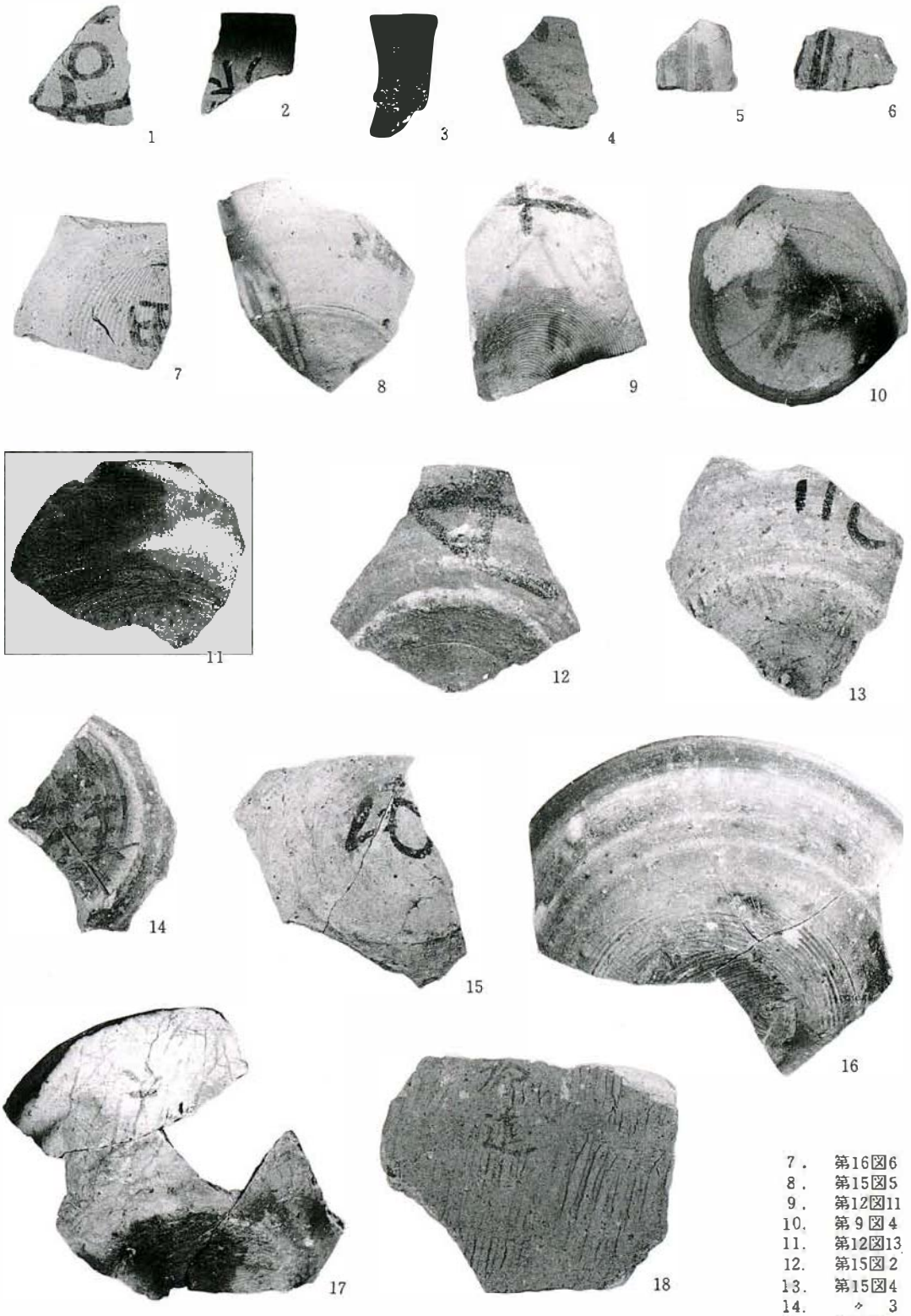
1.	第11図3	9.	第12図3
2.	〃 5	10.	〃 6
3.	〃 6	11.	〃 12
4.	〃 8	12.	〃 5
5.	〃 9	13.	〃 7
6.	〃 10	14.	〃 8
7.	第12図1	15.	〃 9
8.	〃 2	16.	〃 16

図版11　出土遺物



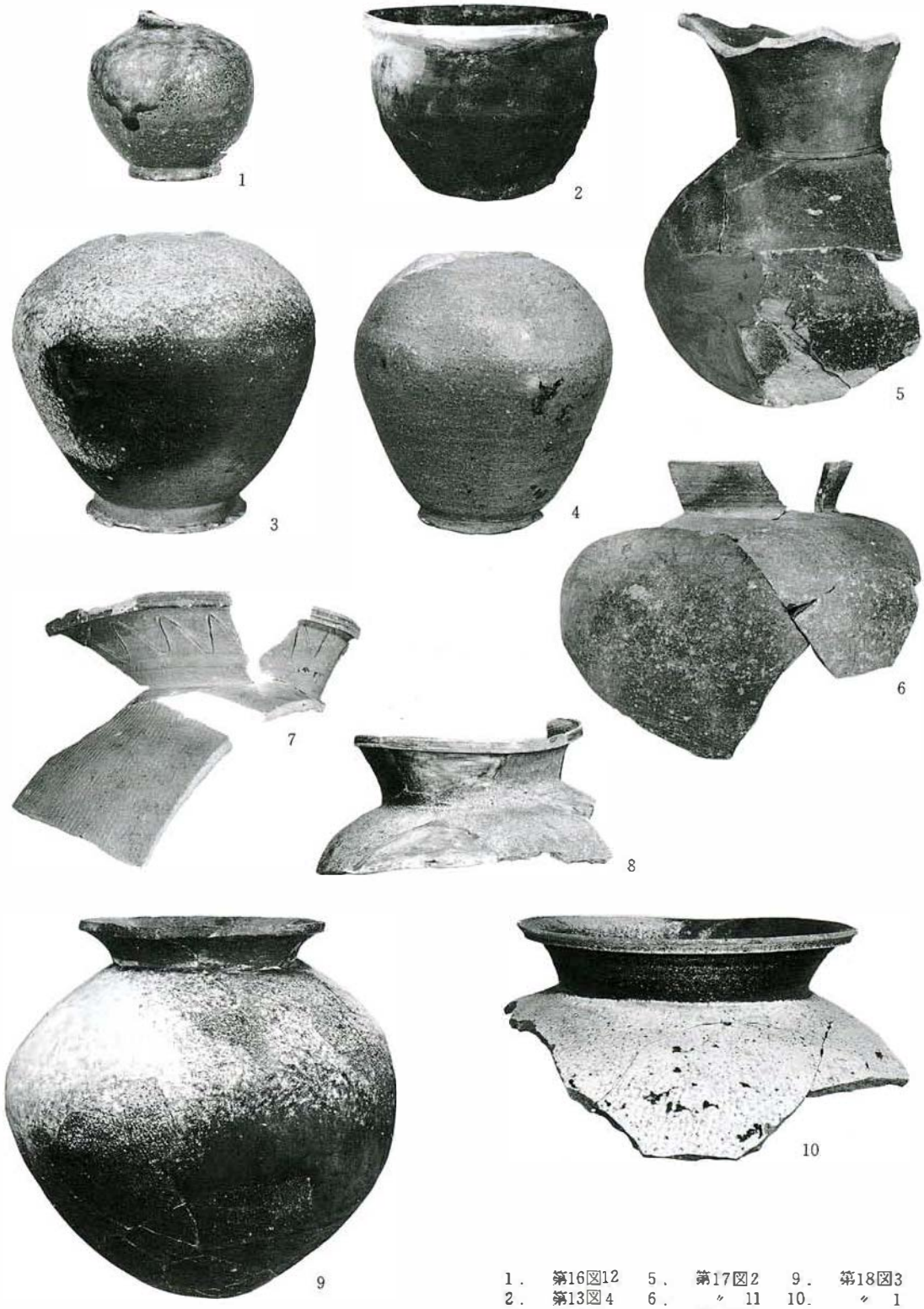
1.	第14図2	11.	第15図1
2.	〃 3	12.	〃 6
3.	〃 4	13.	〃 7
4.	〃 5	14.	〃 8
5.	〃 6	15.	〃 9
6.	〃 7	16.	〃 11
7.	〃 9	17.	〃 13
8.	〃 8	18.	第16図9
9.	〃 10	19.	〃 7
10.	〃 11	20.	〃 8

図版12　出土遺物



7．　第16図6
8．　第15図5
9．　第12図11
10．　第9図4
11．　第12図13
12．　第15図2
13．　第15図4
14．　〃　3
15．　第16図4
16．　〃　1
17．　第12図4
18．　第20図1

図版13　出土遺物（墨書土器）

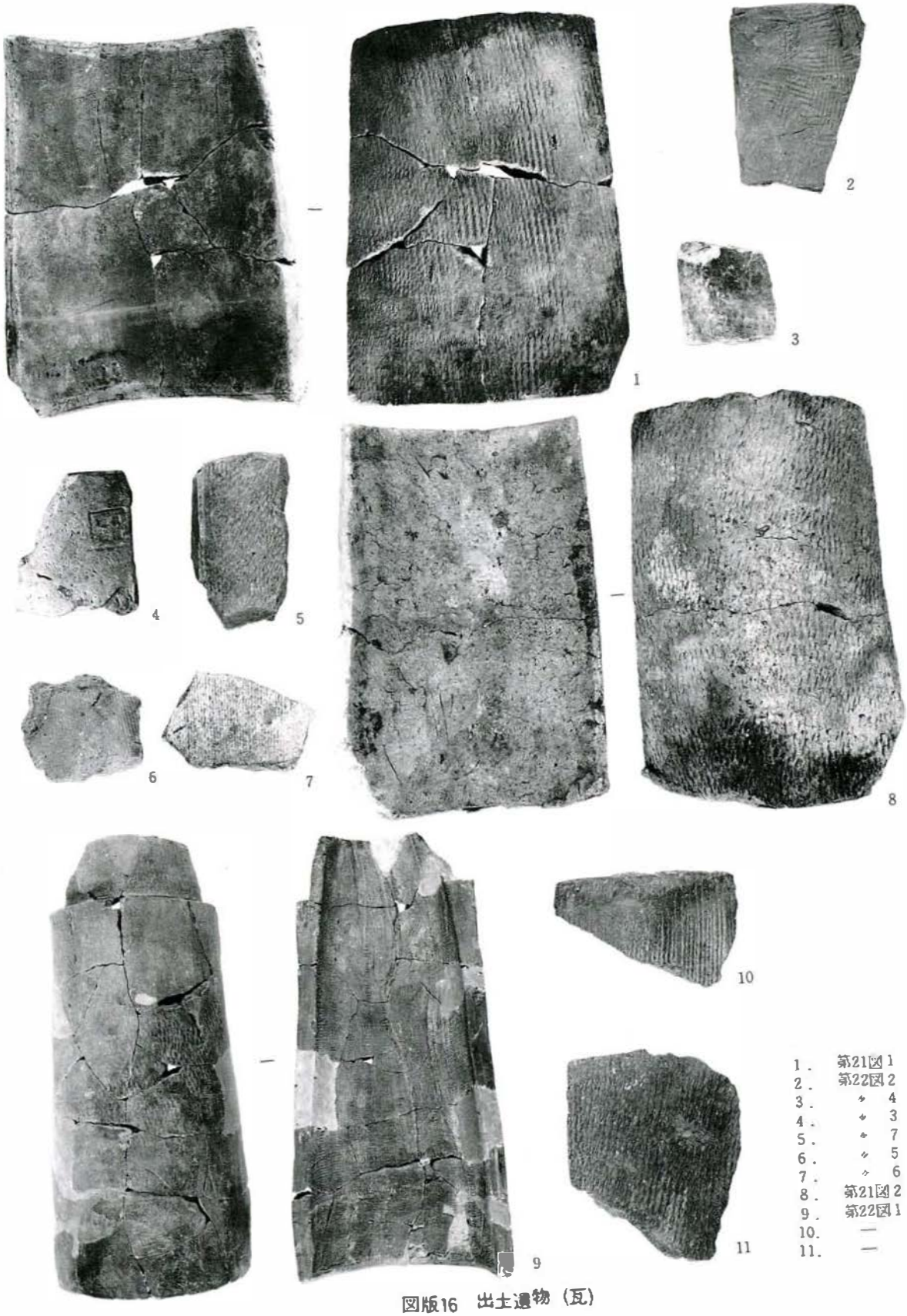


1．　第16図12　5．　第17図2　9．　第18図3
2．　第13図4　6．　〃　11　10．　〃　1
3．　第17図1　7．　第19図2
4．　〃　6　8．　〃　6

図版14　出土遺物

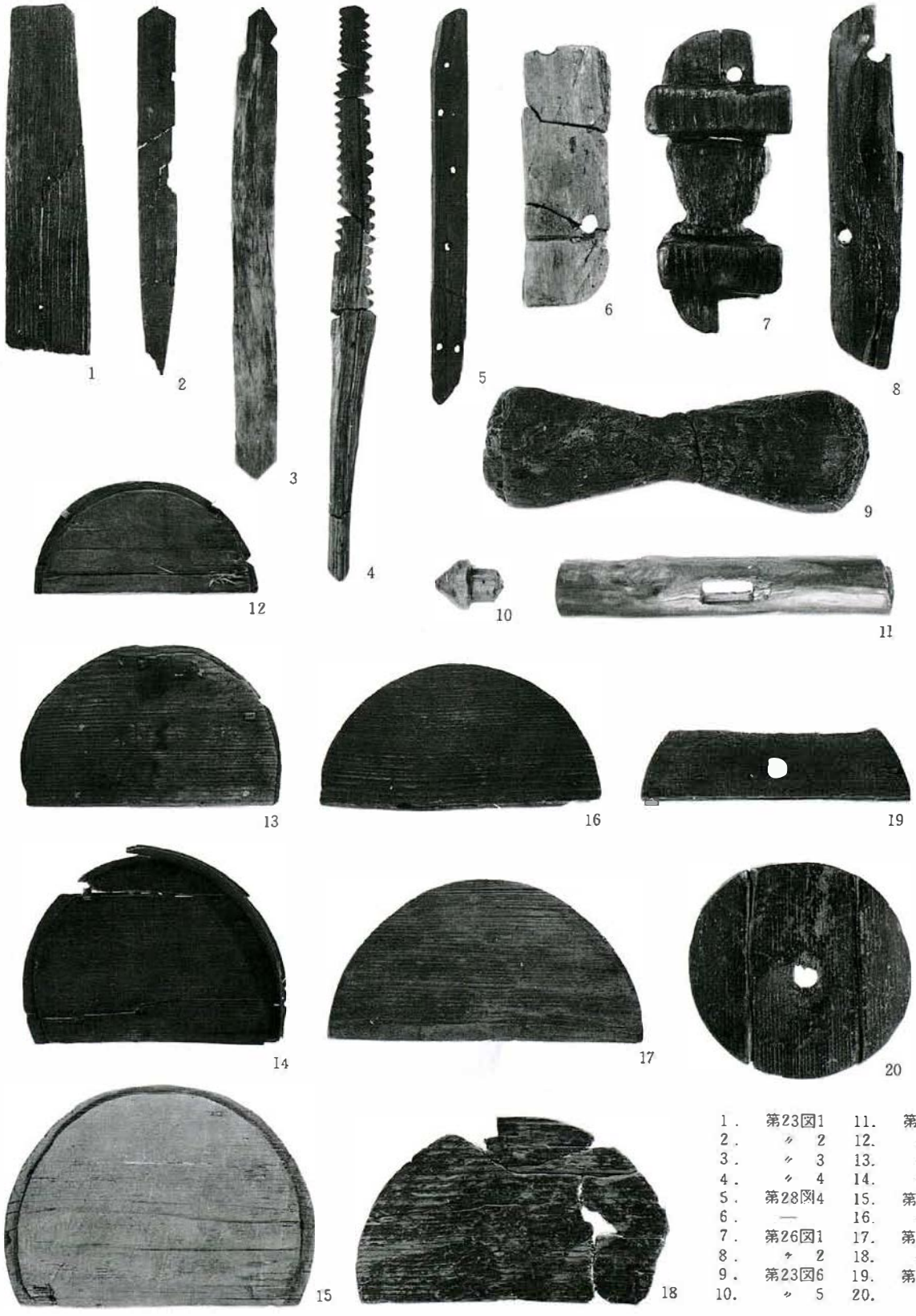
1．　第20図2
2．　〃　3
3．　〃　5
4．　〃　6
5．　〃　7
6．　〃　8
7．　〃　9
8．　〃　10
9．　〃　11
10．　〃　12
11．　〃　13
12．　〃　14
13．　〃　15

図版15　出土遺物



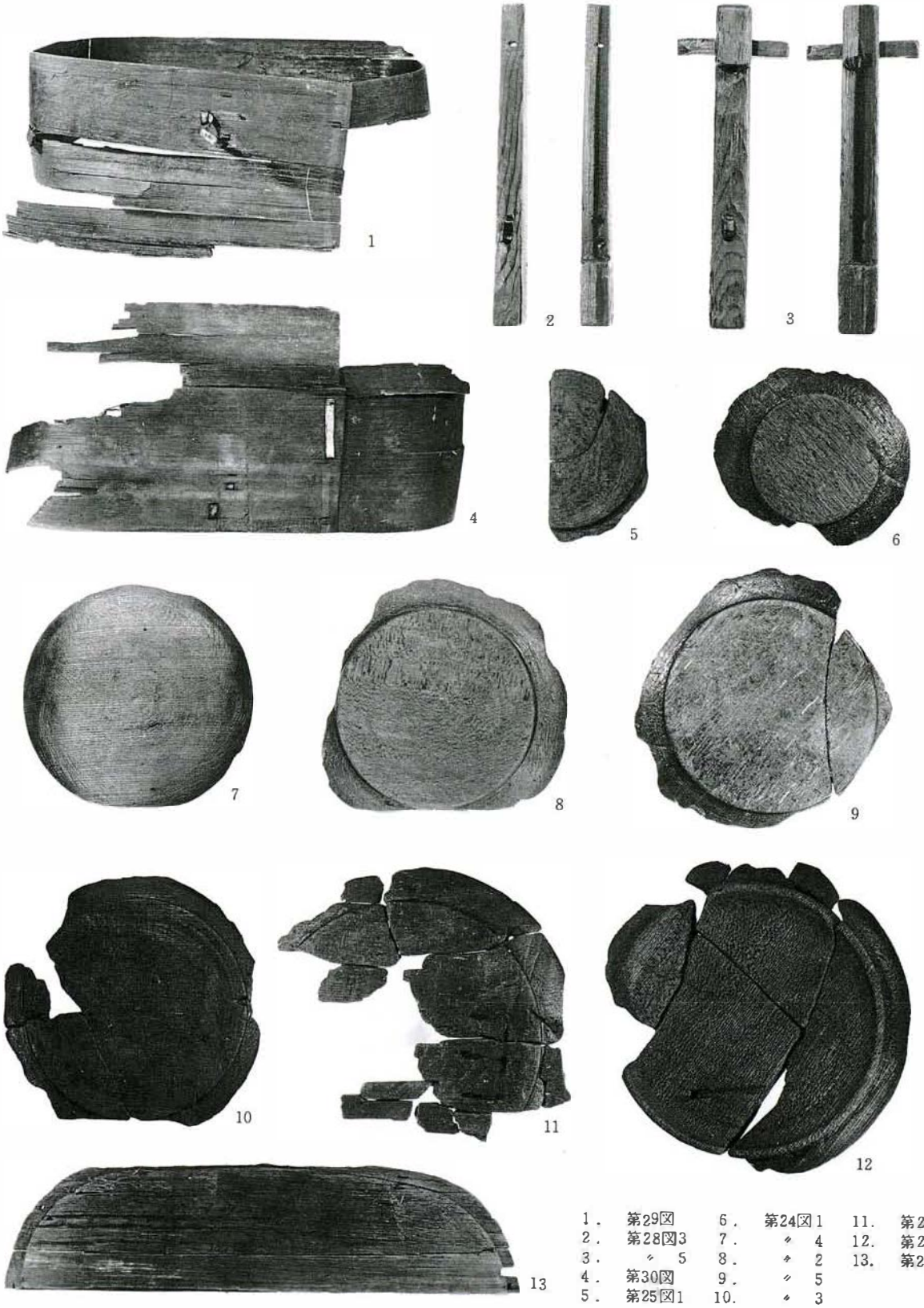
1. 第21図 1
2. 第22図 2
3. 〃 4
4. 〃 3
5. 〃 7
6. 〃 5
7. 〃 6
8. 第21図 2
9. 第22図 1
10. —
11. —

図版16　出土遺物（瓦）



1.	第23図1	11.	第28図2
2.	〃 2	12.	—
3.	〃 3	13.	—
4.	〃 4	14.	—
5.	第28図4	15.	第27図1
6.	—	16.	—
7.	第26図1	17.	第27図2
8.	〃 2	18.	—
9.	第23図6	19.	第26図4
10.	〃 5	20.	〃 3

図版17　出土遺物（木製品）



1．第29図
2．第28図3
3．〃 5
4．第30図
5．第25図1
6．第24図1
7．〃 4
8．〃 2
9．〃 5
10．〃 3
11．第25図2
12．第24図7
13．第27図3

図版18　出土遺物（木製品）

多賀城市文化財調査報告書第５集

市川橋遺跡調査報告書

－ 昭和58年度発掘調査報告 －

昭和59年３月31日発行

編　集　多賀城市教育委員会
発　行　多賀城市中央二丁目１番１号
　　TEL (02236) ８－１１４１
印　刷　㈱東北プリント
　　仙台市立町２４番２４号
　　TEL (0222)63－１１６６㈹